續國譯漢文大成

文學部　七十九

309
65
検入

始

續國譯漢文大成

文學部 第七十九册（第二十帙の三）

高青邱詩集 二の三

吉田德郎氏 寄贈本

309
65

高青邱集卷七

五言古詩

曉臥丁校書軒

窓月澹欲失。(一)曨曨逼初曙。(二)
屋外鳥聲多。應知有嘉樹。(三)
殘香掩幽寢。(四)末事澄紛慮。(五)
頗似宿東巖。(六)僧齋竹深處。

【字解】【一】曨曨　おぼろに模糊たる貌。【二】初曙　やつと明けかかつた頃。【三】嘉樹　花の澤山に咲いて居る木。【四】末事　瑣細な事、世間の俗事。【五】紛慮　亂れたる思。【六】東巖　その地は不詳で、金檀も何とも注してない。

【題義】丁校書は、前に卷六、江上過丁校書宅」留飲とあつた、その丁校書である。軒は書齋。もと、車、或は車の前の高くなつた部分を指したが、轉じて、檐宇の末、又前檐の特起せる殿堂を云ひ、更に汎く書齋の義にも用ふることに成つた。この詩は、丁校書の宅に一宿し、その翌曉、目の覺めた時

に作つたので、態と題を此の如く書いたものと見える。

【詩意】窓前の殘月は、光り薄くして、見えなくなり、あたりは仄白く、どうやら、夜あけに成りかかつた。屋外に鳥聲の多きは、花の澤山咲いて居る木のあることを知つて居る爲であらう。ここに寮て居ると、その花の名殘の香に掩ひ包まれるばかり、世間の俗事などは、全く忘れて、亂れたる思も、奇麗に澄み切つて仕舞ひ、かの東巖の叢竹深き處に在る僧齋に一宿した樣な心持がした。

【餘論】前半は、曉天の景色、後半は感懷。七八の二句は、東巖以下七字で一の意味を爲すので、一種の奇格である。

水上盥手

水上に手を盥ふ

盥手愛春水。水香手應綠。
手を盥して春水を愛す、水は香しくして手應に綠なるべし。

沄沄細浪起。杳杳驚魚伏。
沄沄として細浪起り、杳杳として驚魚伏す。

怊悵坐沙邊。流花去難掬。
怊悵、沙邊に坐す、流花、去つて掬し難し。

【字解】〔一〕盥手　盥は、說文に「手を澡ふなり」とあり、增韻に「盤水を以て沃洗するを盥といふ」とある。洗ふ、そそぐ。
〔二〕沄沄　ひたひたと水の漲る貌、杜甫の詩に沄沄逆二素浪一とある。

【題義】水上は水邊、つまり流に臨んで手を洗ふことを詠じたのである。

【詩意】手を洗ふには、春の水が一番心持がよく、水は香しくして、手も綠色に染まつた樣な氣がする。その手を洗ふ間、水は沄沄として細浪起り、杳杳として驚いた魚は底深く匿れて仕舞ふ。しかし、沙岸に坐して怊悵の念に堪へざるは、流れゆく落花を掬ひ取つて、行く春を留め得ざることである。

【餘論】何でもない瑣細の事實を詠出したのであるが、多少の趣致あるは、卽ち巧に之を詩化したからで、亦た以て作者才思の一端を窺ひ知ることが出來る。

贈漫客

漫客に贈る

畸人誠達生。聲叟亦曠士。
畸人は誠に達生、聲叟も亦た曠士。

漫客乃其徒。放意在雲水。
漫客は乃ち其徒、意を放にするは雲水に在り。

有山卽漫游。有竹仍漫止。
山あれば卽ち漫游、竹あれば仍ほ漫止。

漫吟不求工。漫飲不須美。
漫吟、工を求めず、漫飲、美を須ひず。

與物無留情。所適皆漫爾。
物と情を留むるなし、適するところ、皆漫爾。

人生本漫寄。何事紛戚喜。人生、本と漫寄、何事ぞ、紛として戚喜する。
與子作漫交。逍遙論茲理。子と漫交を作す、逍遙、この理を論せむ。

【字解】〔一〕畸人　かはり者、莊子の大宗師に「畸人は、人に畸にして、天に侔し」とある。〔二〕逵生　逵士、逵人に同じ、道に達した人。〔三〕犨叟　唐の元結の號、その自釋に「犨叟は、鄰里に犨爵たるを羞ぢず、吾、安んぞ人間に浸淫するを慙ぢむ」とあり、又「能く犨牙を學び、宗を保つて家を全うし、自ら犨叟と號す」とある。犨牙は相聽かざること。〔四〕曠士　曠は曠闊、曠途。〔五〕漫止　漫然として止まる。〔六〕無留情　情思を留めない、眷戀しない。〔七〕漫寄　漫然として生を宇宙の間に寄せる。〔八〕戚喜　戚は憂ふ。

【題意】漫客は、別號に相違ないが、何人か分からぬ。

【詩意】畸人こそ、まことに逵士であるし、犨叟も、亦た曠懷の士である。漫客も、卽ち其仲間であつて、平生、意を雲水の間に縱にして居る。そこで、山があれば、卽ち漫然として其處に游ぶし、竹があれば、矢張漫然として其邊に止まつて居る。加之、漫然、吟詠を試みて、その巧なることを求めず、漫然、酒を飲んで、格別味の良いのを求めない。外物に對しては、少しも情を留めず眷戀することなく、その出合ふところに就いては、すべて漫然として、あまり深く氣にも留めない。元來人の一生は、本と漫然として宇宙の間に寄寓して居るに過ぎざるが故に、紛紛として、或は憂へ、或は喜ぶも、實は馬鹿げた事である。ここに、君と漫然として相交つて居るので、ともに逍遙して、この道理を詳しく論じて見たいと思ふ。

【餘論】起四句は總提、次の六句は、萬事に就いて漫なることを云ひ、人生本漫寄の四句は、漫が卽ち人生の眞なることを言うて解釋し、更に逍遙の中に至理を論究せむことを勸めたのである。通篇、わざと漫の字を疊んだのは、一種の修辭法である。そして、人生本漫寄の二十字は、まさしく、一面の道理を道破したものである。

晝睡甚適。覺而有作

晝睡甚だ適す、覺めて作あり

閒居況懶拙。盡日無營爲。
掩室聊自眠。一榻委四肢。
向暄思益昏。南窓滿晴曦。
吾神誰能縶。八表從所之。
殷憂常苦縈。茲焉忽如遺。
有身不自省。此外安得知。

閒居、況んや懶拙、盡日、營み爲すなし。
室を掩うて、聊か自ら眠り、一榻、四肢を委す。
暄に向つて、思、益す昏く、南窓、晴曦滿つ。
吾が神、誰か能く縶がむ、八表、之くところに從す。
殷憂、常に縈るに苦み、ここに忽として、遺れたるが如し。
身あるも、自ら省みず、この外、安んぞ知るを得む。

覺來鄰雞鳴。已過亭午時。　覺め來つて、鄰雞鳴き、すでに亭午の時を過ぐ。
如游釣天還。至樂不可追。　釣天に游んで歸るが如く、至樂、追ふべからず。
我意在有適。寧顧朽木嗤。　我が意は、適あるに在り、むしろ、朽木の嗤を顧みむや。
猶勝夸毗子。塵中爭走馳。　猶ほ勝る夸毗の子、塵中爭つて走馳するに。

【字解】【一】懶拙　疎懶にして世わたりの拙なること。【二】貴爲　經營して爲す。【三】掩室　部屋をしめ切る。【四】一榻　榻は安樂椅子。【五】四肢　手足。【六】向暄　暄は溫暖なること。【七】苦榮　榮はめぐる、まとひ付く。【八】八表　晉書食貨志に見え、八方と同義、四方と四隅。【九】殷憂　盛なる憂。【一〇】榮　榮はつなぐ。【一一】亭午　梁の元帝纂要に「日、午に在るを亭午といふ」とある。【一二】游釣天　史記趙世家に「趙簡子、疾むこと五日、人を知らず、大夫皆懼る。居ること二日半、簡子寤めて曰く、我、帝の所に之き、甚だ樂し、百神と鈞天に遊び、廣樂九奏萬舞」とある。鈞天は九天の一で、その中央に在る。【一三】朽木嗤　嗤は笑。論語に「宰予、晝寢ぬ、子曰く、朽ちたる木は彫るべからざるなり、糞土の牆は杇るべからざるなり、予に於てか何ぞ誅せむ」とあつて、その怠慢にして、物の役に立たぬことを責められたのである。【一四】夸毗　詩の大雅に無ㇾ爲三夸毗一とあり、爾雅の疏に「夸毗は體柔なり」とある。

【題義】晝寢をした處が、ひどく心持が善かつたから、覺めて後に、この詩を作つたといふのである。

【詩意】閉居して、世と相隔てたるが上に、疎懶にして、萬事に拙なれば、終日何を營み爲すといふこともなく、一室をしめ切つて、聊か眠らむとし、一脚の安樂椅子の上に手足を伸ばして横はつた。南窓には、晴れた日の光が一ぱい當り、ぽかぽかと暖いので、うつらうつらとして、氣も遠くなつた。吾が心神は、誰か能く繫ぎ留むべき、自在に飛游して、四方四隅、勝手次第に行き巡つて居る。平生は、盛なる憂にまとひ付かれて、弱りはてて居たが、この場合、飄忽として、そんな事は、丸で忘れた樣である。この身體は、ちやんと有るけれども、それだに自ら省みず、この以外、どうして、知ることが出來やうか。やがて、眠が覺めると、丁度、鄰家の雞が鳴いて、すでに正午を過ぎて居た。おもひ運らせば、さながら、鈞天に游んで還りしが如く、この上もない樂は、最早追求することが出來ない。わが意は、自適といふことを第一として居るので、朽ちたる木の彫るべからざるが如くであるといつて、笑はれ、叱られることなどは、少しも顧みず、それでも、かの五體柔軟にして、趨走使役に都合よき人が、風塵中に在つて、區區たる利名を求めるが爲に、奔走するに比すれば、聊か立ち優つて居ると思ふ。

【餘論】起六句は晝睡、吾神誰能繫の六句は、晝睡中に於ける恍惚たる光景。覺來鄰雞鳴の四句は、睡の覺めしこと、我意在ㇾ有ㇾ適の四句は、その甚だ適するを道うて、自ら疎懶なるを慰藉し、且つ解釋したのである。

秋日端居

秋意日蕭索。郊園霜露餘。　秋意、日に蕭索、郊園、霜露の餘。

出遊無山水。聊復守吾廬。
巷轍久已斷。山瓢仍屢虛。
非甘寂寞者。誰樂此閒居。

【字解】【一】秋意　秋の氣分。【二】郊岡　郊外の田圃。【三】巷轍　路次に殘ざし車の跡。【四】山瓢　山家の酒瓢。

【題義】説明に及ばぬ。端居は閒居・平居と同義。孟浩然の詩に、端居愧二聖明一とある。

【詩意】秋の氣分は、日に增し物さびしくなり、郊外の田圃には、露霜が頻りに降つた。どこぞへ出かけやうと思つても、然るべき山水の勝境も考へ付かず、仕方がないから、相變らず、吾が菴に燻つて居る。ここに訪ひ來る人もなければ、路次の車跡も、久しく斷え、萬事不自由な處であるから、瓢たんも空になつて居ることが度度ある。もとより寂寞に甘んずる人でなければ、誰か樂んで此樣な處に栖んで居やうか、とても、出來ないことである。

【餘論】前半は端居の所由、巷轍久已斷の二句は其光景、非甘寂寞者の二句は、自ら之を解したので、例の屢ば見るところの章法である。

夢鍾離兩兄

鍾離の兩兄を夢む

淮水去不極。淮山與偕馳。
鍾離兩遷客。路遠歸何期。
孰云歸無期。此夕乃見之。
握手說辛苦。杯觴復同持。
須臾忽驚別。我夢方自知。
雖夢亦足喜。況乃歸來時。

【字解】【一】與偕馳　兩兄が一緒に共同を旅する。

【題義】一統志に「鍾離城は、鳳陽舊府治の東六里に在り、晉の縣、淮安郡に屬す、隋、鍾離郡を此に置く」とある。前に送二家兄西遷一といふ詩があつて、その遷されたのは、何處とも書いて無いから、はつきりはせぬが、この詩に鍾離兩遷客とあるから、てッきり鍾離に遷されたに相違ない。但し、一寸變てこなのは、年譜等に、青邱の兄は、唯一人、名を咨といふ人だけであるのに、ここに兩兄とあり、兩遷客と記したことであるが、一人は、同胞ではなく、謂はゆる族兄卽ち從兄でもあるか、それとも、實際、同胞の兄が二人あつたのを年譜等に紀述を失つたのか。兩者、必ず其一に居ることであ

淮水、去つて極まらず、淮山、與に偕に馳す。
鍾離の兩遷客、路遠くして、歸る、何ぞ期せむ。
孰れか云ふ、歸る、期なしと、この夕、乃ち之を見る。
手を握つて、辛苦を說き、杯觴、復た同じく持す。
須臾にして忽ち別るるに驚き、我が夢、方に自ら知る。
夢と雖も、亦た喜ぶに足る、況んや乃ち歸來の時。

らう。この詩は、卽ち鍾離に遷された兩兄を夢に見たるに因つて作つたのである。

【詩意】淮水の流は、滔滔として絕えず、淮山も長く續いて居る。その間を君等二人は、旅をして、鍾離の地に到著されたが、もとより、遷客の身、さなきだに、路の遠きを、歸る日は何時と期すべきか。しかし、歸る折は無いといふことは無いので、現に今夕兩君に逢ひ、手を握り合つて、道途の辛苦を說き、仍つて、同じく杯を擧げて歡を爲した。それも、暫くの間で、忽然として、又別を爲すに驚き、愕然として覺むれば、まさしく夢であることが分かつた。もとより、おもひ寢の果敢なき夢ではあるが、それでも、喜ぶに足るべく、これが、實際、歸つて來たのであつたなら、どんなに嬉しからう。

【餘論】起四句は、兩兄の遷行、次の四句は、夢中の邂逅、結四句は、覺めたるに因つて、はじめて、その夢たるを知り、なほ將來の歸期を囑望したのである。

雨中留徐七賁

江寒宿雨在。落葉滿村濕。
留君繫君艇。莫犯風潮急。

雨中、徐七賁を留む

江寒くして宿雨在り、落葉、滿村に濕ふ。
君を留めて、君の艇を繫ぐ、風潮の急なるを犯す莫れ。

試問欲歸城。誰家借蓑笠。

試みに問ふ、城に歸らむと欲するも、誰が家にか蓑笠を借らむ。

【字解】【一】宿雨　昨日から降り續いた雨。【二】欲歸城　城は卽ち蘇州。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】江天寒くして、昨日からの雨は、猶ほ降りしきり、落葉は、村に滿ちて濕ひ、まことに、陰鬱の景色。この時、君を留めむとして、君の舟を繫ぎ、風潮の急を犯すのは危險だからといつた。それのみか、これから、蘇州に歸らうとしても、蓑や笠を借りる家だになく、まさか濡れ鼠になつて歸る譯にも行かないではないか。

【餘論】極めて簡單なる中に、實況は、よく見えて居るといふものの、實は尋常口頭の語に過ぎない。

看刈禾

農工亦云勞。此日始告成。
往穫安可後。相催及秋晴。
父子俱在田。札札鎌有聲。

刈禾を看る

農工、亦た云に勞す、この日、はじめて成るを告ぐ。
往いて穫る、安んぞ後るべけむや、相催して秋晴に及ぶ。
父子ともに田に在り、札札として鎌に聲あり。

黄雲漸收盡。曠望空郊平。黄雲、漸く收め盡し、曠望すれば、空郊平かなり。
日入負擔歸。謳歌道中行。日入つて負擔して歸り、謳歌して道中を行く。
鳥雀亦羣喜。下啄飛且鳴。鳥雀、亦た羣がり喜び、下り啄み、飛んで且つ鳴く。
今年幸稍豐。私廩各已盈。今年、幸にして稍や豐、私廩各すでに盈つ。
如何有貧婦。拾穗猶惸惸。如何か、貧婦あり、穗を拾うて、猶ほ惸惸。

【字解】【一】農工　農事に同じ、農と工とではない。【二】相雚　互に念がして出かける。【三】札札　ざくざくと云つて稻を刈る音。【四】負擔　或は脊に負ひ、或は肩に擔ふ。【五】私廩　個人の米倉。【六】惸惸　詩の小雅に憂心惸惸とあつて、毛傳に「惸惸は憂ふる意」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】農事は、まことに骨の折れる業であるが、今日こそ、やつと出來ばえが上つたので、田に往つて稻を刈るに就いては、誰しも、決して人に後れて居らず、互に急がせ、この秋晴に乘じて出かけた。親子打揃つて、野良に居り、その打揮ふ鎌は、見事に稻を薙ぎ倒して、ざッくざッくと音がする。やがて、滿郊の黄雲も、次第に收められ、はては、見わたす限り、何物もなき郊原が平らに成つて居る。日暮の頃、刈つた稻を、或は脊に負ひ、或は肩に擔ひ、聲高に歌ひながら、とぼとぼと道を歩んで行く。心なき鳥雀までも、羣がり喜んで、田の面に下りて啄み、はては、飛び廻つて、鳴いて居る。今年は、幸にも聊か豐作であつて、銘銘の倉にも、一ぱいに成る位、まことに結構ではあるが、どうしたことか、貧婦があつて、憂はしげに落穗を拾つて居るのは、まことに氣の毒にも、又傷はしきことである。

【餘論】起四句は、刈禾の發端、次の四句は、刈る時の光景、次の四句は、刈つた稻を家に運ぶこと、結四句は、例の感慨で、反映的に、貧婦を倩ひ來り、あはれは、一しほ深きを覺える。

晩歩遊褚家竹潭

晩に歩して褚家の竹潭に遊ぶ

落日猶半野。閒來潭上游。落日、猶は野に半ばし、閒來、潭上に游ぶ。
非因戀幽賞。聊欲散煩憂。幽賞を戀ふるに因るに非ず、聊か煩憂を散せむと欲す。
澄波魚喰夕。荒竹鳥吟秋。澄波、魚、夕に喰し、荒竹、鳥、秋に吟ず。
不是愚溪上。胡爲吾久留。これ愚溪の上ならざるに、胡すれぞ、吾、久しく留まる。

【字解】【一】半野　野の半面を照らす。【二】戀幽賞　塵外の好景を慕はしいと思ふ。【三】喰夕　喰は説文に「魚の口、上に見ゆるなり」とあつて、魚が水面に近く出て口を開いて、ぱくぱくすること。【四】愚溪　柳宗元の愚溪詩序に「瀧水の陽、溪あり、

或は曰く、冉氏かつて居れり、故に是溪に姓とすと。或は曰く、以て染むべきなり、これに名づくるに其能を以てす、故に之を染溪といふ、と。余、愚を以て罪に獲れ、清水の上に謫せられ、この溪を愛し、入ること二三里、その尤絕なるものを得て家す。古しへ、愚公谷あり。今、余、この溪に家し、しかも、名、能く定まるなし、故に之を更めて愚溪となす」とある。

【題義】蘇州府志に「唐の褚家の林亭は、長洲に在り」と記し、松陵唱和集に「震澤の西に在り」と見えて居る。竹潭は、その林亭に在つて、周圍に竹の生えて居る潭である。この詩は、日暮、散歩して、褚家の林亭なる竹潭に遊んで作つたのである。

【詩意】夕日の光は、猶ほ野の半面を照らす頃、閒なる儘に潭上に來て遊んだ。但し塵外の幽景を慕はしく思ふ爲ではなく、實は、思ひ煩ふ憂懷を散せむと欲したからである。眺めやれば、波の澄める水面には、魚が日暮に出て來て、口を開いて喰喝し、手入をせぬ竹林には、鳥が秋に乘じて、吟じて居る。ここは、愚溪の邊でもないのに、われは、當年の柳宗元の如く、どうして、ここに久しく留まつて、去りがてにして居るのであらうか。

【餘論】前四句は晩歩の所由、澄波魚喰夕の二句は、竹潭の景色、不二是愚溪上一は感慨で、卽ち每毎慣用の章法である。

召修元史。將赴京師。別內

召されて元史を修せむとし、將に京師に赴かむとして內に別る

承詔趣嚴駕。晨當赴京師。
詔を承けて嚴駕を趣し、晨に當に京師に赴くべし。

佳徵豈不榮。獨念與子辭。
佳徵、豈に榮ならざらむや、獨り子と辭するを念ふ。

子自歸我家。貧賤久共之。
子、わが家に歸せしより、貧賤、久しく之を共にす。

閨門靄情歡。寵德不以姿。
閨門、情歡靄たり、德を寵する、姿を以てせず。

天寒室懸罄。何忍遠去茲。
天寒くして、室は懸罄、何ぞ遠く茲を去るに忍びむ。

王明待紬文。不暇顧我私。
王明、紬文を待つ、我が私を顧るに暇あらず。

忽忽愧子勤。爲我烹伏雌。
忽忽として子が勤を愧づ、我が爲に伏雌を烹る。

攜幼送我泣。問我旋軫時。
幼を攜へ、我を送つて泣き、我に軫を旋すの時を問ふ。

行路亦已遙。浮雲蔽川坻。
行路亦た已に遙に、浮雲、川坻を蔽ふ。

宴安聖所戒。胡爲守蓬茨。
宴安は聖の戒むるところ、胡すれぞ、蓬茨を守らむ。

我志願裨國。有遂幸在斯。
わが志願はくは國を裨けむ、遂ぐるあるは幸に斯に在り。

加餐待後晤。勿作悄悄思。
加餐、後晤を待つ、悄悄の思を作す勿れ。

【字解】【一】趣　促す、せき立てる。【二】轔轔　しつかりと支度をした車。【三】京師　南京。【四】佳徴　有り難い恩命。【五】奥子辭　子は内、即ち妻を指す。【六】濡情歡　兩情相喜ぶこと、靄然たりといふ意。【七】懸磬　磬は罄と通用す。磬石だけを懸けたる如く、家貧にして、室中無一物なるを云ふ。國語の注に「室屋皆發撤して椽椽在り、懸磬の如し」とあり、又左傳に「室は懸罄の如く、野に青草なし、何を恃んで恐れざる」とあつて、その注に「紬とは、これを綴集するを謂ふなり」とある。【八】王明　帝王の明德。【九】紬文　史記太史公自序に「史記金匱石室の書を紬す」とあつて、その注に「紬とは、これを綴集するを謂ふなり」とある。【一〇】愧子勤　いそがしげに立ち廻ることを感謝する。【一一】伏雌　前に卷四、感興の詩中にも見えて居た、卵を伏せて居る雌の雞。【一二】旋軫　旋は還す。軫は車の横木、ここでは單に車の義に用ふ。【一三】川坻　坻はみぎは、なぎさ。詩雅に「小渚を沚といひ、小沚を坻といふ」とある。【一四】宴安　何事をも爲さずして、徒に游んで居ること。左傳に「宴安は鴆毒、懲ふべからざるなり」とある。【一五】蓬矢　よもぎといばら、草小屋。【一六】裨園　園に裨益する。【一七】有遂　わが志を成し遂げる機會。【一八】加餐　養生する。【一九】後晤　今後の面會。【二〇】惄惄　物さびしき思。

【題義】年譜に「洪武二年二月、詔して元史を修せむとし、左丞相李善長を以て監修とし、前起居注宋濂、漳州府判王禕を召して總裁となし、山林遺逸の士、汪克寛・胡翰・宋禧・陶凱・陳基・曾魯・趙汸・張文海・徐尊生・黄篪・傅恕・王錡・傅著・謝徽・趙壎、及び先生、共に十六人を徴して、同じく纂修せしめ、局を天界寺に開く」とある通り、青邱は、三十四歳の時に、史館に召し出され、直に程に登つたので、これは、その際、賦して内子に贈つた詩である。内は内子の略、又轉じて妻、或は嫉妾を指す。そして内子は卿大夫の嫡妻、左傳に「叔隗を以て内子と爲す」とある。

【詩意】ここに、天子の詔を承はりしに因り、しつかりと支度した車を用意させ、明朝、ここを出發して南京に向ふことに決した。折角の有り難い恩命は、この身に取つて、まことに名譽であるが、唯だ卿と別れることだけが氣にかかる。卿は、我が家に嫁して來りてより、久しい間、貧乏を共にし、そして、閨門の裏、兩情相歡んで、和氣常に靄靄として居た。それも其筈、われは卿の德を推尊し、そして、容貌などは心にも留めないからである。この天寒の時に際し、室中は丸で無一物、唯だ磬石を懸けた如くであつて、われのみ遠く此を去るに忍びない。しかし、帝者の明德を明かにする爲に、前朝の歴史を編纂せよとの仰せであるから、一個の私事を顧みる暇だにない。忽忽として、卿が忙がしげに立ち廻り、わが爲に雌雞を烹て、御馳走の支度をして呉れたのは、まことに、感謝の至。そして、子どもを攜へて、泣きながら、われを送り、何時ここに歸られるかといつて問うた。眺めやれば、行く手の路は、すでに遙に、浮雲は川岸を蔽うて、望眼相及ばず、從つて、歸りの程は、一寸分からない。宴安は鴆毒といつて、古しへの聖人も堅く戒められた位、われ、如何にして、無爲に、この草小屋を守るべき。元來、わが志は、國家に裨益したいといふので、この志を遂げる機會は、まさしく今回と思はれるから、是非出發する次第。それにつけても、卿は、精精養生をし、いつまでも、無事であつて、今後の面會を待つべく、決して、物淋しい思をしてはならぬ。

【餘論】四句一意で、凡そ六段に分れ、今次の出發を總提とし、同栖の追懷、事に公私の別あること、送別の有樣、おのが本志、後日の再會といふ樣に、層層遞下し、その中、慰藉あり、囑望あり、これ

を一概して、思致纏綿、しかも、性情の正を失はざるを見るべく、その妙は、まさしく文字の巧拙以外に在ることと思はれる。

早發土橋

空山遠無驛。逆旅聊可宿。
懷征候鳴雞。燃帶續我燭。
僕夫昨行苦。爛漫睡正熟。
呼之愧忽忽。推車出茅屋。
高巖尙懸斗。深谷未升旭。
欲亟去反遲。怪石暗屢觸。
思當在家時。日晏始舒足。
胡爲此行邁。霜露勞局促。
王事靡敢辭。非關徇微祿。

早に土橋を發す

空山遠く驛なく、逆旅、聊か宿すべし。
征くを懷うて、鳴雞を候し、帶を燃やして、我が燭を續ぐ。
僕夫、昨行苦、爛漫として、睡、正に熟す。
これを呼び、忽忽、車を推して、茅屋を出づるを愧づ。
高巖、尙ほ斗を懸け、深谷、未だ旭を升さず。
亟ならむと欲して、去ること反つて遲く、怪石、暗に屢ば觸る。
思ふ、家に在るの時に當つて、日晏くして、始めて足を舒ばすを。
胡すれぞ、此に行き邁き、霜露、局促を勞す。
王事、敢て辭するなし、微祿に徇するに關するに非ず。

【字解】【一】逆旅　逆は迎へる。旅人を迎へるといふので、宿屋の義になる。【二】懷征　征は征行。【三】候　うかがふ、待つ。【四】燃帶　唐書皇甫無逸傳に「無逸、かつて部を按じて、民家に宿す。燈炷盡く。主人、將に帳いで迫めむとす。無逸、佩刀を抽き、帶を斷つて炷と爲す。その廉介、かくの如し」とある。【五】爛漫　甜なる貌。【六】愧　感謝する、氣の毒に思ふ。【七】推車　車は自分の乘用。【八】懸斗　斗は北斗。【九】去反遲　路を行くことが却つて遲い。【一〇】暗屢觸　暗中屢ば足に觸れる。【一一】舒足　兩足を伸ばす。【一二】局促　こせこせと忙がしげに立ち廻る。【一三】徇　殉と通ず、貫誼の文に「貪夫は財に徇し、烈士は名に徇す」とある、その徇と同義。

【題意】江寧府志に「上元縣、急遽鋪の東南に土橋鎭あり、丹陽縣と句容との界に在り」と記してある。この詩は、前首に續いて、京師に赴く途中の作と見える。

【詩意】空山の中、宿場は遠く隔つて、ここには無く、ほんの宿屋に過ぎぬが、ここに泊る外はなかつた。しかし、征行の事を絕えず心に思つて居て、雞の鳴くのを待ち、燈心が盡きかかつたから、わが帶を切つて、取り敢へず、これに代用した。下部どもは、昨日の行程が、大分苦しかつた爲に、疲れ切つて、今しも白河夜舟の眞ッ最中、眠、正に熟して居る。これを呼び起し、忽忽車を推して茅屋を出かけるのは、まことに氣の毒であつた。高い巖の上には、北斗の星、なほ輝いて懸り、深谷からは、朝日が、まだ上らない。急がうとしても、路を行くことの却つて遲くなるのは、暗中、數ば怪石に觸れ、足場が甚だ惡いからである。おもへば、家に居た時分には、日が出て大分時を經たる後、はじめて目を醒まし、兩足を伸ばして、やつと寢床から起き上つた位。いかなれば、こんな田舍路を

たどり、霜露にしほたれて、こせこせと忙がしげに立ち廻るのであるか。これは、王事であつて、敢て辭する譯にも、行かぬからで、何も區區として、微祿に殉する爲ではない。

【餘論】起四句は、逆旅の模樣、僕夫昨行苦の四句は、強ひて早晨に出發したこと、高巖尙懸レ斗の四句は險路の實況、思當二在レ家時一の六句は、家居の時を追憶し、王事なれば、この艱苦も亦た止むを得ないといつて、強ひて、自ら解釋したのである。

車過二八岡一

上レ岡如レ登レ天。下レ岡如レ決(一)川。岡に上るは天に登るが如く、岡を下るは川を決するが如し。
勞哉挽レ車夫。呀(二)喘當二我前一。勞するかな、車を挽くの夫、呀喘、わが前に當る。
兩轅(三)鬬欲レ摧。土石厲且堅。兩轅、鬬つて摧けむと欲す、土石、厲且つ堅。
我行閔二其(四)憊一。時下息二彼肩一。わが行その憊れたるを閔み、時に下つて彼の肩を息はしむ。
雖レ非二古(五)羊腸一。實懼二覆(六)輿顛一。古しへの羊腸に非ずと雖も、實に覆と顛とを懼る。
如何道(七)路子。車來競連連。如何か、道路の子、車來つて競うて連連。
白日已傾仄。我行尙廻邅(八)。白日すでに傾仄、わが行、尙ほ廻邅。
安得駕(九)逸足。平野超二飛煙一。安んぞ得む、逸足に駕し、平野、飛煙を超ゆるを。

【字解】(一) 決川　川の流を切り落す。(二) 呀喘　呀は、說文に「口を張るの貌」とある。喘は、あへぐ、呼吸の迫ること。(三) 其憊　憊は疲れる。(四) 古羊腸　史記魏世家に「魏、趙を伐ち、羊腸を斷ち、關與を拔く」とあつて、その正義に「羊腸の阪道は、太行山上に在り」と記してある。(五) 覆輿顛　車が覆り、乘つて居る人がころげ落ちる。(六) 道路子　旅客輩。(七) 邅邅　愚圖愚圖して立ち去らずに居ること。(八) 駕逸足　駕は馬を車につける、逸足は名馬、高適の詩に逸足橫三千里一とある。

【題義】八岡は、丹陽縣に在るといふから、この首は、直に前首の後に接し、同じく、南京に向ふ旅中の作と見える。

【詩意】八岡の險たるや、殊に甚しく、車に乘つて此を行くと、上る時には、天に登るが如く、なかなか捗取らず、下る時には、川の流を切り落すが如く、留めても留まらず、いづれも、危險の極である。骨の折れるのは、車引の人足どもで、兩方の轅は、銳く且つ堅い土石と鬬つて、打碎けむばかり。そこで、人足どもの弱つて疲れて居るのが氣の毒で堪まらず、われは、時時、車から下りて、彼等の肩を休ませた。ここは、古しへの名だたる羊腸の阪ではないが、その險、もとより相讓らず、車が引ツくりかへつたり、乘つた人がころげ落ちたりするのが恐ろしい。如何なれば、旅客どもは、どしどし車を推し寄せ、連連として引きも切らぬ樣にするのか、かくては、動きが取れず、まことに閉口の

至。白日は既に西に傾きしに拘はらず、われ等は、少しも進まず、相變らず、一つ處に愚圖愚圖して居る。出來るならば、千里を走る名馬に車を引かせ、平野を快走し、飛び立つ煙を超えて、一氣に馳せ行きたいと思ふが、それも出來ぬ相談だから仕方がない。

【餘論】前十句は、車を輓くことの極めて艱なるを言うて、八岡の險も、自然推測される。後六句は、旅客の車が集まつて、進退愈よ谷まる有樣を云つたので、もとより、實況である。

寓天界寺雨中登西閣

天界寺に寓し、雨中、西閣に登る

片雲出鍾山。陰滿江東曉。片雲、鍾山を出で、陰は滿つ江東の曉。
幽人閣上寒。風雨啼鶯少。幽人、閣上に寒く、風雨、啼鶯少し。
紅塵禁陌淨。綠樹層城繞。紅塵、禁陌淨く、綠樹、層城繞る。
不爲怨春徂。離懷自憂悄。春の徂くを怨むが爲めならず、離懷、自ら憂悄。

【字解】【一】鍾山　一統志に「府城の東北に在り」と記し、江寧形勝に「鍾山は龍蟠、石城は虎踞」とある。【二】陰　くもつた影。【三】江東　南京を指す。【四】幽人　自ら謂ふ。【五】禁陌　宮城に通ずる道路、都大路。【六】層城　高き城壁。【七】離懷　客思に同じ。【八】憂悄　憂を含んで悄然たること。

【題義】江寧府志に「天界寺は、聚寶門外、善世橋南に在り、舊と城中大市橋北に在り、元には龍翔集慶寺と名づけ、學士虞集、記ありしが、明初、天界寺と改め、洪武戊辰、寺に災あり、徙して今の所に建つ」とある。戊辰は洪武二十一年で、青邱の死後十餘年後であるから、青邱時分の天界寺は、無論、舊の通り、大市橋北に在つたのである。この詩は、前二首に接し、愈よ南京に著してからは、史局の開かれて居る天界寺に、便宜上、寓居することとなり、ある日、雨中、その西閣に登つて、この詩を作つたのである。

【詩意】一片の溼雲が、鍾山から出ると、南京一帶の地は、夜が明けたばかりで、曇つた影に蔽はれ、やがて、ぽつぽつ雨が降つて來た。この時、われ獨り西閣の上に立てば、まことに、肌寒きを覺え、そして、風雨の中には、鶯の鳴くのも極めて稀である。その雨の爲に、都大路の紅塵は、さつぱりと洗ひ清められ、綠樹は、高い城壁を繞つて、蓊鬱として居る。花落ち水流れて、春の次第に去るは、尋常の事で、格別怨むにも及ばないが、妻子に別れて、ひとり此に居る身は、客思悄然として、まことに憂はしげに覺える。

【餘論】起二句は將に雨ふらむとする景色、幽人の四句は雨中の風物、不レ爲レ怨二春徂一は感慨。通篇、まとまつては居るが、別に新婉の處もなく、到底、凡作たるを免れない。

送陳四秀才還吳

陳四秀才の吳に還るを送る

君是故鄉人。同作他鄉住。
君は是れ故郷の人、同じく他郷の住を作す。
同來不同返。惆悵臨分處。
同じく來つて同じく返らず、惆悵、分るるに臨む處。
手把長干花。回望長洲樹。
手に長干の花を把り、回つて長洲の樹を望む。
恐起憶家心。愁題送君句。
恐らくは、家を憶ふの心を起さむ、愁へて、君を送るの句を題す。

【字解】【一】故鄉 蘇州を云ふ。【二】長干 劉逸吳都賦の注に「建業の南五里に山岡あり、その間の平地、吏民雜居し、長干と號す。中に大長干小長干あり、皆相連る。大長干は越城の東に在り、小長干は越城の西に在り。地に長短あり、故に大小長干と號す」とあり。長干は、今の南京秦淮の南に當り、六朝の頃は、處處へ出稼ぎする商人どもが居住し、且つ風月佳麗の趣あるを以て稱せられて居た。【三】長洲 前に屢ば見え、蘇州城外の一勝蹟である。

【題義】陳四の四は排行で、名字閥歴等は分からぬ。秀才といふ以上、この人は試驗に及第したものに相違ない。吳は、卽ち蘇州。詩で見ると、もと一緒に南京に來たのであらう。この詩は、陳秀才の歸鄉を送つて作つたのである。

【詩意】君と我と、もと同鄉の人で、一緒に、この他鄉に來て淹留して居た。然るに、今日、君は歸鄉するといふので、同じく來ても同じく返らず、ここに東西に分るるに際して、まことに惆悵の想に堪へられぬ。そこで、長干の花を手にして、遙に故鄉なる長洲の樹色を望み、しばし、つくねんとして居たが、わが家を思ふ心を起さむことを恐れ、愁へながらも、先づ君を送る詩を書いて、それで愈よお別れとする。

【餘論】起四句は、爾我の離合常ならざるを云ひ、手把長干花の二句が題意の正面。結二句は、例の感想。恐起憶家心とはいふものの、既に其心を起したことは、云ふまでもなく、但だ君を送ることに重きを置いて、しばらく此の如く詞を設けたのである。

送聯書記東歸

聯書記の東歸を送る

旅寓古寺間。得與名僧居。
旅寓、古寺の間、名僧と居るを得たり。
時因簡牘暇。共諦楞伽書。
時に簡牘の暇に因つて、ともに諦す楞伽の書。
倚閣山暝後。步廊月生初。
閣に倚る山暝するの後、廊を步す月生ずるの初。
屢聞眞詮妙。一使羈悰舒。
屢ば眞詮の妙を聞き、一に羈悰をして舒びしむ。
茲晨別同袍。言旋舊精廬。
この晨、同袍に別れ、言に舊精廬に旋る。

飛雲自無滯。愧我焉能如。
東浦秋正遙。西齋夜應虛。
傷離固知妄。相送聊踟躕。

【字解】【一】簡牘暇　文書の往復を掌つて居る餘暇。【二】山暝　山が暮れかかる。【三】眞詮　眞義に同じ、道の蘊奥、朋友七篇は「冀はくは、眞詮を廣め、潛に庶品に資す」とある。【四】同袍　詩經に與子同袍とあつて、同僚の義。【五】綺闥　漢書儒林傳の注に「綺闥は、講誦の舍」とあるが、ここでは、寺を云ふ。【六】傷離　離別を傷む。【七】知妄　妄見に外ならぬ。

【題義】ここの書記は、寺の執事の樣なもので、文書の往復を始め、一切の雜務を取り扱つて居るものと見える。その人の名を聯といつたのは、略稱であつて、詳しいことは分からぬ。この詩は、その聯書記の東歸を送つたのである。察するに、これも、矢張、南京客寓中の作、聯書記は、舊と東吳の人で、青邱とは、早くから知り合であつたらしい。

【詩意】聯書記は、古寺の中に旅寓し、名僧輩と一緒に居ることが出來たので、文書往復等の相間には、その名僧に就いて、楞伽經を研究して居た。或は四圍の山山暮れかかりし後、高閣に倚り、或は明月が差し上つた時、ともに長廊を歩する時など、佛道の奥義の深遠なることを聞くと、客愁などはすつかり忘れて仕舞ふ位。今朝、君は仲間の人人に別れて、故郷の寺に歸るさうで、たとへば、飛雲の毫も停滯せざるが如く、予の如きものは、到底、及ぶことが出來ない。君、去りし後、東の江岸に於ては、君の行く手の秋正に遙に、西の小齋には、人なくして、夜も虛しかるべく、何かにつけて、定めて淋しいことであらう。元來、離別を傷むは、まだ悟り切らぬ人の妄見に過ぎぬといふことは知つて居るが、ここに君の行を送れば、物とはなしに悲しく、聊か去りがてにして居る次第である。

【餘論】前半八句は、聯書記の從來の境涯、後半八句は、卽ち送別の正意。通篇、佛理をほのめかして居るのは、相手が僧だからである。

送禮部傅侍郎赴浙西按察　禮部傅侍郎の浙西の按察に赴くを送る

聖主想賢哲。夫君欽來東。　聖主、賢哲を想ふ、夫君、欽ち東に來る。
姓名簡睿聽。召對明廷中。　姓名、睿聽に簡せられ、召對す明廷の中。
彷彿似其先。夢寐相感通。　彷彿として、その先の、夢寐相感通するに似たり。
乘綸坐西掖。曳履游南宮。　綸を乘つて西掖に坐し、履を曳いて南宮に游ぶ。
復輟要近居。往試澄清功。　復た要近の居を輟めて、往いて澄清の功を試む。
糾郡握使節。炎天凜霜風。　郡を糾して使節を握り、炎天、霜風凜たり。

顧余謬珥筆。言笑獲屢同。〔一四〕顧みるに、余謬つて筆を珥し、言笑、屢ば同じきを獲たり。
無端此分袂。離抱何忡忡。〔一五〕無端、ここに袂を分つ、離抱、何ぞ忡忡たる。

【字解】〔一〕簡睿聰　簡は擇ぶ、天子が御聰になつた上で擇ばれる。〔二〕召對　召し出されて敷問に答へる。〔三〕明廷　清明の朝廷。〔四〕其先　傅氏の先祖、殷の傅說。武丁の夢に入り、版築より起つて宰相となつた。前に卷一、王明君の詩中、留畫商巖夢寓賢の條に注して置いた。〔五〕秉綸　綸は綸言、詔書を起草する、章應物の詩に、秉綸歸二國士一とある。〔六〕西掖　中書省漢官儀に「左右曹、尚書の事を受く、前世の文士、中書右に在るを以て、因つて、中書を謂うて右曹となし、又西掖と稱す」とある。〔七〕曳履　王勃の詩に、鳴環曳履出二長廊一とある。〔八〕南宮　漢書に「尚書百官府を建てて南宮といふ」とあるから、諸官省の義。〔九〕輟　やめる。〔一〇〕要近　天子の御側に居る清要の職。〔一一〕澄清功　後漢書范滂傳に「時に冀州饑荒、盜賊羣起、乃ち滂を以て清詔使となして、これを按察す、車に登り、轡を攬り、慨然として天下を澄清するの志あり」と見えて居る。〔一二〕糾邪　各郡を糾察する、章應物の送二馮著一の詩に、糾二郡南海濱一とある。〔一三〕使節　使者たる節信、東坡の懷二晁美叔一の詩に、君持二使者節一風采爍二雲煙一とある。〔一四〕珥筆　筆を耳に挿む、卽ち史官たることをいふ、潘岳の贈二陸機一の詩に優二游者閣一珥二筆華軒一とある。〔一五〕離抱　別離の懷抱。

【題義】杭州府志に「洪武三年、傅讓、浙江提刑按察副使となる」とあるから、傅は、名を讓といつたことが分かる。詩題を見ると、禮部侍郎から轉任したのであるが、その前後の閲歷は不詳。この詩は、顧余謬珥筆とあるから、青邱が史官として南京に居た時の作である。

【詩意】聖主は、賢哲の士を得むことを欲せられ、君は、忽然として、東方に向つて出で來り、その姓名は、宸聽に達した上、擇ばれて、清明の朝廷に召し出され、愈よ、敷問に答ふることになつたので、丁度、君の先祖の傅說が、武丁の夢に入つて、相感通した爲に、任用されたのに類似して居る。そこで、詔書を起草する爲に中書省に坐し、又履を引きずつて各省に出入して居たが、頃ろ、天子の御側に居る清要の職を罷め、按察として、天下を澄清する功を試むることとなつた。使者たる節信を握つて、各郡の現狀を糾察する時は、その威、凜凜として、炎天にも霜を帶びたる北風が吹く樣の想がするであらう。予は、謬つて筆を耳に挿み、史官に奉職して居る緣故に因つて、屢ば君と會して、言笑を同じうすることが出來たのであるが、ここに袂を分つに際し、別離の思は、忡忡として、まことに心を傷ましめる。

【餘論】起八句は、傅讓が禮部侍郎たりしことを記し、次の四句は、今次、按察として必ず功績あらむことを囑望し、結四句は、自己との交情を追思し、轉じて、別離に及んだのである。

園柳に對す

依依客園柳。來時未堪折。〔一〕依依たる客園の柳、來る時、未だ折るに堪へず。
今看夏條長。上有新蟬咽。〔二〕今は看る、夏條長く、上に新蟬の咽ぶあるを。

芳序惜推遷。佳人念離別。　芳序、推遷を惜み、佳人、離別を念ふ。
秋風莫遽起。旅思方騷屑。　秋風、遽に起る莫れ、旅思、方に騷屑。

【字解】【一】依依　情思ある貌。【二】夏條　夏になつて伸びた枝。【三】芳序　春をいふ。【四】騷屑　淋しき貌。

【題義】客舍の庭なる柳を見て作つたので、矢張、南京天界寺に滯在して居た時であらう。

【詩意】依依たる客舍園中の柳は、自分が始めて來た頃、折るに堪へない位であつたが、今や夏に成つて伸びた枝が長くなり、その梢の上には、新蟬が止まつて鳴いて居る。のどけき春の容易に遲り行くは、まことに惜むべく、佳人は、この柳に對して、當日の別離を思ひ出すであらう。秋風よ、遽に吹き起つて臭れるな、今しも、旅愁淋しき折柄、もし吹き出せば、愈よ以て堪へられぬであらう。

【餘論】熟套の構想で、取り出でて論らふべきものではない。

僕至得二女消息

僕至り、二女の消息を得たり

我僕持尺書。來自我故鄉。　わが僕、尺書を持して、わが故鄉より來る。
讀書意未了。呼僕問彼詳。　書を讀んで、意、未だ了せず、僕を呼んで彼の詳を問ふ。
云我兩小女。別來稍已長。　云ふ、我が兩少女、別來、稍や已に長し。
大女手摻摻。窓前學縫裳。　大女は手摻摻、窓前、裳を縫ふを學ぶ。
小女啼啞啞。走索瓜果嘗。　小女は、啼くこと啞啞たり、走つて、瓜果を索めて嘗む。
喜爺有使歸。迎門各踉蹌。　喜ぶ、爺より、使の歸るあり、門に迎へて、各〻踉蹌。
我坐聽此言。欲慰意反傷。　我、坐して此言を聽き、慰めむと欲して、意、反つて傷む。
稍近尙爾思。更遠何能忘。　稍や近きも、尙ほ爾を思ふ、更に遠く何ぞ能く忘れむ。

【字解】【一】尺書　長さ一尺もある手紙。【二】彼詳　彼地の詳細。【三】稍已長　長は丈たかし、長すと讀むと仄聲になつて韻が諧はなくなる。【四】摻摻　細くして好きこと、しなやかなる貌。【五】縫裳　裳は衣に同じ、韻の都合で此字を用ひたのである。【六】踉蹌　よろよろする。

【題義】說明に及ばぬ。但し、この詩も、南京滯留中の作。この僕は、青邱に仕へて居て、蘇州へ使に遣られたのが、歸つて來たのである。

【詩意】わが下部は、手紙を持つて、故鄉の蘇州から歸つて來た。その手紙を讀んだだけでは、心に滿足せず、因つて、下部を呼び出して、彼地の詳細なる有樣を問うた。彼の答へたところに據ると、わが兩小女は、別れてから、大分脊丈も伸びたといふこと。中にも、大きい娘は、しなやかな手をして、窓前で裁縫の稽古をして居たし、小さい娘は、啞啞と泣きつつ、走つて瓜や果物を索し出して、

喰つて居たが、父の處から使が歸つて來たと聞くと、大に喜んで、よろよろしながら、門まで迎へに出て來たといふ話。われは、坐して、此言を聽き、心を慰めむと欲して、却つて、心を傷ましめた。何となれば、これより、稍や近きだに、尙ほ汝の事を思ふべく、まして、遠いのだから、どうして、忘られやう。いろいろ話を聞いて、なつかしき思は、愈よ增さるのみである。

【餘論】起結各四句、そして、中間八句は、兩少女の事を敍し、極めて瑣碎、極めて周匝、まことに、篇中の精彩である。

菊鄰

菊本君子花。幽姿可相親。
清秋發孤豔。似避東風塵。
采采霜露餘。繁英正鮮新。
車馬不過賞。相看但幽人。
幽人苦愛菊。自是柴桑倫。
閒園誰與語。叢栽四爲鄰。

菊は本と君子の花、幽姿、相親むべし。
清秋、孤豔を發し、東風の塵を避くるに似たり。
采采、霜露の餘、繁英、正に鮮新。
車馬、過賞せず、相看る但だ幽人。
幽人、苦に菊を愛す、自ら是れ柴桑の倫。
閒園、誰と語らむ、叢栽、四に鄰を爲す。

入徑朝摘遠。循籬暮觀頻。
一壺每對酌。折花挿盈巾。
殊勝處俗里。歌呼醉遭嗔。

徑に入つて朝に摘むこと遠く、籬に循つて暮に觀ること頻りなり。
一壺、每に對酌、花を折つて、挿んで巾に盈つ。
殊に勝る、俗里に處り、歌呼、醉うて嗔に遭ふに。

【字解】【一】孤豔　他に同時の花なき故に云ふ。【二】采采　摘み取る。【三】繁英　花瓣の密なるを云ふ。【四】柴桑倫　南史陶靖節傳に「陶淵明は、潯陽柴桑の人なり」とある。【五】叢栽　むらがり植ゑる。【六】俗里　塵俗の閭里、俗人どもの居る處。【七】遭嗔　怒りに逢ふ、叱られる。

【題義】菊鄰とは、菊花ある鄰家で、卽ち、それを詠じたのである。

【詩意】菊は、本と花の君子で、その清幽の姿は、相親むべきを覺える。清秋の時節に咲き出でて、外には花らしいものもなく、さながら、春の塵を避けるかの如くである。霜露に濡れそぼちたるを采つて摘むと、花瓣の密なる、まさしく新にして、今綻びた樣に見える。しかし、車馬を驅つて、態態、ここに來つて賞する人もなく、相看るものは、自分の樣な風雅の世すて人。その世すて人は、懇に菊を愛して、古しへの陶淵明の仲間である。幽人、ここに至るも、閒園の中、話し相手もなく、たゞ菊が羣がり植ゑられて、四に鄰を爲す位。徑に分け入つて、朝には、花を摘む爲に遠きに至り、垣根の下に倚り添うて、暮には、あから目もせず、打つづけて、眺めあかして居る。每每、菊に對して、一壺の酒を酌みつつ、はては、花を折つて、頭巾に一ぱいになる程挿む。ここは、邊鄙で淋しいが、俗

人の集まる處に住んで、醉うて大聲に歌ふと、怒つて叱られるに比すれば、その勝ること、もとより萬萬である。

【餘論】前の八句は、重に菊を形容して、幽人に及び、後の十句は、幽人を寫し出して菊を離れず、菊と幽人と、交互參錯して融合した樣な處が、この詩の妙處であり、且つ生命である。

出城東見古松流水坐憩久之

城東を出でて古松流水を見、坐憩之を久しうす

空潭寒無藻。瑩淨涵青天。
長松百餘株。扶疏繞潭邊。
我行値幽境。坐賞忘歸旋。
清風似相娛。西來忽澈然。
水動松亦鳴。紛披復淪漣。
羣鷗盡驚矯。疑是龍吟淵。
微瀾蕩餘暉。流響散遠煙。
靜聽意已消。何須撫徽絃。
安得卜此居。一謝塵中緣。
朝來潭上坐。暮向松間眠。

【字解】〔一〕空潭　がらりとして物なき深潭。〔二〕瑩淨　澄んで照り輝く。〔三〕扶疏　まばらなる貌。〔四〕澈然　音の淋しきないふ。〔五〕紛披　松の枝葉の靡く貌。〔六〕淪漣　水が搖れて漣波の起る貌。〔七〕驚矯　驚いて飛び起つ。〔八〕蕩　うごかし漂はす。〔九〕餘暉　殘日に同じ。〔一〇〕流響　次第に傳はり行く響。〔一一〕意已消　意は俗念。〔一二〕徽絃　徽は琴の絃、韓愈の詩に、有琴具徽絃、再鼓琴意淡とある。

【題義】これも、矢張、南京滯留中、城の東郭を出ると、古松流水の一境があつて、ひどく心に稱ひ、良や久しく休息して作つたのである。

【詩意】空潭は寒くして、流れ藻の一すぢだになく、きれいに澄み輝いて、青天を涵すばかり。長松百本以上、まばらに亭立して、潭邊を圍繞して居る。予は、城外に出で、ゆくりなくも、この清幽の境に逢ひ、坐憩して留賞し、殆んど歸ることも忘れた位。すると、清風は、客と共に相娛むが如く、潺然として、淋しげに西から吹いて來た。その風の爲に、潭中の水も動き、松も亦た鳴り響き、枝葉は打靡き、漣波は自然に起る。羣がる鷗どもは、驚いて飛び起つたが、定めて、松聲を聞き誤つて、龍が淵底に吟ずるとでも思つたのであらう。やがて、微瀾は殘る日影を搖り漾はし、流るる如く傳は

り行く松風の響は、遠くに棚引く煙を吹き散らして仕舞つた。その風水の相和して鬧ぐのを、靜に耳を澄まして聞いて居ると、塵念、すでに消え、何も琴の絲を撥さ拂ふにも及ばず、自然の音樂は、又一しほである。されば、ここに居を卜して、全く塵中の俗緣を謝し、朝には、潭上に來つて坐し、暮には、松間に向つて眠ることが出來ればと、深く心に思ふばかりである。

【餘論】起八句は、古松流水の間に坐憩せしこと、水動松亦鳴の八句は、松と水と、各〻その變を極めたことを精細に形容刻劃したので、まさしく其妙を極めて居る。安得卜二此居一の四句は、おのが希望を述べて、この幻境を側面から畫き出したのである。

夜坐天界西軒

明月出東閣。照我坐前軒。
諸僧夜已定。寂寞與誰言。
煙幔螢微度。風條蟬罷喧。
清景雖堪悅。終嗟非故園。

夜、天界の西軒に坐す

明月、東閣を出で、我を照らして、前軒に坐せしむ。
諸僧、夜、すでに定し、寂寞、誰と言はむ。
煙幔、螢、微に度り、風條、蟬、喧を罷む。
清景悅ぶに堪へたりと雖も、終に嗟す故園に非ざるを。

【字解】【一】夜已定　定は入定。【二】煙幔　煙の立ち籠めたる幕。【三】風條　風に吹かるる枝。

【題義】天界西軒は天界寺の西軒、この詩も、矢張、南京滯在中の作である。

【詩意】明月は、東閣にさし上り、西軒に坐して居る我が方を照らして居る。多くの僧は、夜、すでに入定し、外に人も居ないから、寂寞として、誰と共に語るべきか。煙の立ちこめたる簾幕には、螢が、そつと飛び度り、風に搖すれる木の枝には、今まで鳴いて居た蟬が、はたと止んで仕舞つた。清幽の景、もとより喜ぶに堪へたりと雖も、恨むらくは、わが故國に非ざるが故に、物とはなしに、愴然たることを免れぬ。

【餘論】前半四句は、題意の正面で、一氣呵成に筆を下し、煙幔の二句は、その際、目睹した風景で、對偶を以て之を行り、五律に入れても、翩翩として誦することが出來る。結二句は收束、これも、毎毎見るところの章法である。

京師嘗吳粳

新杭粲如玉。遠漕來中吳。
初嘗愛精鑿。想出官田租。
我本東皐民。少年習耕鉏。

京師、吳粳を嘗む

新杭、粲として玉の如く、遠漕、中吳より來る。
初め嘗めて、精鑿を愛す、想ふ官田の租より出づ。
われ本と東皐の民、少年、耕鉏を習ふ。

霜天萬穂熟。恣啄從飢烏。
日暮刈穫歸。妻孥共歡呼。
茅屋夜春急。風雨江村孤。
晨炊滿家香。鷹以出網鱸。
如今幸蒙恩。遨遊在南都。
門前半區田。別來想已蕪。
長年盜寸廩。補報一事無。
投七忽歎息。飽食慙農夫。

【字解】【一】新稻　集韻に「稻は稻に同じ」とある。その稻は、正韻に「稻の黏せざるもの」とあり、漢書東方朔傳、鵠鶯禾稼稻稻之地の注に「稻は、芒あるの穀の總稱なり、稻は、その黏せざるものなり」とある。すると、稻は、糯米でなくて、普通のうち米。【二】遠漕　史記蕭相國世家に「轉漕して軍に給す」とあつて、その注に「水運を漕といふ」とある。【三】中吳　吳地の中部、十國春秋吳越世家に「唐の寶大元年十一月、蘇州を陞せて中吳郡となし、常潤等の州を領せしむ」とある。【四】詰繁　精は白げる、繁は說文に「一斛、九斗に舂くを繁といふ」とあつて、十分の一の減りを穩度として十分に舂くこと。【五】東阜　前に歷ば見ゆ、陶淵明の歸去來辭に登三東阜一而舒嘯とある。ここでは、蘇州城東の澤地。【六】耕鉏　耕し且つ鋤く。【七】從飢烏　從は任かす。【八】妻孥　妻子眷屬。【九】夜春　夜、米を舂く。【一〇】鷹　鷹食物として遇める。【一一】出網鱸　捕れたばかりの新鮮なる鱸。【一二】南都　即ち南京。【一三】半區　區は區劃。【一四】已蕪　蕪は荒廢。【一五】寸廩　わづかばかりの御倉米。【一六】補報　君恩に報ずる。【一七】投七　七はさじ。

【題義】　吳粳は、蘇州附近に產する米で、品質精良、日本で云へば、伊勢米とか肥後米とか云つた樣なものと見える。南京滯在中、自分の故郷から出る一等米を食つたといふので、この詩を作つたのである。

【詩意】　新米の粒も揃つて見事なることは、さながら玉の如く、これは遠く舟で蘇州から運び來たものである。はじめて食つた時に、その善く舂けて居るのが氣に入つたが、これは官田の租で、殊に心を用ひたのに相違ない。予は、本と蘇州城東の人民、少年の時より、親ら耕したり、且つ鋤いたりしたので、霜ふる空に成つて、田の面の稻の穗が一齊に熟すると、飢ゑた烏の恣に啄むに任かせて、格別追はうともしない。やがて、その稻を刈り取つて、日暮に家に歸つて來ると、妻子眷屬、もろともに歡聲を上げる。江上の孤村、風雨降りしきる夜、茅屋では、米を舂く音が急に響き、その舂き上げたのを、明日の朝炊くと、新米の香が家中に滿つる位、おかずとしては、捕れたばかりの新鮮なる鱸がある。今しも、幸に聖恩を蒙つて、遊び半分、至極のんきに、南京に滯留して居るが、故郷なる半區ばかりの我が田は、上京の後、すでに、荒廢に歸したであらう。身は、閒職に居て、年中、いささかの御倉米を盜んで居るが、まだ、これといつて君恩に報ゆる樣な一つの事をも仕出かさない。

そこで、匕を投じて、歎息禁せず、無爲飽食、かの農夫にさへ愧ぢる次第である。

【餘論】起四句は總括、我本東皐民の十句は、往時を追憶し、如今幸蒙恩の八句は、今日の境涯を述べて、無爲を愧ぢたのである。全篇、かなり洗練を經たものらしく、茅屋の四句、長年の四句、ともに面白い。

爲因師題松梢飛瀑圖

因師の爲に、松梢飛瀑の圖に題す

松風散飛瀑。夜作濤聲急。　松風、飛瀑を散じ、夜、濤聲を作して急なり。
棲鶻起空山。如驚鬼神入。　棲鶻、空山に起り、鬼神の入るに驚くが如し。
定僧寂無聽。任洒袈裟濕。　定僧、寂として聽くなく、袈裟に洒いで濕ふに任かす。

【字解】【一】棲鶻　鶻は鷂鷹。【二】鬼神入　杜甫の雅山水障歌に、反思前夜風雨急、乃是蒲城鬼神入とある。

【題義】說明に及ばぬ。但し、因師の本名等は分からない。

【詩意】松風颯颯として、飛瀑を吹き散じ、夜になると、さながら、濤聲をなして急に響きわたる。そこで、空山の中で、折角巢に籠つて居た熊鷹は、遽に飛び起つたが、鬼神が其處に闖入したことと思つて、驚いたのであらう。しかし、入定の僧のみは、丸で耳に入らぬかの如く、殊勝にも行ひ澄ましし、飛沫亂れ灑いで、袈裟の濡れるのも拘はずに居る。

【餘論】すべて、題畫の詩は、ひと工夫を要するので、畫に見えるものは、成るべく言はぬ樣にし、畫の及ばざるところを詩にし、詩と畫と、兩兩相待つて、愈よ其趣を發揮する樣にせねばならぬ。畫と全く同じ事を述べれば、畫の說明に過ぎず、從つて、畫の附屬物となり、詩としての獨立的、超絕的價値を失つたと云はれても仕方がない。一枚の繪葉書に何か文句を書くにしても、同一の心得を以てして貰ひたいと、僕は、毎毎考へて居る。青邱の此作の如きは、僅僅三十字、もとより大したものではないが、この意味に於て、題畫の詩たる所以を失はず、風水相鬬ふの聲が濤の樣だといひ、棲鶻の起つは鬼神の入りしと誤想したからであらうといひ、入定の僧は袈裟の濕ふに任かすといひ、すべて抽象的心理的の事象のみに限つて、畫との雷同を避けた處は、篤と注意して、玩味すべきものであらう。

送周四孝廉後酒醒夜聞雁聲

周四孝廉を送りし後、酒醒めて、夜、雁聲を聞く

別時酒忽醒。客去唯空舍。　別るる時、酒、忽ち醒め、客、去つて、唯だ空舍。

風雪雁聲來。寒生石城夜。
遙憶渡江船。正泊楓林下。

【字解】【一】空舍　空屋、あき屋。【二】石城　石頭城の略。【三】渡江　江は揚子江。

【題義】説明に及ばぬ。孝廉は、元と漢代徵士の科名、後には、一種の尊稱として用ひて居る。

【詩意】君と別れし後、折角飲んだ酒も、忽然として醒め、君、すでに去つて、旗亭は、明き家も同然。やがて、風雪甚しき中に、雁の聲が聞こえ、石頭城下、夜の寒さは、殆んど堪へられない。遙に憶へば、君は江を渡り、今時分は、丁度、楓林の下に舟を泊して、淒寒は一しほの事であらう。

【餘論】結二句、杳然として神遠く、上の二句を承けて、その寒、更に甚しきことも、容易に想像される。

答內寄

落月入曉閨。相思不須啼。
我非秋胡子。君豈蘇秦妻。
風從故鄉來。吹詩達京縣。

內の寄するに答ふ

落月、曉閨に入り、相思、啼くを須ひず。
我は秋胡子に非ず、君、豈に蘇秦の妻ならむや。
風は故鄉より來り、詩を吹いて京縣に達す。

讀之見君心。寧徒見君面。
拔草不易絕。割水終難開。
行雲會有時。飛下巫陽臺。
莫信長安道。花枝滿樓好。
白馬繫春風。離愁坐將老。

これを讀んで君の心を見る、むしろ徒だ君の面を見るのみならむや。
草を拔くも絕ち易からず、水を割くも終に開き難し。
行雲、會ず時あり、飛んで下る巫陽臺。
信ずる莫れ、長安の道、花枝滿樓好しと。
白馬、春風に繫ぐも、離愁、坐に將に老いむとす。

【字解】【一】秋胡子　列女傳に「魯の潔婦は、秋胡子の妻、これを納るる五日にして、蹕に官し、五年、乃ち歸る。未だ家に至らず、路傍に美婦人あつて、方に桑を采るを見、秋胡子、これを喜び、車を下つて、詣つて曰く、吾に金あり、願はくは、以て夫人に與へむ。婦人曰く、嘻、吾、桑を采つて二親に奉ず、人の金を願はずと。秋胡子、遂に去り、歸つて家に至る。その母、人をして其婦を呼ばしむ、乃ち向きの桑を採るものなり。秋胡子、これを見て慙づ。婦曰く、親に辭して住いて仕へ、五年還るを得、乃ち路傍の婦人を悅び、金を以て之に予ふ、これ母を忘る、不孝なり。妾、不孝の人を見るに忍びず、と。遂に去つて自ら河に投じて死す」とある。【二】蘇秦妻　史記蘇秦列傳に「出游數歲、大に困んで歸る、兄弟嫂妹妻妾、竊に皆之を笑ふ」とあり、戰國策には「妻、維を下らず」とある、維は機。【三】行雲　飛び行く雲。【四】巫陽臺　巫山の陽臺、宋玉の高唐賦に見ゆ。

【題義】蘇州に留めて置いた妻子の處より、詩を寄せて來たから、取り敢へず、これに答へたのである。但し、內子寄懷の什は、不幸にして、傳はつて居らぬ。

【詩意】曉早く、月は落ちかかつて、餘光、閨中に在る頃、君は、定めて我を思うて居るだらうが、

泣かずとも宜しい。われは、もとより浮薄なる秋胡子の如きものではなく、君も亦た、落魄して歸つて來た其夫を輕蔑した蘇秦の妻の樣なものではない。君と我と、互に心を知り合つて居る以上、相思は、もとより禁ぜざれども、決して怨むには及ばない。今しも、風は故郷より來り、君の寄懐の詩を吹いて、我が居る都に達せしめた。それを讀むと、君の心も、すつかり分かり、唯だ君の顔を見た位の事ではない。草は拔くとも、これを絶やすことは六づかしい、刀を揮つて水を割いて見た處で、直に合し、これを切り開いて仕舞ふことの出來ないと同じく、相思の消遣し難きは、尤も至極。しかし、かの行雲が、必ず巫山の陽臺から飛び下る時あると同じく、われとても、長しへに、都に留まつて居る譯ではなく、何時か故郷に還ることは、もとより決つて居る。長安に比すべき此都では、どこでも、花が咲き匂ひ、樓中に滿ちて、人を蕩かす樣に、仇めいて、わが心を移すものが、いくらも有るといふ噂を信じてはならぬ。われは、白馬を春風に繫ぎ、その樣な樓に登つたにしても、ただ獨り故郷を離れた愁に勝へず、平生、君の事ばかり思つて、將に老いなむとして居る。

【餘論】起四句は、夫妻相信ずることを云ひ、風從二故郷一來の四句は、内子の詩を得たこと、拔レ草不レ易レ絶の四句は、全然、譬喩を以て之を行り、相思の絶えざるを慰め、且つ必ず歸期あるべきを云ひ、莫レ信長安道の四句は、決して心を外に移さぬから、安心して居ろといひ、起首に廻應して、章法自ら緊密。全篇を通じて、措辭は平易、情思は纏綿として居る。

眞氏女　眞氏の女

余在二史館一日。談次有レ言。姚文公承二旨翰林一時。嘗飲二玉堂一。有二侍妓閩語者一。詢レ之。乃眞文忠公裔孫也。父爲二筦庫一。負二縣官錢一。鬻レ之以償。遂流二于娼家一。公愍レ之。白二于執政一。落二其籍一。以嫁二院吏黄棣一。棣後至二顯官一。同館之士聞レ之。多賦レ詩者。余亦爲作二一首一。

【訓讀】余、史館に在るの日、談次、言あり、姚文公、翰林に承旨たりし時、かつて玉堂に飲む、侍妓の閩語するものあり、これを詢へば、乃ち眞文忠公の裔孫なり、父は筦庫たり、縣官の錢を負ひ、これを鬻いで、以て償ひ、遂に娼家に流ると。公、これを愍み、執政に白して、その籍を落し、以て院吏黄棣に嫁せしむ。棣、後に顯官に至る。同館の士、これを聞いて詩を賦するもの多し、余、亦た爲に一首を作る。

妾恨非二緹縈一。上書動二天子一。　妾、恨むらくは緹縈に非ず、上書して天子を動かす。
自鬻償二縣官一。幸得脫二父死一。　自ら鬻いで、縣官に償ひ、幸に父の死を脫するを得たり。

誰知故相家。失身居狹斜。
遂令園中柏。翻作道傍花。
當筵唱金縷。朔客驚閩語。
相問忽相憐。開籠放鸚鵡。
棄置舞衣裳。新理嫁時裝。
良人身作吏。不是販茶商。
花釵映羅扇。初與郎相見。
貴賤古難常。妾心那敢怨。
願郎去作官。莫掌官錢穀。
生子但生男。家門免多辱。

【字解】【一】 緹縈　史記倉公列傳に「淳于意、刑罪を以て、當に傳して、西、長安に之くべし。意に五女あり、隨つて泣く。意、怒り罵つて曰く、子を生むも、男を生まず、緩急、使せしむべきものなし、と。少女緹縈、父の言ん偏み、乃ち父に隨つて西し、上書して、身を以て官婢と爲り、以て父の刑を贖はむことを願ふ。書聞す。上、その意を憐んで、肉刑の法を除く」とある。【二】 故相　もとの宰相、宋の眞德秀を指す。【三】 狹斜　花柳の巷。斜は路次、大抵、狹い小路に在るが故に云ふ。【四】 金縷　歌曲の名。杜牧の杜秋娘の詩に「秋持玉斝醉、與唱金縷衣」とある。【五】 朔客　北方の人。【六】 閩語　閩は今の福州地方。【七】 放鸚鵡　唐書新羅傳に「貞觀五年、新羅王、女樂二を獻ず。太宗曰く、このごろ、林邑、鸚鵡を獻ず、鄉を思うて還るを丐ふを言ふ、況んや、人に于てをや、と。使者に付して之を歸す」とある。【八】 販茶商　白居易の琵琶行に、琵琶を善くする長安の妓女が、茶商人に嫁したことを述べ、門前冷落鞍馬稀、老大嫁作商人婦、商人重利輕別離、前月浮梁買茶去とある。【九】 去作官　上に身作吏と引いた淳于意の語「子を生むも、男を生まず、緩急使せしむべきものなし」とあるを翻用す。

【題義】 この序の意味は――予が曩に元史編修の爲に史館に在りし時、同僚と話の序に、かういふ事を聞いた。むかし、姚文公が翰林承旨たりし時、かつて玉堂と稱する會議室に於て酒宴を催した。すると、閩越の言葉の侍婢が居たので、これを問ひ正すと、眞文忠公、卽ち南宋の宰相たりし眞德秀の末孫であつた。その父は、官庫を管理して居たが、官物の辨償が何かの爲に、縣官に借財したので、止むを得ず、この女を賣り、その身代金を以て、やつと皆濟した。その後、この女は、遂に娼家に流れ込んだといふことであつた。姚文公は、これを聞いて、非常に氣の毒に思ひ、宰相に申し出でて、その女を落籍せしめ、そして、翰林院の屬吏黃棣といふ者に嫁せしめた處が、棣は、その後、立身して大官と成つたといふ話。同じ史館に居た人人は、これを聞いて、詩を作つたものが多かつたから、予も亦た爲に次の一首を作つた――といふのである。眞文忠公、名は德秀、西山と號し、學問もあり、一度は宰相にも成つた人で、その傳は、宋史に見えて居るが、さばかり必要もないから、ここには、

引抄せぬ。姚樞は、元史の本傳に「柳城の人、字は公茂、少にして力學し、王佐の才あり、太宗の時、燕京行臺郎中たり。時に牙魯瓦赤行臺、惟だ貨賂を事とす。樞、官を棄てて去る。世祖に從つて大理を征するや、樞、宋の太祖、曹彬を遣し、南唐を征して、一人を殺さざりし事を陳べ、大理城を破るに及び、民完きを得たり。凡そ內修外攘の政、咸な委任せらる。累官して、翰林學士承旨に至り、文獻と謚す」とある。なほ、青邱と同時の詩人貝瓊も、眞眞曲を作つて、この事實を敍し、その序中「眞眞は、建寧の人、西山の苗裔なり。公、これを憐み、遣して、丞相三寶奴に白して、爲に落籍せしめ、以て翰林の屬官王棣に妻はし、裝資、皆公に出づ。棣、字は棣華、後、官、翰林待制に至る」とある。その女の名を眞眞とすれば、姓名を連ねると、眞眞となつて、聊か變てこであるし、黃棣・王棣、名は同じく姓は違つて居るが、その孰れが正しきか、今より、ともに考究することは出來ぬ。

【詩意】　妾は、恨むらくは、詰まらぬ女の身で、古しへ、上書して天子を感動せしめた緹縈の眞似は出來ず、仕方が無いから、おのが身を色里に賣り、その身代金を以て、縣官に辨償し、幸に父を死より脫せしむることが出來た。誰か知るべき、もとの宰相の家の末孫ともあらうものが、身を失つて、狹斜の巷に居り、遂に園中の柏樹をして、翻つて路傍の花とならしめむとは。一日、玉堂の宴に陪して、金縷の古曲を唱へた處が、北方の人人は、閩越地方の訛を不思議に思ひ、懇に問うて、ありし次第が殘らず分かり、落籍して賤業を止めさせて呉れたのは、丁度、籠を開けて鸚鵡を放つた樣なものである。そこで、舞の時に著る衣裳を棄て去つて、新に嫁入の支度をした。夫たる人は、趨走の小吏であるが、かの輕薄なる茶商人ではない。やがて、花釵を挿み、羅扇を手にし、愈よ婚禮の式が濟んで、郎と相見ることが出來た。もとより、宰相の家柄と小役人とは、貴賤懸隔して居るが、時の廻り合せで、致し方の無い事であるから、妾の心、決して、これを怨まない。願はくは、郎よ、追追に立身して、大官と成つて下さい。しかし、官の餞穀を掌ることは、兎角、間違が多いから、さう云ふ役は引き受けぬ樣にして下さい。その上、子を生んだならば、男ばかりにしたいので、さうすれば、萬一の場合に於ても、一家一門、恥辱多きを免れることが出來る。女の身では、どうにも仕方がないので、自ら往日の事を顧みても、まことに懲り懲りする。

【餘論】　起首より開レ籠放二鸚鵡一に至る十二句は、卽ち眞氏の事實、棄二置舞衣裳一より結末に至る十二句は、その女の胸中を忖度して言つたので、極めて餘情もあり、聲調亦た宛轉として居る。

送李架閣赴山西行省

日暮踰大河。北望古晉疆。　李架閣の山西行省に赴くを送る

日暮、大河を踰え、北に古しへの晉疆を望む。

萬里饒風沙。地接戎與羌。
翩翩幷州兒。躍馬能挽强。
古來事爭奪。百戰在此場。
聖皇剗羣雄。撫劍定八荒。
瞻茲形勝都。建侯樹藩方。
披榛開幕府。賓從皆才良。
所期偃甲兵。民物自此康。
山河罷阻險。沃野多耕桑。
君行願努力。遠別庸何傷。

【字解】【一】大河　卽ち黃河、一統志に「太原府の形勝、恒山を左にし、大河を右にす」とある。【二】古晉疆　春秋時代の晉の領分、一統志に「太原は禹貢冀州の域、鳥分つて幷州を置く、春秋には晉たり」とある。【三】戎與羌　ともに西方の蠻族、戎は匈奴、羌は其別種。【四】幷州　上に引いた一統志の文にも見えて居て、太原地方の一部、李白の詩に經二過燕太子一、結二託幷州兒一とある。【五】挽强　强い弓を引く。【六】聖皇　明の太祖を指す。【七】剗　削つて平かにする。【八】八荒　八方、八表に同じ、卽ち四方四隅。【九】瞻　眷顧する。【一〇】建侯　諸侯を封ずる、明通紀に「洪武三年、第三子棡を封じて、晉王となす」とある。【一一】藩方　一方の藩屏。【一二】幕府　史記李牧傳に「市租、皆幕府に輸入す」とあつて、その注に「古しへ、出征、幕帷を以て府署と爲す、故に幕府といふ」とある。【一三】賓從　賓客と從者。【一四】偃　ふせる、片づける。【一五】民物　人民並に其殖產。【一六】罷阻險　險要阻害の地を守ることを廢止する。

【題義】架閣は、前に卷五、謝二周架閣移二送菊花一の題義の條にも見えて居て、地方の諸侯を監督するものである。行省は中書省、卽ち內閣の出張所で、元史に「世祖の至元元年、諸路行中書省を立て、省官を以て、出でて其事を領せしむ。軍國の重務、統攝せざるなし」とあり、地理志に「山西、はじめ中書省に統べられしが、至大四年、復た改めて行中書省となす」とある。この詩は、架閣の職に居る李某が、山西の行省に出張するを送つたのであるが、李の名字閱歷等は、分からない。

【詩意】君の旅中、日暮に黃河を踰え、北の方、古しへの晉地なる太原を望むと、萬里空濶、胡沙は風に吹かれて飛び散り、その地域は、戎羌の兩蠻族に接して居る。中にも、幷州と稱せらるる處の壯年どもは、翩翩として、勇決を以て知られ、馬を躍らしつつ强弓を挽くとのことである。そこで、古しへより爭奪を事として、ここを舞臺に、百戰して止まなかつた。今しも、わが聖皇は、天下の羣雄を次第に削平し、劍を撫して、四方四隅まで、殘らず平定されたが、形勝に富める此都會を眷顧し、ここに大諸侯を封じて、一方の藩屏とされた。これに因つて、滿地の荊榛を披いて、新に幕府を置いて、行省を設け、そこに出仕する賓客從者は、皆良才の士である。期するところは、甲冑武器を片付けて、再び著用せず、これより、民產を安康にしたいといふので、山河の險阻も、今は何の役にも立

たなくなり、地質肥沃なる平野には、種穀養蠶が共に盛である。君よ、早く其地に行かれよ。そして、聖旨を奉體して、盡力せらるべく、區區の別れなどは、決して傷むにも及ばない。

【餘論】起首より百戰在二此場一に至る八句は、山西の形勢を敍し、聖皇刻二羣雄一より、沃野多二耕桑一に至る十句は、行省を設置せし理由を述べ、君行願努力の二句は、送別の正意で、あつさりと片づけた處は、まことに宜しい。

送王哲判官之上黨

王哲判官の上黨に之くを送る

羣材萃(一)京師。有若奔(二)海川。羣材、京師に萃まり、海に奔る川の若きあり。
盍簪向(三)華館。唯君最韶(四)年。盍簪、華館に向ふ、唯だ、君、最も韶年。
忽行佐(五)名邦。輟(六)理(七)金匱篇。忽ち行いて、名邦に佐とし、金匱の篇を理むるを輟む。
朝辭紫闕(八)下。暮宿黃河壖(九)。朝に紫闕の下を辭し、暮に黃河の壖に宿す。
馬上看太(一〇)行。日落萬里煙。馬上、太行を看れば、日は落つ萬里の煙。
峩峩天井關。高城鬱相連。峩峩たる天井關、高城、鬱として相連る。
遺氓得少安。時清罷戈鋋(一二)。遺氓、少しく安きを得、時清くして戈鋋を罷む。
亟行勿憚遠。聖意煩承(一三)宣。亟に行いて遠きを憚る勿れ、聖意、承宣を煩はす。

【字解】【一】萃　あつまる。【二】奔海川　百川の東海に朝宗すること。【三】盍簪　易に朋盍簪とあつて、朋友の交際。【四】韶年　少年に同じ。【五】佐名邦　著名なる地方の事務官となる。【六】理　整理する。【七】金匱篇　宮中の祕籍、金屬製の櫃に入れてあるより云ふ。【八】紫闕　皇居。【九】壖　河畔。【一〇】太行　山名。【一一】天井關　漢書地理志に「上黨郡太行山上に在り」と見ゆ。【一二】遺氓　遺民に同じ。【一三】戈鋋　鋋は鐵の短き柄をつけた矛、漢書晁錯傳に「これ戈鋋の地なり」とある。【一四】承宣　承ほりて之を宣傳する。

【題義】判官は、地方長官に隸屬して、專ら訴訟を掌るもの。上黨は、漢書地理志に「上黨郡、秦置く、并州に屬す」とあり、一統志に「今の太原府平定州」とある。この詩は、王哲といふ人が、判官となつて、上黨に赴任するのを送つたのである。但し、王哲の字、竝に閥歴等は不詳。

【詩意】今しも、興國の氣運に乘じて、多くの人材は都に集まり、さながら、川が海に向つて朝宗するが如くである。それ等の人人は、交を結んで、立派な亭館に集會するが、その中でも、君は最も少年である。今回、外に出で、樞要なる地方の理事官となるに就いて、宮中で祕籍を整理して居たことを中止し、朝に皇城の下を辭し、夕に黃河の邊に宿られる。途すがら、馬上に太行の山を望むと、煙は萬里に立ちこめて、入日ほの暗く、その中に落ちる。天井關は、峩峩たる山上に在つて、高い城

壁が鬱として相連つて居る。君の任地は、即ち其近傍である。清平の世には、戈鋋を執つて戰ふこともなく、前朝の遺民も、少しは落ち付くことが出來る。されば速に行つて、その遠きを苦にすることなく、有り難き聖意を承はり、それを宣傳して、民心を和輯することを務めねばならぬ。

【餘論】起四句は、王晳が羣材中の最少年にして、前途多望なるを云ひ、忽行佐二名邦一の四句は、上黨に赴任すること、馬上看二太行一の四句は、途すがらなる眺觀を敍し、遣餞得二少安一の四句は、その任務の輕からざるを云うて、これを激勵したのである。

登句容僧伽塔望茅山

句容の僧伽塔に登つて、茅山を望む

高登大士塔。遙望仙人峰。　高く大士塔に登り、遙に仙人峰を望む。
茲峰夫何如。玉削三芙蓉。　この峰、夫れ何如、玉削三芙蓉。
雲深句曲樹。日落華陽鐘。　雲は深し句曲の樹、日は落つ華陽の鐘。
長君昔飛昇。駕挾雙白龍。　長君、むかし飛昇、駕して挾む雙白龍。
至今學道處。洞府留靈蹤。　今に至つて、道を學ぶ處、洞府、靈蹤を留む。
丹泉夜吐光。瑤草春含茸。　丹泉、夜、光を吐き、瑤草、春、茸を含む。
仙應笑我愚。塵世苟自容。　仙、應に我が愚を笑ふべし、塵世、苟くも自ら容る。
胡不鍊爾形。歸來蔭長松。　胡ぞ爾の形を鍊り、歸り來つて長松に蔭せざる。
望仙咫尺間。不隔雲海重。　仙を望む咫尺の間、雲海の重るを隔てず。
眞訣儻肯授。執鞭願相從。　眞訣、もし肯て授けなば、鞭を執つて、願はくは相從はむ。

【字解】【一】大士塔　柳宗元の無性和尚碑に菩薩大士、其衆無涯とある。大士は、即ち僧伽を指す。僧伽は、もと西域から來た高僧で、大師と稱せられた。【二】仙人峰　茅山の一峰と見える。【三】三芙蓉　芙蓉は峰、芙蓉二字の音の切が峰となる。つまり仙人峰の頂が、三つの峰に分れて居るのである。【四】句曲　地名、茅山の麓。【五】華陽　江寧府志に「茅山の中、華陽南洞・華陽西洞の諸勝あり」と見ゆ。【六】長君昔飛昇　神仙傳に「茅君の弟、仕へて二千石に至る。官に之くに當つて、鄉里、送るもの數百人。茅君、座に在り、乃ち曰く、余、二千石と作らずと雖も、亦た神靈の職に當る、某月某日、當に官に之くべし。賓客曰く、願はくは、寒送せむ、と。期に至つて、賓客並に至り、大に宴會を作す。茅君、父母親族と辭別し、乃ち羽蓋車に登つて去る。麾幡蓋轡、虹に隱し、虎に駕し、飛禽翔獸、その上を覆ひ、流雲彩霞、霏霏として、その左右を繞る。家を去ること十餘里、忽然として見えず」とある。長君は、茅氏の長子、即ち茅君を指す。【七】丹泉　仙丹の味のする靈泉、江寧府志に「大茅の巔、泉あり、天池といふ、大旱にも涸れず、雨み禱れば即ち應ず。南麓は、泉流、乳色を作し、饋飯泉と云ふ。北麓は、方池數尺、客至れば、水、即ち湧沸す、客客泉と名づく。西麓に二泉あり、冬日、一は氷、一は温、玉蜂泉といふ」とある。【八】瑤草　瑤は美稱、人間には看慣れぬ草。【九】含茸　繁茂、茸は毛、又は細條のもやもやと簇生したこと。【一〇】蔭長松　長松の蔭に住まる。【一一】眞訣　長生不死の祕訣。【一二】執鞭　論語に「富貴もし求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾、これを爲さむ」とあり、史記管晏列傳に「晏子なして在らしむ

れば、これが爲に線を執ると雖も、吾が忻慕するところなり」とある。いかなる賤役でも務めるといふ意。

【題義】江寧府志に「句容の崇明寺は、東北隅に在り、晉の咸熙中に建つ、義和と名づく。宋の太平興國の年、今の額に改む。寺に浮圖あり、甚だ峻、鐘樓に趙子昂の題扁あり」と見ゆ。茅山は、卷五、送二蕭隱君一の詩中に詳しく注して置いた。元と茅君昇仙の處。この詩は、句容崇明寺の僧伽塔に登り、茅山を望んで作つたのである。

【詩意】僧伽大師の寶塔に登り、遙に茅山たる仙人峰を望んだ。この峰は、如何なる形狀を爲して居るかといふと、頂は更に三峰に分れて、さながら、玉を削つた樣である。折から、句曲の遠樹は、深く雲に閉ぢこめられ、華陽洞邊、鐘聲綏く響いて、夕日は落ちかかつて居る。茅氏の長子、卽ち茅君は、むかし、ここから昇仙し、二疋の白龍を挾み、それに跨つて往つたといふことで、今日に至るまで、茅君が仙術を修行した處は、洞府の中に儼然たる靈蹤を留めて居て、仙丹の味のする泉は、夜になると光を放ち、この世の物ならぬ琪草は、春になると、生ひ茂つて居る。仙人は、我が愚にして、この塵の世に苟くも容れられむことを求むるを笑ふであらう。然らば、なぜ汝の形體を鍊り、すつかり修行した後、歸り來つて、長松の蔭に住まはぬか。その仙人は、咫尺の間に見える樣で、重なつて海なす雲が相隔つて居るのでもない。もし仙人が眞訣を傳授して呉れるならば、如何なる賤役でも、屹度務め、これに從つて道を學びたいものである。

【餘論】起六句は、望中の遠景、長君昔飛昇の六句は、茅山の主たる茅君昇仙の事を追憶し、仙應レ笑二我愚一より以下八句は、この身、仙を學ぶを欲せざるに非ざるも、その道なきを云うて、歎息したのである。

贈楊榮陽

嘉陵美山水。亦復富文彥。
楊君產其邦。材拔性高狷。
布衣走名都。早入藝林選。
客屈稷下談。王邀鄴中宴。
出門得名聲。不假親舊援。
匣劍未久埋。囊錐已先見。
吐詞實瑰奇。讀者心欲顚。
刀鳴鬬夫勇。花妥笑女倩。

楊榮陽に贈る

嘉陵、山水美に、亦た復た文彥に富む。
楊君、その邦に產し、材拔いて性高狷。
布衣、名都に走り、早く藝林の選に入る。
客は稷下の談に屈し、王は鄴中の宴に邀ふ。
門を出でて名聲を得、親舊の援を假らず。
匣劍、未だ久しく埋もれず、囊錐、已に先づ見はる。
詞を吐けば實に瑰奇、讀者、心、顚はむと欲す。
刀鳴つて鬬夫勇、花妥れて笑女倩たり。

如觀廣場中。百戲張曼衍。
平生眼無人。遇我獨相善。
陌頭每竝出。兩騎無後先。
喜從兎園游。慙受狗監薦。
君歌我固服。我賦君亦羨。
墮筵吟帽烏。踏席舞裙茜。
醉中共笑語。往往雜諧諺。
有時出城西。山水恣攀踐。
巖眠曙猿驚。澗飲夏鶯囀。
吳宮妓去榭。蕭寺僧開殿。
龍門剝陰苔。高什記題徧。
歡游正相酣。世事忽驚變。
朋儔半生死。一往如激電。

觀るが如し、廣場の中、百戲、曼衍を張るを。
平生、眼に人なく、我に遇うて、獨り相善し。
陌頭、每に竝び出で、兩騎、後先なし。
喜んで兎園の游に從ひ、狗監の薦を受くるを慙ぢ。
君の歌、我、もとより服し、我が賦、君、亦た羨む。
筵に墮つ吟帽の烏、席を踏む舞裙の茜。
醉中、ともに笑語、往往にして諧諺を雜ふ。
時あつて、城西に出で、山水、攀踐を恣にす。
巖に眠つて、曙猿驚き、澗に飲んで、夏鶯囀す。
吳宮、妓、榭を去り、蕭寺、僧、殿を開く。
龍門、陰苔を剝ぎ、高什、記題徧し。
歡游正に相酣に、世事、忽ち驚變。
朋儔、半ば生死、一往、激電の如し。

我棹返江潯。君車赴淮甸。
旋聞逐流人。居濠又移汴。
一身去何費。空橐唯破硯。
危塗晚行疲。欲進足如罥。
狼來樹杪避。蝎走燈下見。
渡河自撑篙。水急船斷牽。
及至秋已深。舊禍風裂片。
難尋高陽飲。空弔鄢陵戰。
聖恩忽加憐。收拔佐山縣。
卑曹敢云辭。執版謁府掾。
官庖盡炊藜。民賦半輸絹。
低飛蓬蒿間。不異雉帶箭。
有親寓京師。年老闕供饌。

我が棹、江潯に返り、君の車、淮甸に赴く。
旋ち聞く、流人を逐ひ、濠に居り、又汴に移ると。
一身、去つて何をか費らす、空橐、唯だ破硯。
危塗、晚行疲れ、進まむと欲して足罥むが如し。
狼來れば樹杪に避け、蝎走れば燈下に見る。
河を渡つて自ら篙を撑し、水急にして、船、牽を斷つ。
至るに及んで、秋、すでに深く、舊禍、風、片を裂く。
高陽の飲を尋ね難く、空しく鄢陵の戰を弔ふ。
聖恩、忽ち憐を加へ、收拔して山縣に佐たり。
卑曹、敢て辭すと云はむや、版を執つて府掾に謁す。
官庖、盡く藜を炊ぎ、民賦、半ば絹を輸す。
低く飛ぶ蓬蒿の間、雉の箭を帶ぶるに異ならず。
親あり、京師に寓し、年老いて、供饌を闕く。

欲奉朝夕歡。去職胡敢擅。
晨上宰相書。得歸遂微願。
上堂具珍鮭。呼婦賣釵釧。
我時別君久。問訊愧無便。
空題憶君詩。細字書滿卷。
今春被詔起。前史預編撰。
始來長干門。楊柳正飛燕。
逢君風塵餘。不改舊顏面。
握手話苦辛。悲喜雜慶唁。
客中雖無錢。自寫賒酒券。
邀來臥東閣。月出初鎖院。
君言涉艱難。壯志今已倦。
回頭悟前非。更名慕蘧瑗。

朝夕の歡を奉せむと欲するも、職を去る、胡ぞ敢て擅に晨に宰相に書を上り、歸るを得て微願を遂ぐ。「せむや。」堂に上つて珍鮭を具へ、婦を呼んで釵釧を賣る。我、時に君に別るること久しく、問訊、愧づらくは便なし。空しく、君を憶ふの詩を題し、細字、書、卷に滿つ。今春、詔を被つて起ち、前史、編撰に預る。はじめて長干の門に來れば、楊柳、正に燕を飛ばす。君に逢ふ風塵の餘、舊顏面を改めず。手を握つて苦辛を話し、悲喜、慶唁を雜ふ。客中、錢なしと雖も、自ら酒を賒るの券を寫す。邀へ來つて東閣に臥し、月出でて、初めて院を鎖す。君は言ふ、艱難を涉り、壯志、今すでに倦む。頭を回らして、前非を悟り、名を更めて蘧瑗を慕ふと。

我聞棠谿金。不畏經百鍊。
胡爲暫失路。遽欲老貧賤。
吾皇奮神武。四海始安奠。
棧通諭夷文。驛走徵士傳。
時巡抗霓旌。肆覲冠星弁。
功成萬瑞集。禮欲議封禪。
君才適時需。正若當暑扇。
手持照國珠。胸出補袞線。
便應上金鑾。立對被天眷。
嗟余忝載筆。鼠璞難自衒。
幸茲際昌辰。魏闕寧不戀。
但憂誤蒙恩。不稱終冒譴。
秋風楚潮滿。歸舸帆欲轉。

われ聞く、棠谿の金、百鍊を經るを畏れず。胡すれぞ、暫く失路、遽に貧賤に老いむと欲する。吾が皇、神武を奮ひ、四海、はじめて安奠。棧は通ず夷を諭すの文、驛は走らす徵士の傳。時に巡つて霓旌を抗げ、肆に覲して星弁を冠す。功成つて萬瑞集まり、禮、封禪を議せむと欲す。君が才、時の需に適ふ、正に暑に當る扇の若し。手に照國の珠を持し、胸に補袞の線を出す。便に應に金鑾に上り、立對、天眷を被るべし。嗟す余、載筆を忝うし、鼠璞、自ら衒ひ難し。幸茲に昌辰に際し、魏闕、寧ろ戀はざらむや。但だ憂ふ、誤つて恩を蒙り、稱はずして終に譴を冒さむ「ことを。」秋風、楚潮滿ち、歸舸、帆、轉せむと欲す。

君若念故交。殷勤一相餞。

【字解】【一】 嘉陵美山水　一統志に「嘉陵江は、順慶府城の東に在り」と記し、唐書斷に「明皇、怒ち嘉陵江の山水を思ひ、桑生に驛遞を假し、往いて寫顧せしむ。廻る日云ふ、臣、紛本なし、並に記して心に在りと。大同殿に遣して之を圖せしむ。嘉陵江三百里の山水、一日にして畢る」とある。【二】 文彥　文才ある俊秀の士。【三】 材拔　その材器が衆人より拔き出る。【四】 高鵬　高尚にして鵬介なること。【五】 藝林　學界、魏晉常談傳に「爽、教授の暇、六經の略注を述ぶ。その序に曰く、頃ろ暇日に因つて、意を藝林に屬す」とある。【六】 稷下　史記田完世家に「齊の宣王、文學游說の士を喜び、淳于髡・田駢・接子・愼到・環淵の徒、七十六人、皆列第を賜うて、上大夫と爲す、これを以て、齊の稷下、學士復た盛なり」とあつて、その注に「齊に稷門あり、城門なり、游談の士、期して稷下に會す」とある。【七】 鄭中宴　鄭中は卽ち鄭邸。劉公幹公讌詩の注に「楨、魏の太子の文學たり、この宴、王粲と同じく、鄭宮に於て作るなり」とある。【八】 蘇雒已先見　史記平原君列傳に「平原君曰く、賢士の世に處る、譬へば、錐の囊中に處るが若く、その末、立ちどころに見はる。今、先生、勝の門下に居ること、ここに三年、勝、未だ聞くところあらず。毛遂曰く、臣、乃ち今日請ふ、囊中に處らむのみ。遂をして、早く囊中に處るを得せしむれば、乃ち脫穎して出でむ、特だ其末見はるのみに非ず」とある。【九】 魂奇　魂も參奇の意。【一〇】 花安　安は垂れる、杜甫の詩に花安鬢消蝶、とあり、遙歷叢話に「西北の方言、醒を以て安と爲す」とある。【一一】 癸女倩　倩は口元に愛嬌ある貌。【一二】 廣場　廣い演劇場。【一三】 百戲　さまざまの見世物。【一四】 曼衍　古代百戲の一、漢書西域傳の贊に「巴俞・鄨虛・海中・碭極・曼衍・魚龍・角抵の戲を作す」とある。【一五】 兎園游　西京雜記に「梁の孝王、兎園を築き、四方の豪傑を招延す」とある。【一六】 狗監鶴　史記司馬相如列傳に「楊得意、狗監となつて上に侍す。上、子虛の賦を讀んで之を善しとす。得意曰く、臣の邑人司馬相如、この賦を爲る」とある。【一七】 吟帽烏　詩人の帽が黑い、烏帽の字が析用す。【一八】 舞裙黃　黃は草の名、あかれぐさ、赤い色の染料とする、轉じて赤色。舞女の下衣が赤い。亦た黃裙の字を析用す。【一九】 諧謔　諧謔に同じ、おどけふざける。【二〇】 妓去樹　臺榭の中、今や宮女も居らぬ。【二一】 蕭寺　杜陽雜編に「梁の武帝、佛を好み、浮屠を造り、蕭子雲に命じ、飛白もて大書して蕭寺といふ」とある。武帝の姓は蕭氏、卽ち蕭氏の寺といふ義。後には、ひろく寺を云ふ樣になつた。又蕭は蕭條・蕭寂の蕭で、さびしい寺といふ說もある。【二二】 龍門　地名、前に卷五に其地の詩が出て居る。【二三】 陰苔　巖かげの苔。【二四】 高什　立派な詩。【二五】 如激電　その速なるを云ふ、梁の昭明太子の七契に激電比速、驅風獸驅とある。【二六】 赴淮甸　張士誠の處に往つて丞相府記室となりしことを云ふ。【二七】 逐流人　流人と一處になる、蹤を得て遠地に徙されること。【二八】 居漆　漆は臨漆。士誠敗後、基は初め此に安置された。【二九】 移汴　汴は河南。【三〇】 危壁　危險なる道。【三一】 如胃　からめられた樣である。【三二】 樹杪避　木の梢に上つて避ける。【三三】 捧篙　竿を刺す。【三四】 船斷索　舟を繫いでおつた繩が切れる。【三五】 高陽飲　史記酈生列傳に「沛公、兵を引いて陳留を過ぐ。酈生、軍門に謁りて上謁す。使者、出でて謝す。酈生、目を瞋らし、劍を按じて叱して曰く、走つて、復た入つて而の公に言へ。吾は、高陽の酒徒、儒人に非ざるなり」とある。【三六】 鄱陵戰　國語に「欒武子、荊人と鄱陵に戰つて、大に之に勝つ」とあり、後漢書郡國志に「潁川郡鄢陵」とある。【三七】 取拔　取り上げて拔擢する。【三八】 山縣　山ある地方の小縣、蔡陽を指す。【三九】 卑官　賤しき官吏。【四〇】 執版　後漢書范滂傳に「版を投じ、官を棄てて去る」とあつて、その注に「版は笏なり」とある。【四一】 府掾　六書故に「掾は乃ち屬官の通稱」とあつて、府廨の屬官。【四二】 官庖　官舍の臺所。【四三】 炊藜　あかざを飯にたき込む。【四四】 民賦　賦は租稅。【四五】 輸粳　唐書食貨志に「凡そ田を授かりしもの、丁は歲ごとに粟二斛、稻三斛を輸し、これを租といふ。丁、鄉の出すところに隨つて、歲ごとに、粳二疋・絁絹二丈を輸し、布は五の一を加ふ、綿三兩、麻三斤、鄙遠に非ざれば、銀十四兩を輸し、これを調といふ」とある。【四六】 雉帶箭　韓退之の詩題にもあるし、陸游の詩にも壯哉帶箭、耿介死不ㇾ顧とある。【四七】 供饌　食物の供給。【四八】 晨上宰相書　朝に宰相に向つて上書する。【四九】 微顯　微細なる志望。【五〇】 珍鮭　鮭は集韻に「音解、吳人、魚菜を謂うて總稱す」とあり、黃庭堅の詩に鯨鯢養ㇾ鮭供三珍鮭一とある。【五一】 釵鈿　鈿は脫輪、杜甫の詩に家貧賣三釵鈿一只待ㇾ獻三香醪一とある。【五二】 問訊　起居を問ひ尋ねる。【五三】 前史　前朝、卽ち元の歷史。【五四】 長干門　長干は地名、そこに近き城門。【五五】 慶暗　よろこびを言ふと悔やみを述べると。【五六】 賒酒賒　賒は價を借りて物を買ふこと、卽ち後から支拂ふこと、帳面につけ置く。陸游の詩に旋買三酒券一何時足とある。【五七】 東園　天界寺に開局したる史館の東園であらう。【五八】 鎭院　役所の引けること、宋史職官志に

「凡そ宰相を拜し、及び事の重きものは、曉漏上り、天子、內東門の小殿に御し、詔を宣して面諭し、筆札を給し、得るところの旨を書し、稟奏して院に歸る。內侍、院門を鎖ち、夜、漏盡くれば、詞を具して進入す」とある。【五八】 悟前非　淮南子に「蘧伯玉、行年五十にして四十九年の非を知る」とある。【六〇】 更名　原注に「君、近ごろ、名を去非と改む」とある。【六一】 蘧瑗　卽ち上に見えた蘧伯玉、伯玉は字、瑗は名。【六二】 棠谿金　金は銅、史記蘇秦傳に「韓卒の劍戟は、皆冥山棠谿より出づ」とある。【六三】 百鍊　韓愈の詩に「何異百鍊鋼、化作三繞指柔」とある。【六四】 晉鼎　明の太祖。【六五】 安黃　安らかに置かれる。【六六】 棧　蜀に通ずる棧道。【六七】 諭夷文　史記司馬相如傳に「會ま、唐蒙、使して略ぼ夜郎西僰中を通ぜむとし、巴蜀の卒千人を發し、郡又多く爲に轉漕萬餘人を發し、興法を用ひて、その渠帥を誅す。巴蜀の民、大に驚恐す。上、これを聞き、乃ち相如をして唐蒙を責めしめ、因つて、巴蜀の民に諭告するに、上の意に非ざるを以てす」とある。【六八】 徵士傳　徵士は、民間より召し出した俊秀の士。傳は驛馬。明通紀に「洪武元年九月、詔を下して賢を求む。二年、詔して、元史を修す。三年、詔して、科を開いて士を取る。四年二月、親ら策して進士を試む」とある。【六九】 時巡　巡は巡狩。【七〇】 抗賁旌　抗は、指し上げる。賁旌は、虹の如き模樣ある大旗。天子の鹵簿の先頭に立てて、高く指し上げる。司馬相如の上林賦に「拖三蜺旌、靡三雲旗」とある。【七一】 肆覲　大に朝覲の禮を行ふ。【七二】 冠星弁　弁は冠、飾として星の付けてある冠を被る。詩經に「會弁如星」とある。【七三】 萬瑞　さまざまの祥瑞。【七四】 讓封禪　封禪は泰山に封じ、梁父に禪することで、帝王に取つては第一の大禮としてある。漢書司馬相如傳に「相如、すでに病んで免じ、茂陵に家居す。天子曰く、司馬相如、病甚し、往いて悉く其書を取るべしと。所忠をして往かしむ。而して、相如、すでに死し、家に書なし。その妻に問ふ。對へて曰く、長卿、固より未だ嘗て書あらざるなり、未だ死せざる時、一卷の書を爲つて曰く、使者、來つて書を求むるあらば、これを奏せよと。その書、封禪の事を言ふ、所忠奏す」とある。【七五】 時需　刻下の需用。【七六】 照國琢　史記田敬仲世家に「魏王、齊の威王と田に郊に會す。魏王問うて曰く、王も亦た寶あるか。威王曰く、有るなし。魏王曰く、寡人の若き、國小なり、尙ほ徑寸の珠、車の前後各十二乘を照らすもの、十枚あり。威王曰く、寡人の寶となす所以は、王と異なれり。吾が臣に檀子・盼子・黔夫・種首といふものあり、將に以て千里を照らさむとす、豈に特だ十二乘のみならむや」とある。もと千里を照らすといふのであるが、それでは語を成さぬから、國を照らすと改めたのであらう。【七七】 補衮闕　詩經に衮職有闕、仲山甫補之とあつて、天子に失政があれば、仲山甫といふ名臣が之を補足するといふ譬。闕は綻で、衣服の破れたものを補綴する處から、失政補足の綻といつたのであらう。【七八】 金鑾　唐宮の殿名、唐書李白傳に「天寶中、賀知章、これが言ふ、金鑾殿に召見し、當世の事を論じ、頃一篇を奏せしむ」とある。【七九】 立對　立ちどころに返答をする。【八〇】 天眷　天子の眷顧。【八一】 鼓筆　禮記に「史は筆を鼓せ、士は言を載す」とあつて、卽ち史官となりしこと。【八二】 鼠璞　劉豊の審名に「周人の玉璞、その實は死鼠、楚の鳳凰、乃ち是れ山雞」とあつて、周人は鼠の死んで干からびたのを璞と呼んで居た。【八三】 自衒　自らてらふ、自分で吹聽をする。魏志陳思王傳に「夫れ自ら衒ひ自ら媒するは、士女の醜行なり」とある。【八四】 昌辰　清世に同じ。【八五】 魏闕　宮城を云ふ。【八六】 不稱　職が勤まらぬ。【八七】 楚潮　楚は楚江、卽ち揚子江。【八八】 歸舸　舸は舟の大なるもの。【八九】 殷勤　れんごろに。

【語義】 楊榮陽は卽ち楊基、榮陽に知となりしが故に云ふ。基は、張士誠の部下たる饒介の處に客たりしに因り、士誠の敗後、臨濠に安置せられ、尋いで、河南に徙されたが、洪武二年、放ち歸され、未だ幾ならずして、榮陽に知となり、その後、南京に歸つて來て、青邱と再會したから、青邱は、この詩を作つて贈つたのである。

【詩意】 蜀の嘉陵江は、山水の眺、殊に美しく、その上、文才ある俊秀の士を多く輩出せしめた。わが楊君も、その地に生まれ、材器、羣を拔き、天性、高尙にして狷介である。楊君は、布衣の身を以て、遠く走つて吳中の名都たる蘇州に來たが、早くも學界に於て特選せられる程、世に知られ、來訪する客人は、古しへの稷下に見る樣な高談に屈せられ、諸侯は、むかし魏王が鄴中に於て雅宴を催し

たるが如く、毎毎これを招待し、決しておろそかにはしなかつた。一たび、門を出づれば、忽ち名聲を得、しかも、全く君の才學の爲であつて、決して、親戚故舊の援助を借りた譯ではない。たとへば、劍が匣中に藏せられて、その儘埋沒して仕舞ふ樣なことはなく、錐を囊中に入れると、その尖端が既に先づ見はれる樣なものである。君が文詞を吐き出せば、實に瑰麗新奇であつて、讀者は、覺えず心の顫く位。その雄壯なるは、刀鳴つて鬪士が勇み立つが如く、その妖艶なるは、花が垂れて、その側に笑ふ女の口元の愛嬌に富めるが如く、その變化百出するは、廣い劇場の中で百戲を演じ、魚龍曼衍に及ぶ樣である。君は、平生、眼中に人なき程であつたが、予に遇ふと、忽ち親密になり、毎毎、陌頭に馬を驅つて、後にもならず、先にもならず、必ず相竝んで行くを常とした。君も、予も、兎園の樣な處で、王者から招待されることは喜んだが、狗監一輩の推薦を受けることを恥として居た。君の歌は、予、もとより推服し、予の賦は、君も亦た欣羨して措かなかつた。風流の宴會に於ては、吾吾詩人の帽の黑いのが筵に落ち、舞妓の裙の赤いのが席を踏み、逸興もとより淺からず、醉つた揚句には、ともに笑語し、往往、滑稽を交へて戲れ合つて居た。それから、時としては、城西に出かけて、勝手次第に山水の名區に攀踐を試みたが、巖上に眠れば、曉に啼く猿が驚き、澗底に飲めば、夏の鶯の囀るのが聞こえた。吳の館娃宮は、すでに荒廢し、當日の宮女は、今や臺榭の中に在らず、梁代の名殘を留めたる古寺では、住持の僧が佛殿の扉を開いて迎へ入れる。ある時は、遠く龍門の勝を探り、巖かげの苔を剝いで、君は名作を處處に題せられた。かくの如き面白き游の正に酣なるに際して、天下の形勢、急に一變し、平生の交友は、生死相半し、一たび往くものは、復た歸らず、その速なることは、電光の如くであつた。兎角する內、予は、棹を返して江上に來り、君は、車を驅つて、淮水の邊に赴かれたが、聞けば、君は、饒介の客たりし故を以て、流人の仲間にせられ、はじめは、臨濠に居り、後には河南の汴州に移されたといふことで、一身、何物をも奮らさず、旅囊の中には、唯だ一面の破硯が入れてあるだけであつた。その道中、危險なる道をたどり、晩になると、疲れ切つて、進まむと欲しても、兩足は、からめられた樣で、少しも働かず、止むなく野宿し、狼が來れば、木の梢に登つて之を避け、蝸が走ると、燈下に之を見出して大騷ぎをするといふ始末。黃河を渡る時は、自分で竿を刺さうとした處が、流が急な爲に、舟を繫いであつた繩が、ふつつり切れて押し流され、まことに危いことであつた。それから、汴州に到著すると、秋も既に深き頃で、著ふるした短衣は、風に吹きちぎられて、寒を防ぐこともで出來ず、高陽の酈食其の樣に酒が飲めれば、まだしもなれども、それも出來ねば詮なく、途すがら、鄢陵の古戰場を弔つた處で、あまり、面白くもなかつた。その中に、聖主は、流石に之を知つて憐を加へ、拔擢して蔡陽といふ山縣の理事官とした。もとより、卑しい官職ではあるが、敢て辭退するとは云はず、笏を執つて、區區たる府掾に謁し、そこで愈よ就職した。官舍の臺所は、何處でも、あかざを炊き交せ、民の出す租稅は、半分以上、絹を以てし、もとより、片

田舍たることは爭はれず、かくては、箭を帶びた雉が低く蓬蒿の間に飛んで居るやうなものである。現に君の兩親は南京に寓居し、次第に年を取つて、食事の供饌さへ不十分であるから、どうかして、朝夕の歡を奉じたい、しかし、職を去ることは、勝手にする譯にも行かぬといふので、晨に書を宰相に上ると、幸にも微願を遂げて、歸ることが出來、やがて、臺に上つて、珍らしい魚菜を備へむが爲に、妻を呼んで釵や腕輪を賣らしめた。予は、君に別れること、すでに久しく、近況を問ふ手だての無いのに閉口し、空しく、君を懷ふ詩を作り、細字で書いたのが、積つて一卷となる位。しかるに、今春、詔を被つて起ち、元史の編撰に參與することに成つた。そこで、始めて長干門に來て見ると、楊柳が青く茂つて、燕が飛んで居る晩春の頃であつた。そこで、風塵の餘、幸に恙なかりし君に遇ひ、むかしの俤の儘なるを嬉しく思ひ、手を執つて苦辛の事どもを話し、悲しい事や嬉しい事が、相次いで、喜びと悔みとが、まぜこぜに成るといふ始末。もとより、客中の身で、錢は持ち合せぬが、いづれ後から拂ふといつて、酒屋の帳面につけて、酒を賣つて貰ひ、今居る天界寺の東閣に君を迎へたが、折から、月すでに出でて、役所を閉め切る時であつた。かくて、酒を置いて、閒話する閒に、君の言葉は、艱難を極めたる樣樣の事に涉り、昔日の壯志も、今は倦み疲れ、功名富貴を願ふこともなく、頭を回らして往事を追想し、愈よ前非を悟つたから、かの蘧伯玉の眞似をして、名をも去非と改めたとのことである。予の聞くところに據れば、棠谿に產する銅は、いくら鍛錬されても、決して畏れないといふことで、謂ゆる艱難は、取りも直さず、鍛錬である。それだのに、如何なれば、一寸ばかり失路の嘆を爲したといつて、遽に世事を抛擲して、貧賤の中に甘んじて老い朽ちむとするのであるか。今しも、天子は、神武を奮ひ、四海の隅隅まで、はじめて安らかに置かれ、棧道を通じては、西南夷を招諭する詔敕が發布せられ、天下の士を召して、隨處の亭驛には、宿つぎの馬を走らせ、それのみか、時には巡狩を爲して、鹵簿の前頭に高く霓旌を指し上げ、大に朝覲の禮を修し、多くの侯伯は、星を鏤めたる冠を戴いて入朝し、統治の功、方に成つて、多くの祥瑞が集まつて生じ、この上は、帝者唯一の大禮たる封禪をさへ行はうと評議する折から、君の才は、刻下の需用に適合し、さながら、暑熱に向ふ時の團扇と同じである。もとより、君の手には、一國を普ねく照らす樣の見事な珠を持つて居るし、君の胸からは、衰職の闕けたるを綴り直す絲をさへ繰り出すことが出來るから、やがて、金鑾殿に上り、立ちどころに聖問に對へて、天子の眷顧を蒙ることも出來やう。これと打つて變つて、余は、忝なくも筆を戴せて、史官と成つたとはいへ、璞といふものの、本が鼠の死骸に過ぎざれば、いくら何でも、自ら衒うて價値ある樣に吹き立てることも出來ず、幸にも、ここに太平の御世に際し、皇城が戀しくて何時までも都に留まつて居たいとは思ふものの、誤つて君恩を蒙り、その職に稱はずして、譴責されるやうなことがあつては成らぬので、愈よ職を罷めることにした。今しも、秋風吹き渡つて、揚子江にも潮が漲り、歸舟には帆を挂けて、動き出さうとして居

る。君、もし舊來の交誼を思はば、どうか、懇に我が行を餞して、快く別れやうではないか。

【餘論】この詩は、前に在つた感レ奮酬二宋軍咨見レ寄・送二徐七山人往二蜀山書舍一・答二衍師見レ贈の諸篇と略ぼ同じで、いづれも、作者の親交であるだけに、敍述周匝にして、思致深遠である。起首より百戲張二曼衍一に至るまでは、楊基の出身、平生眼無レ人より一往如二激電一に至るまでは、青邱との交際、我棹返二江渟一より呼レ婦賣二釵釧一に至るまでは、臨濠に安置せられ、旋つて河南に徙り、尋いで、起つて滎陽に知となり、後、南京に歸りしことを敍し、我時別レ君久より更レ名慕二蘧瑗一に至るまでは、金陵の再會を記し、我聞棠谿金より立對被二天眷一に至るまでは、楊基の才、必ず大に用ひらるべきを言ひ、措辭典雅、まことに堂堂たる大手筆を推すべく、嗟余忝二載筆一より結末に至るまでは、自己の境涯より、別離に及び、中にも、秋風楚湖滿の四句は、延佇神に入るの趣がある。

寺中早秋

秋風入レ寺早。孤客驚二離索一。
斜日數蟲懸。槐花雨餘落。
砧聲起二廢苑一。簟色淒二高閣一。
獨憐明鏡中。玄鬢猶如レ昨。

秋風、寺に入ること早く、孤客、離索に驚く。
斜日、數蟲懸り、槐花、雨餘に落つ。
砧聲、廢苑に起り、簟色、高閣に淒たり。
獨り憐む、明鏡の中、玄鬢、猶ほ昨の如きを。

【字解】【一】離索　離羣索居の略、ひとりで羣を離れて居を索める。【二】簟色　簟は竹むしろ。【三】獨憐　ここの憐は愛する意。【四】玄鬢　黒い鬢。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】秋風は早くも寺中に吹き入り、孤客は、今更ながら、離羣索居の淋しさを覺える。夕日の中に、數羽の蟲が飛んで居るのは、さながら懸れるが如く、槐の花は、雨後に落ちる。砧うつ聲は、廢苑の中に起り、高閣の上では、簟の色まで冷いやりとして淒しい。ただ鏡を見ると、頭上の髮の黒いことは、昨日と異ならず、少しも老いさらぼいた氣色なきは、われながら、聊か氣强い心地がする。

【餘論】前の六句は、景を敍し、結二句は、情に入つて婉、但し、これも、襲用の章法である。

天界翫月

天界、月を翫ぶ

洪武二年八月十三日。元史成。中書表進。詔賜纂修之士一十六人銀幣。且引對奬諭。擢授庶職。老病者則賜レ歸。于鄉。閱二日。中秋。諸君以レ史事甫成。而佳節適至。又樂上賜之優渥。而惜同局之將違也。乃卽所寓

天界佛寺之中庭置酒爲翫月之賞分韻賦詩以紀其事啓得衛字云

【訓讀】洪武二年八月十三日、元史成り、中書より表進す。詔して、纂修の士一十六人に銀幣を賜ひ、且つ引對奬諭、擢んでて庶職を授けられ、老病の者には鄉に歸るを賜ふ。二日を閲して中秋、諸君、史事甫めて成つて、佳節適ま至り、又上賜の優渥を樂んで、同局の將に違はむとするを惜むを以てや、乃ち寓するところの天界佛寺の中庭に卽き、酒を置いて翫月の賞を爲し、韻を分つて詩を賦し、以て其事を紀す。啓、衛の字を得たりと云ふ。

聖主念前鑒述作徵名儒
羣來高館間則跡愧我愚
孰謂此責輕毫端有褒誅
書成進丹陛召對共拜趨
去留雖不同雨露均沾濡
已淹三時勞可廢一夕娛

聖主、前鑒を念ひ、述作、名儒を徵す。
羣がり來る高館の間、跡を則へて我が愚を愧づ。
孰れか謂ふ、この責輕しと、毫端に褒誅あり。
書成つて丹陛に進め、召對して共に拜趨。
去留、同じからずと雖も、雨露、均しく沾濡。
すでに、三時の勞を淹す、一夕の娛を廢すべけむや。

況逢端正月當空照眉鬚
流光滿金界境與人間殊
廣庭布長筵嘉肴薦芳腴
豈唯多士集亦有名僧俱
興酣貴形忘諧笑不復拘
觴行豈辭勤仰看轉斗樞
明晨卽分袂此樂誠須臾
人生四海間相見皆友于
不知誰使令流蕩無根株
忽然此相遇旋復成天隅
願各崇令名逍遙步亨衢
明年重見月相憶當長吁

況んや逢ふ端正の月、空に當つて眉鬚を照らす。
流光、金界に滿ち、境は人間と殊なれり。
廣庭に長筵を布き、嘉肴、芳腴を薦む。
豈に唯だ多士の集まるのみならむや、亦た名僧の俱にするあり。
興酣にして、形を忘るるを貴び、諧笑、復た拘せず。
觴の行る、豈に勤むるを辭せむや、仰いで斗樞を轉ずるを看る。
明晨、卽ち袂を分つ、この樂、誠に須臾。
人生四海の間、相見る皆友于。
知らず誰か使令して、流蕩、根株なき。
忽然、ここに相遇ひ、旋ち復た天隅となる。
願はくは、各〻令名を崇くし、逍遙、亨衢に步せむ。
明年、重ねて月を見ば、相憶うて當に長吁すべし。

【字解】【一】前鑒　前代の事蹟を鏡とすること。【二】述作　論語に「述べて作らず」とあるが、ここでは述べて且つ作る、つ

まり元史を編述すること。【五】高館　史館を指す。【六】厠跡　跡を交へる。【七】褒詐　その行事如何に因りて、或は褒賞し、或は擎詐する。【八】丹陛　赤色の段階。【九】召對　天子に召され且つ間に答へる。【一〇】沾濡　二字ともにうるほふ。【一一】三時勞　元史編纂の爲に召し出されたのが二月、出來て奏上したのが八月で、春夏秋の三季に亙れる勤勞。【一二】端正月　形の眞圓な月、中秋の月を指して云ふ。韓愈の詠月の詩に三秋端正月、今夜出東溟とある。【一三】流光　流るるが如き月の光。【一四】金界　黄金世界。給孤園布金の故事より寺域をいふ。【一五】芳馥　香ばしく且つ味よきもの。【一六】名僧　この頃、天界寺の住職は宗泐といつて、詩文兼達の高僧であつた。【一七】形忘　形骸を忘れる。【一八】不復拘　少しも拘束せられぬ。【一九】笑行　杯の巡ること。【二〇】豈辭勤　煩繁なることを厭はぬ。【二一】斗樞　北斗樞軸。【二二】友予　より友情あること、即ち兄弟の義、杜甫の詩に山鳥山花皆友予とある。【二三】使令　命令する。【二四】旋復　旋は忽ちに同じで、稍や意味が輕い。【二五】天隅　天の一隅となる。【二六】步亭衢　昌に何天之衢亭とある、少しも障礙なき通衢を散歩する。【二七】長吁　長嘆に同じ。

【題義】天界翫月は、史局の開かれて居た天界寺に於て、中秋の月を賞するといふ義。序の意味は、——洪武二年八月十三日に、元史が愈よ完成し、中書省から上表を添へて、天子の御手元に進獻すると、詔して、編纂に關係した十六人の者どもに銀幣を賜はり、且つ拜謁を仰せ付けられて、賞美の御言葉があり、そして、その多數は拔擢して庶政の官職を授けられ、年老いたもの病あるものには歸國を許された。二日を經て、十五日は即ち中秋、編修の諸君は、修史の事、初めて片づき、そして、折よく佳節に出合ひ、又賜はり物の御手厚きことを樂み、同局の面面、これで愈よ別れることを名殘惜しく思ひ、そこで、今まで皆皆が寓居した天界寺の中庭に於て、酒宴を催して月見を爲し、席上韻を分つて詩を賦し、以て其事を紀したが、予、高啓は、衢の字を得て、次の詩を作つた——といふのである。大全集には、一十六人を一十八人に作つてある。これに就いては、年譜、洪武二年の條にも注記して置いた。初め徵されたものは三十二人、その中、十八人の姓名は分つて居るから、さう書いたのかも知れぬが、明史藝に一十六人とあるから、その方が正しいと思はれる。

【詩意】今上皇帝は、前代の史實の以て殷鑒に當つべきを思ひ、これを編述せしめむが爲に、天下の名儒を召し出され、皆皆詔を畏み、羣つて入京し、高館の間に充滿した位。わが愚にして亦た跡を交へることが出來たのは、まことに、お恥かしい始末。抑も、史官たるや、その責、決して輕からず、筆の先で前人を褒賞したり、誅罰したりするので、その心遣ひも、又一しほである。やがて、元史が兎も角も出來上つたから、これを丹陛の下に進獻すると、天子から、謁見を命ぜられて、一同謹んで拜趨した。それから、或者は、京に留まつて庶職を授かり、或者は、老病等の爲に歸國を許され、去留同じからざるも、雨露に比すべき聖恩には均霑した次第。すでに、三季に亙つた勉强が溜つて居るから、一夕の愉快位は、止める譯に行かず、まして、一年中の最も好い月が、高く中天に上つて、人の顰眉を照らし、流るるが如き清光は、寺域內に滿ち、そして、この境地が、浮世と全く殊なるに於ては、猶更の事である。そこで、廣い庭に長い席を布き、心して肴を擇び、香ばしく且つ味よきものを薦めた。ここに、多くの文士が集まつたばかりではなく、住職も、詩文の出來る名僧であつ

たから、話がまことに面白い。その興醰なるに當つては、全く形骸を忘れ、諧謔笑語、少しも遠慮することなく、杯の巡ることの頻繁なるも、もとより辭せず、仰ぎ見れば、北斗の樞軸が西に轉ずる頃に成つた。明日は、卽ち袂を分つて、お別れをするので、折角の此樂も、まことに、わづかばかりの間である。抑も、人の此世に在るや、相見た上は、兄弟も同樣であるが、誰が命令して、さながら、浮草の根の絶えた如く、おのが向き向きに流れ漾はしむるのか。されば、忽然として、此に相遇ひしとはいへ、やがて、又各〻天の一隅に懸絶することとなる。諸君、願はくは、各〻その德を磨いて、あるが上にも、美名を一層高くし、そして、心の儘に、障礙なき通衢を大手をふつて濶歩する樣にありたいものである。來年の今夜、重ねて月を見たならば、定めて、お互に相思うて、長嘆を禁せぬことであらう。

【餘論】起十二句は、修史事業方に畢りて、一夕の娛を爲すべきを言ひ、況逢端正月の十二句は、加ふるに、明月の夜に遇ひ、杯酒興を恣にして、夜半を過ぎしことを敍し、明晨卽分袂は、純ら別離を言ひ、その中、勸奬の意を含んで居るところは、まさしく、この作の徒爾ならざる所以である。通篇、洗鍊を經て、語語精警、五古中に於て、有數の佳作と稱すべきものである。

寄題鄞縣青山寺鍾秀樓

鄞縣青山寺の鍾秀樓に寄題す

東湖秀可攬。造化夙所聚。東湖、秀、攬るべし、造化、夙に聚むるところ。
聞有釋子居。雲中構層宇。聞く釋子の居ありて、雲中に層宇を構ふと。
刹出辨遠岑。帆廻識修渚。刹は出でて遠岑を辨じ、帆は廻つて修渚を識る。
島外月上海。虹邊樹含雨。島外、月、海に上り、虹邊、樹、雨を含む。
願言此登眺。去作逃禪侶。願はくは、ここに登眺し、去つて逃禪の侶とならむ。
西崦暮鐘時。憑闌共僧語。西崦、暮鐘の時、闌に憑つて僧と共に語らむ。

【字解】【一】東湖　一統志に「東湖は、府城の東に在り、七十二淡の流を受け、民、旱に苦まず。蓄名萬金湖。宋の史丞相、築ゐ湖上に下ぜしより、綱字林木、杭の西湖の盛に埒しといふ」とある。【二】秀可攬　秀色を掬し取る。【三】釋子　僧徒。【四】層宇　層々なせる殿宇。【五】刹出　刹は寺、草塵物の詩に佛刹出二高枝一とある。【六】修渚　長く續ける洲渚。【七】言此　二字ここにと訓して、重言せぬ方が善い。【八】逃禪侶　坐禪を半分仕かけて逃げ出すもの、杜甫の飲中八仙歌に蘇晉長齋繡佛前、醉中往往愛逃禪とある。

【題義】鄞縣は、寧波府に屬して居る。この詩は、卽ち縣中の青山寺鍾秀樓に寄題したのである。

【詩意】東湖の秀でたる景色は、攬取すべく、ここは、造化が夙に其工を聚めた處である。聞けば、山上には寺があつて、雲中に幾層の殿宇を構へて居るとのことである。ふりさけ見れば、巨刹出でたる

に因つて、遠い山山を辨別し、帆の廻り行くにつけて、長い洲渚を認知する。島の外なる月は、海より差し上り、虹の根ともいふべき樹は、なほ殘雨を含んで居る。願はくは、ここに登臨眺望して、逃禪の人となり、西の山邊に入相の鐘の響く時、闌干に倚つて、僧と共に話をして居たいと思ふ。

【餘論】この詩は、もとより、未だ其地に行かず、唯だ景色を想像して作つたのである。起四句は總提、次の四句は敍景、結四句は感懷を敍し、自分も其處に往つて見たいといふ意を述べたのである。

曉出趨朝

正冠出門早。杳杳鐘初歇。
嘶騎踏嚴霜。驚鴉起殘月。
逶迤度九陌。窈窕瞻雙闕。
長卿本疏慢。深愧陪朝謁。

【字解】【一】杳杳　かすかに遠き貌。【二】嚴霜　澤山降つた霜。【三】逶迤　めぐりめぐる。【四】九陌　九は大數、陌は都大路。【五】窈窕　深邃の貌。【六】雙闕　宮城の正門、左右に高い樓があるより云ふ。【七】長卿　司馬相如、字は長卿、世說に「王子猷・王子敬、ともに高士傳及び贊を賞し、子敬は井丹高潔を賞す。子猷云ふ、未だ長卿慢世に著かず」とある。井丹高潔・長卿慢世は、書中の標目である。【八】疏慢　資性疎懶にして世を侮る。

【題義】早晨に入朝したことを詠じたので、洪武二三年の間の事であらう。

【詩意】冠を正し、禮裝いかめしく、早晨に我が家の門を出ると、杳杳として夜明けの鐘の音が初めて歇んだ。おのが乘つて居る馬は、勢よく嘶いて、厚き霜を物ともせず、鴉は驚いて、殘月の中に飛び起つた。めぐりめぐつて都大路を過ぎ、宮城の正門の深邃なるを見上げた。この身、古しへの司馬相如の樣に、疏懶で世を侮りながら、朝謁の班に陪して、おそれ多くも楓宸の近くに參入するは、まことに有り難く且つ辱ないことである。

【餘論】前六句は、趨朝の光景、後二句は感慨、又しても例の筆法である。

送顧式歸吳

顧君野王孫。與我生共縣。
故鄉未曾識。却在他鄉見。
留連忽東還。長揖袖詩卷。
自言吳中好。稻熟湖蟹賤。

顧式の吳に歸るを送る

顧君は野王の孫、我と生まれて縣を共にす。
故鄉、未だ曾て識らず、却つて、他鄉に在つて見る。
留連して、忽ち東に還らむとし、長揖して、詩卷を袖にす。
自ら言ふ、吳中好し、稻は熟して湖蟹賤し。

欲臥煙雨舟。醉讀三高傳。　煙雨の舟に臥し、醉うて三高の傳を讀まむと欲すと。
余方謬通籍。講帷近清殿。　余、方に謬つて籍を通じ、講帷、清殿に近し。
故園豈不懷。君恩正深戀。　故園、豈に懷はざらむや、君恩、正に深く戀ふ。
遠欲謝鄉人。殷勤附君便。　遠く鄉人に謝せむと欲し、殷勤、君の便に附す。

【字解】〔一〕野王　松江志名臣傳に「野王、字は希馮、吳郡の人、陳に仕へて、黃門侍郎光祿卿知五禮事に遷り、致して、總書監右衛將軍を贈らる」とある。〔二〕共縣　縣を同じうする。〔三〕三高傳　姑蘇志に「三高の祠は、吳江雪灘の上に在り、越の范蠡、晉の張翰、唐の陸龜蒙を祀る」とある。〔四〕通籍　籍は宮門に掛けて置く名札、その名札を通して入れるといふので、つまり在官といふこと。〔五〕清殿　立派な御殿。〔六〕殷勤　懇に頼む。

【題義】　說明に及ばぬ。但し、顧式の名字閲歷等は不詳。

【詩意】　君は、古しへの顧野王の末孫で、予と同鄉の生まれ、故鄉に居た時分は、少しも顏を知らなかつたが、却つて他鄉に於て遇つた。君は、都に留まること、すでに久しく、一朝東に還らうといふので、われに向つて長揖し、袖中には詩卷を入れて居られる。君が云ふのには、吳中は何事につけても好い處で、米の熟する頃、湖中に產する蟹は價が廉い。これから歸れば、煙雨霏微の中、舟中に橫臥し、醉うては、その地に緣故ある古しへの三高の傳でも讀まうと思ふとのことである。予の如きは、誤つて在官し、諸王子の侍讀をなし、講釋をする帷は、立派な御殿の近くに設けられてある。故鄉は、戀しいに相違ないが、君恩の厚きを深く心に念じて、一寸歸ることも出來ぬ。そこで、故鄉の人に挨拶せむとし、懇に君の歸國の便につけて、言傳を御賴み申す次第である。

【餘論】　起四句は、顧式との交誼、次の六句は其人の東歸、結六句は自己の境涯を言ひ、未だ容易に歸國することが出來ないといふ意を逗露して反覆せしめたのである。

御溝觀鷺　　御溝、鷺を觀る

白雪泛金塘。羣翻動曙光。　白雪、金塘に泛び、羣翻して曙光を動かす。
危棲翹獨趾。亂唼引修吭。　危棲して獨趾を翹げ、亂唼して修吭を引く。
池中鵠可竝。廷內鷺難行。　池中、鵠、竝ぶべく、廷內、鷺、行き難し。
自憐觀詠者。江湖興未忘。　自ら憐む觀詠の者、江湖、興、未だ忘れず。

【字解】〔一〕白雪　鷺の白きを形容して云ふ。〔二〕金塘　塘は隄、金は其堅固なるを云ふ。〔三〕危棲　落ち付かぬこと。〔四〕翹趾　片足、鮑照の野鷺賦に「斂三雙翮于水裔、翹三孤趾于林陰」とある。〔五〕亂唼　矢鱠に物を喝る。〔六〕引修吭　長い喉を引いて鳴く、禽經に「鳴けば吭を引く」とある。〔七〕鵠可竝　漢書昭帝紀に「黃鵠、建章宮太乙池中に下り、公卿、書を上る」とある。〔八〕鷺難行　詩經振鷺の疏に「鷺は、小、大を陵えず、飛ぶこと次序あり、百官縉紳の象」とある。

【題義】　御溝は宮城を廻る濠、江寧府志に「御道の兩旁に在り」と記してある。この詩は、御溝の中

に游泳して居る鵞鳥を見て作つたのである。

【詩意】白雪が堅固な隄の近くに泛んで居ると見たのは、御濠の中の鵞であつた。その鵞は、羣がり飛んで、曙光を動かして居る。しかし、落ち付かぬ樣をして、片足を擧げ、又散散に啖つた揚句には、長い喉を引いて、聲高に鳴き出す。池中に在つては、むかし祥瑞を以て目されし黃鵠と竝ぶべく、廷内に入つたならば、鷺は體の小さい處から、相讓つて、なかなか歩まぬであらう。但し、之を眺めて詩を詠ずる予の如きものは、江湖の興を忘れ兼ねて、思を都城外に馳する次第である。

【餘論】起二句は題意の正面。次の四句は形容刻劃、頗る至れるものから、細碎煩縟に失した憾がある。結二句は感懷で、卽ち臺省に在るも草野を忘れぬ意である。

夢姉

姉を夢む

我家白頭姉。遠在妻水曲。
わが家の白頭の姉、遠く妻水の曲に在り。
昨夜夢見之。千里地誰縮。
昨夜、夢に之を見る、千里、地、誰か縮むる。
不知別已久。尙作別時哭。
知らず、別るること已に久しく、尙ほ別時の哭を作すを。
覺來旅齋空。風雪灑窓竹。
覺め來つて、旅齋空しく、風雪、窓竹に灑ぐ。
田家有弟妹。終歲喜相逐。
田家に弟妹あり、終歲、相逐ふを喜ぶ。
我非王事縻。胡忍離骨肉。
われ、王事の縻するに非ずんば、胡ぞ、骨肉を離るるに忍びむや。
城東先人廬。尙有書可讀。
城東、先人の廬、なほ書の讀むべきあり。
何當乞身還。親爲姉煮粥。
何ぞ當に身を乞うて還り、親ら姉の爲に粥を煮るべき。

【字解】【一】地誰縮　神仙傳に「費長房、神術あり、能く地脈を縮む」とある。【二】妻水　寓居の書齋。【三】相逐　逐は徵逐。【四】王事縻　縻はつなぐ。【五】先人　亡父。【六】乞身　身の暇を願ひ出る。【七】爲姉煮粥　唐書李勣傳に「勣、字は懋功、本姓は徐氏。性、友愛。姉、病む。かつて、自ら爲に粥を爲つて其藥を煎く。姉、戒止す。答へて曰く、姉、疾多く、しかも、勣、且に老いむとす。數ば粥を進めむと欲すと雖も、尙ほ幾何ぞや」とある。

【圖義】説明に及ばぬ。

【詩意】わが家の白髮の姉は、遠く妻江の邊に居るが、ゆくりなくも、昨夜夢の中で遇つた。おもへば、千里の地を誰が縮めて、われを引合せて呉れたのか。その夢の中では、別れて、すでに久しきを知らず、矢張、別れた時と同じく泣いて相哭した。やがて、驚き覺むれば南柯の一夢、寓居の書齋には、外に人もなく、唯だ風雪が窓前の竹に降り灑ぐのみであつた。田舍には弟や妹が居るので、姉は年中互に遇へることを喜んで居た位、自分とても、王事の故を以て、この身を繫がれたるに非ざれば、いかで、忍んで骨肉に別れやう。蘇州城東には、亡父の住んで居た舊廬があつて、そこには、讀

むべき書物が可なり貯へてある。どうか、この身の暇を願ひ出でて、故郷に還り、そして、姉の爲に、親ら粥を煮て、友愛の情を全うしたいものである。

【餘論】前八句は題意の正面、後八句は夢後の感懷。通篇、眞情摯思、覺えず、讀者をして涙を落さしめる。

答定水寺芑公

定水寺の芑公に答ふ

日晏初出院。閒齋一蕭然。
忽枉名僧書。始知在清泉。
憶昔雲巖居。共締林中緣。
夏陰繞澗吟。秋霽開閣眠。
暌合苦難常。別來歲頻遷。
趣同貴道在。跡異慙名牽。
明月出東海。想照空山禪。

日晏くして初めて院を出で、閒齋、一に蕭然。
忽ち名僧の書を枉げて、はじめて清泉に在るを知る。
憶ふ昔、雲巖に居り、共に林中の緣を締す。
夏陰、澗を繞つて吟じ、秋霽、閣を開いて眠る。
暌合、常なり難きに苦む、別來、歲頻りに遷る。
趣は同じくして道の在るを貴び、跡は異にして名の牽くを慙づ。
明月、東海に出で、想ふ空山の禪を照らすを。

無因荷衣襆。往禮高峰前。

衣襆を荷ひ、往いて高峰の前に禮するに因なし。

【字解】【一】日晏　日が暮れかかる。【二】出院　院は役所。【三】閒齋　靜かなる書齋。【四】枉名僧書　名僧が手紙を寄越した。【五】清泉　地名か、寺の名かであらう。【六】雲巖　地名。【七】夏陰　夏の日の蔭り。【八】暌合　暌は別れる、離れる、離合、乘散に同じ。【九】跡異　自分の在官と名僧の隱遯と、その跡の全く相異なるを云ふ。【一〇】無因　因は因緣。【一一】衣襆　襆は包に同じ、卽ち頭巾。

【題義】復見心傳に「定水寺は、鄞縣の雙林に在り」と見ゆ。この詩は、定水寺の住僧芑公より手紙を寄越したから、それに答へる爲に作つたのであるが、芑公の本名等は、不詳である。

【詩意】日が暮れかかつた頃、やつと退廳し、わが書齋に歸ると、まことに、物靜かで寂しい位。折から、貴僧の手紙が屆いて、目下、清泉に留錫されて居ることが分かつた。おもへば昔、雲巖に居られた頃、林中に宿緣を締し、はじめて知り合となり、夏の蔭れる日には、澗を繞つて吟行し、秋の雨の霽れた時には、高閣を開いて眠つたことがある。その後、離合常なり難く、一別以來、打續いて、年が遷つた。趣は同じくして至道の身に在るを貴しとし、跡は異にして、わが名の爲に牽かれるを愧ぢて居る。折から、明月は東海に差し上つたが、定めて、空山人なき處に於て坐禪を組んで居る貴僧を照らして居ることであらう。唯だ憾むべきは、千里遠く相隔り、著物や頭巾を荷ひ、はるばる出かけて高峰の前に至り、月下、我が名僧に向つて禮拜することの出來ぬことである。

【餘論】この詩は、例の通り、四句一解になつて居て、起四句は芒公の書を得たること、次の四句は往日の交誼、次の四句は別後蹤跡各〻異なること、結四句は、折から差し上つた月を見て、相思の意を寄せたのである。

酬謝翰林留別

啓與同郡謝君徽同徵。又同官翰林。洪武三年七月廿八日。上御闕樓召對。擢啓戶部侍郎。謝吏部郎中。俱以踰冒辭。卽蒙俞允。賜內帑白金放還于鄉。

謝翰林に酬ゆ、留別

【訓讀】啓、同郡の謝君徽と同じく徵され、又同じく翰林に官す。洪武三年七月廿八日、上、闕樓に御して召對し、啓を戶部侍郎に、謝を吏部郎中に擢んづ。俱に踰冒を以て辭す。卽ち俞允を蒙り、內帑の白金を賜うて鄉に放ち還らしむ。

江左稱謝家。奕葉多名人。
君今復秀發。瓊枝邁風塵。

江左、謝家を稱す、奕葉、名人多し。
君、今、復た秀發、瓊枝、風塵に邁ゆ。

顧余忝鄉里。才華敢論美。
丹詔偶見徵。雲蘿欻同起。
謁帝入九關。咫尺瞻天顏。
從茲謬通籍。接武諸公間。
朝侍青坊讀。夜陪玉堂宿。
講罷分御羹。吟成刻官燭。
出入在兩宮。與君無不同。
自慙本鳴鶴。亦得隨鵷鴻。
朝朝禁門下。聽雞共騎馬。
上國多故人。情親似君寡。
竝命超列卿。寵極翻憂驚。
我叨掌國計。君佐持銓衡。
偕辭向明主。叩天聽天語。

顧みるに、余、鄉里を忝うす、才華、敢て美を論せむや。
丹詔、偶ま徵さる、雲蘿、欻ち同じく起つ。
帝に謁して九關に入り、咫尺、天顏を瞻る。
これより、謬つて籍を通じ、武を諸公の間に接す。
朝に青坊の讀に侍し、夜は玉堂の宿に陪す。
講罷んで御羹を分ち、吟成つて官燭を刻す。
出入、兩宮に在り、君と同じからざるなし。
自ら慙づ本と鳴鶴、亦た鵷鴻に隨ふを得たるを。
朝朝禁門の下、雞を聽いて共に馬に騎す。
上國に故人多きも、情親む、君に似たるは寡し。
竝に命せられて列卿に超え、寵極まつて、翻つて憂驚。
われは叨に國計を掌り、君は佐として銓衡を持す。
偕に辭して明主に向ひ、天を叩いて天語を聽く。

敕賚内帑金。東還特相許。
拜賜出皇都。人言似兩疏。
月明照宮錦。同耀入中吳。
吳中故鄉道。雨歇秋光好。
青山度水迎。喜我歸來早。
落日下長洲。分攜忽解舟。
如何到家喜。却有別君愁。
別君去還邇。只隔吳江水。
離思與秋長。蘆花三十里。
來往片帆通。相期作釣翁。
高歌雖鄙野。猶可贊王風。

敕して、内帑の金を賚り、東還、特に相許す。
賜を拜して皇都を出づ、人は言ふ、兩疏に似たりと。
月明、宮錦を照らし、櫂を同じうして中吳に入る。
吳中故郷の道、雨歇んで秋光好し。
青山、水を度つて迎へ、わが歸來の早きを喜ぶ。
落日、長洲を下り、分攜、忽ち舟を解く。
如何か家に到るの喜、却つて君に別るるの愁あらむとは。
君に別れて去るも還た邇く、只だ吳江の水を隔つるのみ。
離思、秋と長く、蘆花三十里。
來往、片帆通ず、相期して釣翁と作らむ。
高歌、鄙野と雖も、猶ほ王風を贊すべし。

【字解】【一】江左　下流から向つて揚子江の左岸、即ち江南地方。六朝の間、ここに都せしを以て、六朝の義にも用ひる。六朝とは、吳・東晉・宋・齊・梁・陳の六代を合稱す。【二】謝家　謝安・謝石等、名流輩出せし故に、王家と並び稱せられ、王謝といつた。東坡の詩に江左風流王謝家とある。【三】奕葉　累世。【四】名人　著名な人物、何も技藝に秀でたものばかりではない。【五】秀發　俊秀英發。【六】瓊枝　玉の枝。【七】遇風塵　世の俗塵中に拔き出る。【八】黍郷里　郷里を辱かしめる。【九】丹詔　天子の詔敕、清えずに何時までも殘す爲に、丹で書くが故に云ふ。【一〇】雲蘿　儒光義の詩に卜築青巖裏、雲蘿四面陰とある、雲を帶びたる蔦、山中の隱宅を云ふ。【一一】九關　九門に同じ、天子の居は九重の門の奥に在る故に云ふ。【一二】通籍　前に數ば見ゆ、出仕の義。【一三】接武　武は歩、禮記の典禮に「堂上、武を接す」とある。太子に侍讀すること。唐書百官志に「東宮官は春坊庶子中允、侍從贊相駁正啓奏を掌る」とある。といふ、太子の宮なり」とある。【一四】侍青坊讀　青坊は青宮、初學記に「青宮、一に春宮青邸の年譜には「洪武三年正月、開平王の二子、東宮に侍學す、命を奉じて之に經を授く」とあつて、直接に太子の侍讀となつたのではなく、東宮に至りて諸王に教授したのである。【一五】陪玉堂宿　玉堂は翰林院、その院中に當直すること。青邸は、洪武三年二月、翰林院編修を授けられた。【一六】分御羹　李陽氷の李白集の序に「天寶中、皇祖、詔を下し、徵して金馬に就かしむ。聲を降つて步迎し、綺皓を見るが如し、七寶牀を以て食を賜ひ、御手、羹を調へ、以て之に飯ぜしむ」とある。【一七】刻官燭　前に卷五、答三衍師見贈の詩中、叩鉢の條に見えて居た。南史王曾孫傳に「竟陵王子良、かつて、夜、學士を集め、燭を刻して詩を爲り、四韻の者は一寸を刻し、此を以て準と爲す」とある。【一八】兩宮　天子の宮と東宮。【一九】鵠雲　江湖閒散の身を云ふ。【二〇】鵠鴻　朝臣の行列、高適の詩に誰憐持羽翼、猶欲伴鵠鴻とある。【二一】禁門　宮禁の門、唐書劉知幾傳に「近代史局、皆禁門に藉す」とある。【二二】上國　皇都附近を云ふ。【二三】超列卿　卿は内閣員。【二四】叨　みだりに。【二五】掌國計　國家の會計を掌る、即ち戶部侍郎を云ふ、實錄に「宋朝戶部の職、はじめ、三司に歸す。元豐創行、戶部、はじめて邦計を總べ、左右曹を置く」とある。【二六】佐　次官、即ち吏部郎中となりしことを云ふ。【二七】持銓衡　官吏任免の權を持つて居る。唐書百官志に「吏部は、文選勳封考課の政を掌り、三銓の法を以て天下の材を官す」とあり、晉中興書に「吳隱之、少にして孝行あり、太常韓康伯と鄰居す。康伯の母、康伯に語つて曰く、汝、後に若し銓衡の職に居らば、當に此人を用ふべし、と。康伯が吏部尚書となるに及び、因つて之を進用す」とある。【二八】叩天　天門を叩く、殿陛の前に稽首することを云ふ。【二九】兩疏　疏廣疏受、漢書に「疏廣、太傅たり、兄の

子受、少傅たり。朝廷、以て榮となす。廣、受に謂つて曰く、吾聞く、足るを知れば辱かしめられず、止まるを知れば殆からずと。即日、ともに疾と稱し、上書して骸骨を乞ふ、上、皆これを許す」とある。【三〇】宮錦　前に卷六、送二袁憲史一の詩中、采石月下過の條に見えて居た。唐書李白傳に「かつて、舟に乘じ、祖宗之と采石より金陵に至る。宮錦袍を著け、舟中に坐して、旁に人なきが若し」とある。【三一】同櫂　櫂は棹、同舟に同じ。【三二】長洲　苑名。前に數ば見ゆ。【三三】分揮　別れる。【三四】解舟　舟の纜を解いて、又ぞろ漕ぎ出す。【三五】吳江水　吳江は即ち吳淞江、揚子江の流の末の一派。【三六】王風　詩經の國風に王風といふのがあつて、周の詩である。つまり、鑒下の風謠といふ義。

【題義】前に總說竝に年譜中に見えた通り、青邱の史局に於ける同僚に謝徽といふ人があつて、それとの離合は、この詩の序中にも見えて居る。序の意味は――予、高啓は、同郡謝徽と一緒に召し出され、史局閉鎖の後は、同じく、翰林院編修に在官して居た。然る處、洪武三年七月二十八日、天子は、門樓に出御に成つて、拜謁を仰せ付けられ、予を戶部侍郎に、謝徽を吏部郎中に拔擢するとの恩命があつたが、兩人ともに、踰越冒進の廉を以て、謹んで御斷りを申し上げると、即時に敕許ありし上、御手元の銀を賜はつて、鄕里に放ち歸らしめられた――といふのである。そこで、二人は、舟を同じうして、東に歸り、やがて、吳中に入ると、謝徽は早く上陸し、青邱は、蘇州まで行かねばならぬ故に、愈よ別れることになり、謝徽が最初に詩を作つて見せたから、青邱は之に酬いて、又この詩を作り、仍つて、留別の意を表したのである。

【詩意】六朝以來、謝氏といへば、特別に著名な家柄であつて、代代、名士を輩出せしめたが、君も亦た俊秀英發、たとへば玉の枝が浮世の塵にも染まずして、拔け出でた樣である。顧みれば、予は、鄕里の面よごしで、才華も決して美と稱すべきものではないが、料らずも、天子の詔を賜はり、忽然として、君と一緒に雲蘿の隱宅より召し出され、やがて、天子に謁せむが爲に、九門に入り、咫尺、天顏を拜することが出來た。かくて、謬つて籍を通じて、愈よ仕官の身となつて、諸公の間に立ち交り、史局閉鎖の後、朝には東宮に入つて諸王子に侍讀し、夜には、翰林に入つて宿直し、講釋が濟むと、天子より、手づから羹を分ち賜はり、院中に於て詩會を催す時など、官燭の一寸燃える間とか云ふ樣に、時間を刻して吟を成した。かくの如く、兩宮に出入して、君と大抵一緒であつたが、本と鵷鷺に均しき江湖の野人でありながら、鵷鴻の行列に隨つて朝臣に伍することは、有り難くも、又恥かしい次第。朝な朝な、禁門の下に於ては、夜あけの雞を聞きし後、騎を聯ねて、君と共に出仕した。皇都附近には、知り合も多いが、情誼相親むことは君が第一で、これに似たものは、極めて少い。頃ろは、竝に拜命せられて、列卿に超える樣な不次の拔擢を蒙つたので、あまりの辱さに、翻つて憂へ且つ驚くばかり。そは何故かといへば、われは戶部侍郎となつて、叨りに國家の會計を引き受け、君は吏部郎中となつて、人材銓衡の權を持たせられたが、とても務まらぬ、萬一過失があつては、上、明主の御眼鏡を曇らかし、下、一身上の難儀にもなる處から、ともに、天子に向つて御斷りを申し上げ、丹陛の下に稽首して、御言葉を待つて居ると、敕して、御手許金を賜はり、そして、東に還るこ

とを、特別に御許可に成つた。そこで、折角の賜を頂戴して、愈よ南京を出發すると、世人は、その勇退を稱して、古しへの疏廣・疏受に似て居るとさへいつた。やがて、明月に宮錦袍を照らされつつ、舟を同じうして、吳中に入つた。吳中なる故郷への道すがら、折しも、雨は止んで、秋光殊に宜しく、青山は水を度つて相迎へ、さながら、吾が歸來の早きを喜ぶ樣に見えた。夕日が長洲苑に落ちかかる頃、ここに、君と手を分つて、更に舟を解いて進むことになつたので、わが到著する喜は、さることながら、却つて、君に別るる愁を添へたのは、如何したものか。しかし、君と別れた處で、これから先は、極めて近く、唯だ吳淞江を隔つるのみ、江岸の蘆花三十里、別れの思は秋と共に長けれども、往來するには、帆船の便があつて、いづれ、二人とも釣翁と成つて仕舞はうと思つて居る。わが聲高に朗唱する此歌は、文字が鄙野であるけれども、中興の氣運に乘じたる輦下の風謠を贊助して、その先聲となることが出來るであらう。

【餘論】この首は、謝徽との交誼を敍するといふものの、實は作者自身の閲歴に係り、その出處に大關係がある。起首より情親似レ君寡に至るまでは、二人が翰林院編修として南京に在官せしことを敍し、竝命超二列卿一より同レ櫂入二中吳一に至るまでは、二人ともに恩命を辭し、やがて、放たれて歸ることを述べ、吳中故郷道より結末に至るまでは、歸途の終に謝徽に別るることを寫し、兼ねて、留別の意を表したのである。

過白鶴溪

昨發白鷺洲。今過白鶴溪。
溪流幾回轉。只在晉陵西。
月出女猶浣。雲深猿自啼。
茅峰雖咫尺。無計躡丹梯。

白鶴溪を過ぐ

昨は白鷺洲を發し、今は白鶴溪を過ぐ。
溪流、幾回か轉ずるも、只だ晉陵の西に在り。
月は出でて、女、猶ほ浣ひ、雲は深くして、猿、自ら啼く。
茅峰、咫尺と雖も、計の丹梯を躡むなし。

【字解】【一】白鷺洲　江寧府志に「府治の西南に在り、即ち太白の謂はゆる二水中分なるもの、是れなり」とある。【二】晉陵　一統志に「常州府、東晉には晉陵といふ」とある。【三】女猶浣　女は夜に成つても洗濯をして居る。【四】茅峰　前に卷五、送二蕭隱君一の題下に見えて居た。一統志に「句容縣東南の山、形、句の字の如し。はじめ、句曲山と名づく。後、茅君、道を此に得たるに因つて、今、茅山と名づく。道書、第八洞天、第一福地たり。山に三峰あり、三茅君、各〻一峰を占む、これを三茅峰と謂ふ」とある。【五】躡丹梯　銅製の梯子を登つて行く、謝朓の敬亭山の詩に要欲レ追二奇趣一、即此凌二丹梯一とある。

【題義】一統志に「白鶴溪は、常州府城の西に在り、南北は運河に通じ、南は滆湖に入る」とある。この詩は、自ら其地を過ぎて作つたので、大方、南京から歸鄕する途中であらう。

【詩意】昨日は、南京近くの白鷺洲から出發し、扁舟江を下つて、今は白鶴溪にさしかかつた。この溪流は、幾度も轉じて、うねつて居るが、終始、常州城の西に限られて居る。晚に月がさし上つても、女は其岸に在つて、洗濯を止めず、溪上の山には、雲深く立ちこめて、猿の啼くのが聞こえる。

名だたる三茅峰は、咫尺の處に在るが、この行、上陸せし後、丹梯を躡んで、その絶頂を極める餘暇なきを遺憾とする。

【餘論】起二句は白鶴溪に指しかかりしこと、次の四句は溪の實景、結二句は聊か一歩を拓開したので、卽ち例の筆法である。

至吳松江

江淨涵素空。高帆漾天風。
澄波三百里。歸興與無窮。
心期弄雲月。迢遞辭金闕。
晚色海霞銷。秋芳渚蓮歇。
久別釣魚磯。今朝始拂衣。
忘機舊鷗鳥。相見莫驚飛。

【字解】【一】素空　晴れたる空。【二】雲月　雲間の月。【三】迢遞　遙遙の貌。【四】金闕　宮城をいふ。【五】渚蓮　江渚に生えて居る蓮、趙嘏の詩に紅衣落盡渚蓮愁とある。【六】釣魚磯　磯は斷崖。【七】拂衣　衣を振つて旅塵を拂ひ落す。【八】忘機舊鷗鳥　列子に「海上の人、鷗を好むもの、毎旦、海上に之さ、鷗鳥に從つて游ぶと。取り來れ、吾、これを玩ばむ、と。明日、海上に之く、鷗鳥舞うて下らず」とあつて、注に「鷗、これを知機鳥といふ」とある。

【題義】說明に及ばぬ。これも、同じく歸鄉中の作である。

【詩意】大江、水淨くして、晴れたる空を涵し、高く張つた帆は、天風に漾うて、しづしづと流を下る。一望澄波三百里、わが歸興の窮まりなきは、さながら、江水の如くである。われは、世上の風塵を避けて、雲間の月を弄ばむと心に念じ、乃ち宮城を辭して、はるばる故鄉に歸るのである。眺めやれば、暮色遠く立ちこめて、海上の夕やけも、次第に色褪せ、秋芳を矜り顏なりし江渚の蓮の花も、みんな散つて仕舞つた。久しく斷崖の上なる釣魚の場所に別れて居たが、今朝、衣を振うて風塵を拂ひ落し、又ぞろ、せつせと遣つて來る積りである。世の塵機と相關せざる昔馴染の鷗よ、相見るも、驚き飛ばず、相變らず、吾に親んで與れろ。

【餘論】起四句は下江の逸興、次の四句は江上の風景、結四句は、再び釣魚の人とならむことを謂うて、舊鷗鳥に囑付したのである。

始歸園田二首

辭秩還故里。永言遂遐心。
豈欲事高騫。居崇自難任。
清晨問田廬。荒蹊尚能尋。
秋蟲語左右。翳翳桑麻深。
別來幾何時。舊竹已成林。
父老喜我歸。攜榼來共斟。
聞知天子聖。歡然散顏襟。
相期畢租稅。歲暮同謳吟。

始めて園田に還る　二首

秩を辭して故里に還り、永言、遐心を遂ぐ。
豈に高騫を事とするを欲せむや、崇きに居て自ら任へ難し。
清晨、田廬を問へば、荒蹊、尚ほ能く尋ぬ。
秋蟲、左右に語り、翳翳として桑麻深し。
別來幾ばく時ぞ、舊竹、すでに林と成る。
父老、わが歸るを喜び、榼を攜へて、來つて共に斟む。
天子の聖を聞知して、歡然として顏襟を散ず。
相期す、租稅を畢り、歲暮、同じく謳吟するを。

【字解】【一】辭秩　俸祿を辭退する、卽ち官を退めること。【二】永言　書經に「詩は志を言ひ、歌は言を永うす」とあるから、歌ふこと。浩歌・放歌に同じ。【三】遐心　遠く塵外に脫出せむと思ふ心。【四】高騫　高く飛び上る、立身すること。【五】居崇　崇は高位。【六】難任　堪へ難し、やり切れない。【七】荒蹊　蹊は小路。【八】翳翳　掩ひかぶさる貌。【九】攜榼　榼は酒器、卽ち樽。【一〇】散顏襟　胸を淸淸しくして笑ふ。【一一】畢租稅　上納を畢る。

【語義】說明に及ばぬ、無論、前數首の後を承け、はじめて家に歸著した時の作である。

【詩意】俸祿を辭退して歸鄕し、出世間的願望を遂げたことを高歌した。もとより、立身を事とする樣な考は無く、高位に居た處で、とても、務まるまいと思ふ。すでに歸り來りし後、晴れたる朝、わが舊日の田廬は如何したかといへば、小路は荒れて居るが、尙ほ尋ね知るべく、折から、秋の蟲は左右にすだき、桑麻は深く茂つて、掩ひかぶさるばかり。この地に別れてから、幾年になるか知らぬが、むかしの竹は、茂りに茂つて、林を成す位。村の年寄連は、わが歸鄕を喜び、酒樽を昇いで來て、もろともに酌んで打興じ、今の天子の聖明なることを自分から聞いて、大に喜び、胸も淸淸しげに、ほほゑみ、さういふ事なら、これより太平となるは言ふにも及ばず、一同、租稅の上納を片づけて、歲の暮には、歌ひ放題に、一番、大騷ぎをしやうではないかといつた。

白露蕪草木。荒園掩窮秋。
歸來一芟理。始覺吾廬幽。
高柳蔭巷疏。淸川映門流。
落日望禾黍。離離滿西疇。
乍歸意自欣。策杖頻覽游。

白露、草木を蕪せしめ、荒園、窮秋に掩ふ。
歸り來つて一たび芟理すれば、はじめて吾が廬の幽なるを覺ゆ。
高柳、巷に蔭して疏、淸川、門に映じて流る。
落日に禾黍を望めば、離離として、西疇に滿つ。
乍ち歸つて、意、自ら欣ぶ、杖に策して、頻りに覽游。

名宦誠足貴。猥承惧愆尤。
早退非引年。皇恩未能酬。
相逢勿稱隱。不是東陵侯。

【字解】【一】蕪 荒蕪に歸せしめる。【二】芟理 雜草や灌木を刈り除いて整理する。【三】高柳 丈高き柳。【四】蔽巷 巷は裏町。【五】禾黍 稻粱の屬。【六】離離 繁盛の貌。【七】西陽 西の野ら。【八】策杖 杖に縋がる。【九】名宦 名譽ある官職。【一〇】猥承 疎疎考へもせずして御引受する。【一一】愆尤 過失と譴責。【一二】早退 早く退職する。【一三】引年 年の老いたるを言ひ立て官を退める。【一四】勿稱隱 隱は隱者。【一五】東陵侯 史記蕭相國世家に「召平といふものは、故の秦の東陵侯、秦破れて布衣となり、貧にして瓜を長安城東に種う、瓜、美なり、故に世俗、これを東陵瓜といふは、召平より以て名と爲すなり」とある。

【詩意】白露は、草木をして荒蕪ならしめ、手入れせぬ庭園は、秋の末、しめ切りに成つて居た。そこで、歸つて來たから、雜草などを刈つて整理すると、どうやら、吾が菴も清幽に成つた樣な氣がした。丈高い柳は、裏町に蔭して居るが、葉が落ちたから、その影も、疏であるし、一道の清川は、門に映じて流れて居る。日ぐれに遠望すると、稻は正に熟して、西の野らに滿つる位。さすがに、田舍は、のん氣で、心も伸伸する。ひよッくり歸つて來たが、これでは、まことに滿足で、杖に縋つて、朝夕游覽を事として居る。名譽ある官職は、まことに貴ぶに足るものから、うッかり御引受をして、過を仕出かし、御叱りを被るのも、宜しくないから、吾は斷じて爲さず、逸早く退官したのは、老年を言ひ立てて引いた譯でもなく、折角の皇恩、未だ酬いざるは、まことに殘念である。われは、固より昔日の東陵侯ではないから、諸君よ、相逢ふとも、決して、隱者といつて呉れるな。太平至治、野に遺賢なきの今日、隱者などいふものの有らう筈はない。

【餘論】二首、ともに、和平沖澹の趣を以て勝り、いささか陶淵明の風調も交つて居るが、前首には天子の聖を聞知すといひ、後首には是れ東陵侯ならずといひ、ともに、刻下中興の目出たき御世を謳歌するを忘れず、これが卽ち詩人忠厚の本旨であらう。每首、例の四句一意であるから、讀者自ら之を尋味すれば善からうと思ふ。

睡覺

爐熏靄宿潤。秋滿牀屏裏。
曙色透窓來。幽人眠未起。
風驚露樹怯。日出煙禽喜。
却憶候東華。朝衣寒似水。

睡覺む

爐熏じて、靄、宿して潤ひ、秋は滿つ牀屏の裏。
曙色、窓に透つて來る、幽人、眠、未だ起たず。
風は驚いて露樹怯、日は出でて煙禽喜ぶ。
却つて憶ふ、東華に候し、朝衣、寒、水に似たるを。

【字解】【一】 鬱宿澗　鬱の如き香の煙が散ぜずして共處に留まり、そして、潤つて居る。【二】 露樹怯　露を帶びた木が怯れ顫く樣に見える。【三】 煙禽　煙の中に囀る鳥。【四】 東華　皇居の門名。宋史地理志に「東京宮城は周圍五里、南の三門、中を乾元といひ、東を左掖といひ、西を右掖といひ、東西面の門を東華・西華といひ、北の一門を拱辰といふ」とあり、夢溪筆談に「今の學士、初めて拜して東華門より入り、左承天門に至つて馬を下る」とある。青邱の云云するのは、明初南京の宮城で、宋代の汴京とは、全く關係なく、唯だ借用したのであらう。

【語義】 說明に及ばぬ。

【詩意】 香爐は薰つて、細い煙は、靄の如く散ぜずして潤ひ、秋は、牀屏の裏にも滿ちて居る。やがて、曉色窓を透し、夜は明けかかつたが、幽人は、眠つた儘、まだ起き出でない。庭上を吹き過ぐる風は、驚くが如く、露を帶びたる木は、恐れて顫き、朝日が出ると、煙の中に囀る鳥は、喜ぶ樣に聞こえる。これにつけても、曩に南京に滯在中、早朝して禁門に伺候する時は、矢張、こんな景色で、朝衣に透る寒さは、さながら、水の如くであつたことを思ひ出す次第である。

【餘論】 前半四句は題意の正面、眠未レ起といつた中に、やがて睡が覺めたといふことが含まれて居る。風驚、日出の二句は、睡起後に見た庭上の光景。結二句は、曩日を追憶して言つたのである。

與王徵士訪李鍊師。遂同過師林。尋因公

王徵士と李鍊師を訪ひ、遂に同じく師林を過ぎて、因公を尋ぬ

玄館啓眞境。紺園闢清香。
茲晨兩地游。乍出囂煩鄉。
鳥鳴桂花落。澗戶秋風涼。
開士演金偈。羽人薦瑤觴。
亦有詞苑英。清芬吐華章。
愧我自徵起。束帶忝周行。
山林久在念。那期復來翔。
暌合固知妄。去來亦何常。
誰言道各異。妙契宜相忘。

玄館、眞境を啓き、紺園、清香を闢す。
この晨、兩地に游び、乍ち囂煩の鄉を出づ。
鳥は鳴いて桂花落ち、澗戶、秋風涼し。
開士、金偈を演じ、羽人、瑤觴を薦む。
亦た詞苑の英あり、清芬、華章を吐く。
愧づ、我、徵起されしより、束帶、周行を忝うす。
山林、久しく念に在り、那ぞ復た來翔するを期せむや。
暌合、もとより妄なるを知る、去來、亦た何ぞ常ならむ。
誰か言ふ、道各〻異なれりと、妙契、宜しく相忘るべし。

【字解】【一】 玄館　道觀に同じ、卽ち李鍊師の居る處。【二】 眞境　清眞の境地。【三】 紺園　寺城を云ふ、庾信の詩に由旬紫紺園とある。因公の居る處を指す。【四】 開士　悟を開いた人、善知識の義、因公を指す。李白の贈僧の詩に衡嶽有二開士一、三峰秀二眞骨一とある。【五】 金偈　金字で書く偈。偈は佛家の贊語で、その形式は、矢張、詩と同じである。【六】 羽人　屈原の遠游に仍二羽人于丹丘一兮、留二不死之舊鄉一とあつて、その注に「羽人は飛仙なり」とある。天上を自在に飛行する仙人。【七】 詞苑英　英は俊英、王徵士を指す。【八】 束帶　禮裝をつける。【九】 周行　周の朝廷の列位、ここでは唯だ朝班といふに同じ。【一〇】 暌合　前に見ゆ、

離合に同じ。【二】道各異　論語に「道同じからざれば相爲に謀らず」とある。【三】妙契　極めて深い交際。

【題義】この詩は、王徵士と共に、李鍊師といふ道士を訪ひ、それから、打連れ立つて獅子林に至り、因公といふ僧を尋ねて作つたのである。王徵士は、春日懷二十友一の詩にも見え、名は彝、青邱と同じく、元史の編修に與かり、一旦、金を賜うて放ち歸されし後、又薦められて、翰林に入つたが、母の老を以て、歸るを乞ひ、最後に魏觀の事に坐して、青邱と共に刑に處せられた人で、別號を蛟雛子といひ、青邱は、數ば詩を贈つたことがある。獅子林は、前に卷四、卷六に見えて居た。因公は、前に爲二因師一題二松梢飛瀑圖一とあつた。その因師と同人に相違ない。

【詩意】道觀は、清眞の境地を開き、寺城は、清香に閉ち、ともに塵外の妙境であるが、この朝、偶然にも兩地に游んで、騷がしき此浮世を脱出する樣な氣がした。兩地とも、頃しも秋、鳥は啼いて桂花落ち、谷に臨める戸ぼそには、西風が冷いやりと吹き入る。名僧は、金字で書いた偈に就いて演說し、道士は、頻りに玉杯を薦める。その外、詞苑の英傑たる王徵士が居て、その作に係る名文章は、さながら、清芬を吐く樣である。わが一たび徵し出されてからは、束帶を著けて、辱くも、朝班に列して居たが、まことに、お羞かしい話。そこで、山林の事は、絶えず、心に念つて居たが、圖らざりき、復た此に來て、優游せむとは。人生の離合は、もとより虛妄であるし、去來も、常とすべきものではない。儒釋老、三者道各一異なりといふものから、そんな差別には頓著なく、神妙なる交契を爲して、互に塵の此身を忘るる樣に致したいものである。

【餘論】起八句は李鍊師と因公とを合敍し、亦有二詞苑英一の二句は王徵士、愧我自二徵起一の四句は作者自身、睽合固知妄の四句は、一切を收束し、結二句が、卽ち全幅の精神の在るところである。

樂天に效ふ

誰言我久賤。明時已叨祿。
誰言我苦貧。空倉尙餘粟。
辭闕是引退。還鄉豈遷逐。
舊宅一架書。荒園數叢菊。
俗緣任妻子。家事煩僮僕。
性懶宜早閒。何須暮年促。
猶著朝士冠。新裁野人服。
杯深午醉重。被暖朝眠熟。

誰か言ふ、我久しく賤しと、明時、すでに祿を叨りにす。
誰か言ふ、我、貧に苦むと、空倉、尙ほ粟を餘す。
闕を辭す、是れ引退、鄉に還る、豈に遷逐ならむや。
舊宅一架の書、荒園數叢の菊。
俗緣、妻子に任かせ、家事、僮僕を煩はす。
性懶にして、宜しく早く閒なるべし、何ぞ暮年の促すを須ひむ。
猶ほ朝士の冠を著け、新に野人の服を裁す。
杯、深くして午醉重く、被、暖にして朝眠熟す。

旁人笑寂寞。寂寞吾所欲。
終老亦何求。但懼無此福。
功名如美味。染指已云足。
何待厭飽餘。腸胃生疢毒。
請看留侯退。遠勝主父族。
我師老子言。知足故不辱。

【字解】【一】一架　架は書を入れる棚。【二】暮年促　老年が相促す。【三】午醉重　晝の醉がこたへる。【四】被暖　被は寢具。【五】染指　左傳に「楚人、鼈を鄭の靈公に獻ず。子公の食指動く、以て子家に示して曰く、他日、われ此の如し、必ず異味を嘗めむと。大夫の鼈を食ふに及び、子公を召して與へざるなり。子公怒り、指を鼎に染め、これを嘗めて出づ」とある。【六】疢毒　疢は熱病。【七】留侯　張良、留に封ぜられしが故に云ふ。晚年、穀を避け、赤松子に從つて游ばむといひしこと、史記留侯世家に見ゆ。【八】主父　史記の本傳に「主父偃、齊の相となり、齊王の姦事を發す、王、自殺す。上、大に怒り、遂に主父偃を誅す」とある。

【題義】この詩は、白樂天の體に倣つたのである。

【詩意】われ高啓、いつまでも賤しい身分に居ると誰が云ふか、すでに聖明の世に出仕して、俸祿を頂戴したことがあるではないか。われ今も猶ほ貧に苦んで居ると誰が云ふか、あき倉の内には、米が大分殘つて居て、食ふに不足が無いではないか。宮闕を辭したのは、自ら引退したので、歸鄉したのも、左遷や放逐ではない。舊宅には、棚一ぱいの本があるし、荒れた庭園には、數叢の菊がある。俗緣は妻子に任せ、家事は下部を煩はして、自分は、一切關係しない。天性、疏懶なるが故に、早く閒地に就いたので、何も必ずしも老年の促すを待つにも及ばない。そこで、相變らず朝士の冠を戴いて居たが、近ごろは、野人の衣服を作つて著用して居る。酒は、飲みたい時に飲み、深い杯で遣らかすから、晝の醉も、なかなかこたへるし、寢具が暖いから、朝に成つても、眠熟して、一寸目が醒めない。平生の起居は、ざつと此通り。傍人は我が寂寞を笑へども、その寂寞こそ、わが欲するところである。これから、老死するまで、格別外に求めるところは無いが、此禍が無くなりはせぬかと、唯だそれを懼るるのみである。功名は、さながら、美味の如く、一寸指を染めさへすれば、それで澤山、何も十分に食ひ飽きた揚句、腸胃を惡くして病を生ずるまでに成らずとも善い。請ふ見よ、留侯が晚年引退したのは、はるかに、主父偃が三族を誅せられしに勝つて居る。われは、足るを知る故に辱かしめられずといふ老子の言を師とし、今日の境涯に甘んじて居る積りである。

【餘論】起四句は、逆筆を以て之を行り、辭し闕を引退より被暖朝眠熟に至る十二句は、刻下の狀況を細かに述べ、旁人笑「寂寞」の四句は、自ら之を解釋し、功名如「美味」より收結に至る八句は、世人の求めたがる功名は一寸嘗めれば澤山、何でも、人は足るを知ることが肝心だといつたので、この一段は、

構想と措辭と、ともに其妙を極めて居る。

新春飲王七孝廉家

新春、王七孝廉の家に飲す

凍雨靄江郭。寒姿變春華。
鳥欣已交音。梅慘尚閉花。
此時高堂上。晨起獨感嗟。
歲換固有常。時清樂無涯。
蕭蕭風吹巾。竹外度遠沙。
相過偶一醉。今夕憐酒家。

凍雨、江郭に靄たり、寒姿、春華を變ず。
鳥は欣んで已に音を交へ、梅は慘として尚ほ花を閉ぢ。
この時、高堂の上、晨起、獨り感嗟。
歲の換はる、もとより常あり、時は清くして、樂、涯なし。
蕭蕭として、風、巾を吹き、竹外、遠沙を度る。
相過ぎて、偶ま一醉、今夕、酒家を憐む。

【字解】【一】靄　もやもやして居る。【二】交音　互に鳴きかはす。【三】歲換　年中の季節が換はる。【四】度遠沙　沙路を遠く歩いて往つた。【五】酒家　酒ある家、王孝廉の家を指す。

【題義】　說明に及ばぬ、但し、王孝廉の名字閲歷等は不詳。

【詩意】　凍れる雨は、もやもやとして、江邊の城郭も、ほの暗く、この寒げな姿が、やがて賑はしき春に變ずるのである。鳥は喜んで、すでに啼きかはし、梅は慘めな樣で、まだ碌に花を開かない。

この時、おのれは、高堂の上に於て、朝早く眠より覺め、ひとり感慨嗟嘆を爲すことを禁じられなかつた。季節の移り變はることは、もとより常の法則であるし、今しも、清平の世、樂、限りなく、これを元末喪亂の時代に比べると、霄壤の差がある。かくて、風蕭蕭として、頭巾を吹くをも厭はず、はるかに、竹外の沙路を歩し、ここに、王孝廉を訪うて一醉したが、今夜は、酒ある此家が特に氣に入つた。

【餘論】　起四句は、新春雨中の實景、次の四句は、今昔を低徊して感慨禁せず、結四句は、卽ち題意の正面である。

詠軒

肅肅布華榻。泠泠罷朱絃。
臨檻一流睇。幽事忽滿前。
池草方依微。庭柯正葱芊。
偶爾發孤詠。聊茲寫中悁。
景融理自得。詎辨嬿與妍。

詠軒

肅肅として華榻を布き、泠泠として朱絃を罷む。
檻に臨んで、一たび流睇すれば、幽事、忽ち前に滿つ。
池草、方に依微、庭柯、正に葱芊。
偶爾、孤詠を發し、聊か茲に中悁を寫す。
景融して理自ら得、詎ぞ嬿と妍とを辨せむ。

猶慙至妙意、寂寞非言宣。

【字解】〔一〕 鞶裥 裥は腰かけ、鞶は之を美して云ふ。〔二〕 浼浼 音の清越なるを云ふ。〔三〕 朱絃 琴瑟の類をいふ。〔四〕 嚬愁 愁は、手すり、欄に同じ。〔五〕 澆眸 目を巻して眺める。〔六〕 幽事 幽静なる勝事。〔七〕 庭柯 柯は木の枝幹。〔八〕 中情 情は憂愁。〔九〕 纖輿妍 醜美に同じ。

【題義】 詠軒は書齋の名、誰のとも斷つて無いから、作者自身の家に在るものと見える。

【詩意】 肅然として、立派な腰かけを竝べ、その間に在つて、瑟を彈ずれば、その音極めて清越、やがて一曲方に終り、欄干に臨んで、一たび眺めやれば、靜幽なる勝事は、忽ち我が前に滿つるを覺えた。池邊の芳草は、今しも煙の如く、ぼんやりして居るが、庭上の木木は、鬱然として茂つて居る。これを見て、ふと孤詠を發し、聊か、此に心中の憂を寫した。抑も、景色が此心と融合すれば、宇宙の至理も、自然會得すべく、何も美醜を辨じて、物に差別を設ける必要は無い。しかし、至つて玄妙なる意味は、到底、寂寞たるもので、言語を以て宣べることが出來ないのを、吾ながら、物足らず思ふのである。

【餘論】 前八句は、彈琴の後、庭の景色を見て孤詠を爲すに至りしことを述べ、軒に名づけた本意は、ここに概見される。結四句は、理を言ふこと極めて精核、味うて愈よ盡きざるを覺える。

施君眠雲堂

古弁一高士。白雲與之儔。
性懶復好眠。招雲宿林邱。
下雲作簟席。上雲作衾裯。
雲去稍舒膝。雲來正蒙頭。
平生無心夢。與雲兩悠悠。
自言眠雲樂。世無一可侔。
浩然身欲飄。若乘無倪舟。
朝至乎帝鄉。夕返乎仙洲。
寧知日月旋。但覺乾坤浮。
天雞叫不醒。窅窅空巖幽。
我觀山川氣。出入不可求。
或逐鸞鶴翔。或從蛟龍游。

施君の眠雲堂

古弁の一高士、白雲、これと儔す。
性懶にして復た眠を好み、雲を招いて林邱に宿す。
下雲を簟席となし、上雲を衾裯となす。
雲去つて、稍や膝を舒べ、雲來つて、正に頭に蒙る。
平生無心の夢、雲と兩つながら悠悠。
自ら言ふ、雲に眠るの樂、世、一も侔しうすべきなし。
浩然として身飄らむと欲す、無倪の舟に乘ずるが若し。
朝に帝鄉に至り、夕に仙洲に返る。
寧ろ日月の旋るを知らむや、但だ乾坤の浮ぶを覺ゆ。
天雞、叫べども醒めず、窅窅として空巖幽なり。
われ山川の氣を觀るに、出入、求むべからず。
或は鸞鶴を逐うて翔り、或は蛟龍に從つて游ぶ。

或爲風伯驅。狼藉不得收。
或遭雨師怒。奔走無停休。
小生膚寸間。大覆遍九州。
變化實多狀。欲算苦費籌。
奈何一室中。爾獨解使留。
我行塵務區。願出久末由。
舉足常防危。開眼卽見愁。
不如閉戶眠。往尋孔與周。
愧無山中緣。雲肯相從不。
惟當去從爾。一夢三千秋。

【字解】【一】古弁　古式の冠、北史李雄傳に「新羅、かつて、使を遣して朝貢す。ともに語り、因つて、その冠制の由るところを問ふ。使者曰く、古弁の遺制、安んぞ、大國の君子の識らざるあらむや」と見ゆ。【二】下雲　下層の雲、上雲も類推すべし。【三】簟席　簟は竹むしろ。【四】衾裯　裯は眒帷、卽ち戸ばり。【五】無心夢　何おもふとしもなくして夢む。【六】無倪舟　倪は限界、無限大の舟。【七】帝鄉　天上。【八】仙洲　仙人の居る島。【九】天雞　天上の雞。【一〇】宵宵　宵は夜に同じ、深夜の貌。【一一】風伯　風の神、史記司馬相如傳に「屏翳を召し、風伯を誅して雨師を刷す」とある。【一二】雨師　雨の神、上を見よ。【一三】膚寸間　公羊傳に「石に觸れて出で、膚寸にして合し、朝を崇へずして、徧れく天下に雨ふるものは、唯だ泰山のみ」とあつて、その注に「四指を膚となす」とある。膚は、手の指四つを竝べたる程の長さ。寸は、一本の指の長さ。合せて、わづかの長さの處。【一四】九州　禹の區劃に係り、支那本土全部を汎稱す。【一五】費籌　籌は數取りの物。【一六】塵務區　俗務の忙がしき場所。【一七】末由　末は無、由は緣由。【一八】孔與周　孔子と周公。

【題義】眠雲は、施氏の堂號である。原注に「君、字は可堂、眠雲は其號なり」とあるが、その本名閲歷は分からない。この詩は、卽ち眠雲堂に寄題したのである。

【詩意】施君は、古式の冠を戴いて居る一高士であつて、常に白雲と一緒になつて居る。君の天性は疏懶なるが上に、眠を好み、ここに堂を築き、雲を招いて林邱に宿して居る。そこで、下層の雲を以て簟席となし、上層の雲を以て衾裯となし、雲が去れば、漸く膝を舒ばし、雲が來れば、それを頭に被る。平生無心に見る夢も、雲と共に、兩つながら悠悠として居る。施君が自ら云ふには、雲に眠る樂は格別で、世に一として之と等しきものはない。その浩然として、身飄らむと欲するに當つては、無限大の舟に乘つて、八極に縱游するが如く、朝には天帝の宮に至り、夕には仙人の居る島に返つて來る。かくて、雲中に居れば、日月の運行するをも知らず、但だ乾坤の浮ぶを覺ゆるのみである。夜あけに當つて、天雞が叫べども、夢は醒めやらず、あたりは、ほの暗く、奥深く、空巖は愈よ幽邃である。元來雲は山川の氣であつて、その出入、ともに、人意を以て求めることは出來ない。ある時

は、鸞鶴を逐うて翔り、ある時は、蛟龍に從つて游び、ある時は、風伯に驅られて、ごちやごちやに成つて、收めることが出來ず、ある時は、雨師の怒に遭ひ、仕方なしに奔走して、少しも停まり休むことはない。小なれば、わづかばかりの間隙に生じ、大なれば、九州をも殘る隈なく掩ひかぶせる位、その變化は、實に多狀にして、これを算出しやうとしても、生憎、數取りとなるべきものがなくて、閉口する位。それだのに、どういふ風にして、君は一室の中に籠つた儘、ひとり、變化窮まりなき此雲を一つ處に留めて置くことが出來るのか、實に不思議で堪まらない。われは、俗務紛冗たる境地を行り、その中から脱出しやうとしても、久しい間、その所由なきに苦み、足を舉ぐれば、常に危險に注意せねばならぬし、目を開けば、愁はしき事ばかりを見て居るから、いつその事、戸を閉ぢて眠り、そして、孔子・周公を尋ねたら善からうと思つて居るが、愧づらくは、山中に棲止すべき宿緣がなく、雲が果して承知して相從ふべきや否や、一寸分からない。雲の意志は分からぬとして、唯だ去つて君に從ひ、一場の夢に三千年を過ごす樣にありたいと思つて居る。

【餘論】起首より與レ雲兩悠悠に至る十句は、題意の正面、自言眠レ雲樂より窅窅空巖幽に至る十句は、眠雲の樂、我觀ニ山川氣一より爾獨解レ使レ留に至る十四句は、施君が如何にして獨り一室の中に雲を留め、仍つて、眠雲の樂を得たるかを詰り、我行ニ塵務區一より收結に至る十句は、おのが刻下の境涯を述べ、君に從つて、亦た此樂を縱にしたいといふ希望を逗露したのである。

臥病東館簡諸友生

病に東館に臥して諸友生に簡す

抱レ疾臥東城。文墨成久荒。
疾を抱いて東城に臥し、文墨、久荒を成す。

翔鴻乍流響。時菊忽殞芳。
翔鴻、乍ち響を流し、時菊、忽ち芳を殞す。

繁陰慘不舒。何殊懷積傷。
繁陰、慘として舒びず、何ぞ殊ならむ積傷を懷くに。

良儔秉高誼。寡味豈見忘。
良儔、高誼を秉り、寡味、豈に忘れられむや。

車馬限泥潦。無由接華觴。
車馬、泥潦に限られ、華觴に接するに由なし。

平居歡固難。況乃時非康。
平居、歡、もとより難く、況んや乃ち時康に非ざるをや。

何以度茲運。相勗蹈其常。
何を以て茲運を度し、相勗めて其常を蹈まむ。

【字解】【一】東城　城東に同じ。【二】文墨　詩文著作の事ども。【三】久荒　久しく荒廢する。【四】流響　鳴く聲が聞こえる。【五】時菊　時を得顔なりし菊。【六】殞芳　花が凋む。【七】繁陰　打續く曇天。【八】積傷　積る傷心。【九】良儔　良友に同じ。【一〇】秉　執る。【一一】高誼　厚誼に同じ。【一二】華觴　杯を受ける。雨後の出水、にはたみづ。【一三】接華觴　杯を受ける。【一四】寡味　智德寡くして世事に味きこと、つまり愚愚。【一五】泥潦　潦は如き時運。【一六】相勗　互に勵ます。【一七】蹈其常　常道を履行する。【一八】平居　平生に同じ。【一九】時非康　昏亂の世。【一〇】茲運　かく

【題義】詩中に東城とあるから、東館は卽ち城東の居宅であらう。この詩は、青邱が城東の居宅に病

氣療養中、手紙に代へて、その友人に贈つたのである。

【詩意】病氣に罹つて、城東の居宅に臥し、詩文の著作も、久しく棄てぼかして仕舞つた。時しも秋の末、征雁は、乍ち鳴き度り、時を得顔なりし菊も、急に凋んで仕舞つた。連日の曇天は、慘澹として晴れやらず、たとへば、胸に傷心の事を積み重ねた樣なものである。わが良友は、交誼に厚いから、この陋愚なる予を、決して忘れはしまい。街上には、泥が流れて、外出するも六つかしく、從つて、高會の席に列して、杯を受けることも出來ない。平生でも、歡を爲すこと、固より難きに、刻下爭亂の世に於ては、猶更の事である。そこで、如何にして、この時運を度り行くべきか、お互に勵まし合つて、常道を履む樣に致したいものである。

【餘論】起六句は、東城臥病より晩秋久雨の實況を敍し、良儔乘三高誼一の四句は、相思の意、平居獄固難の四句は、刻下處世の方に道及して、互に相勵ましたのである。

答張院長雨中見懷

林園寢扉掩。閒坐道心生。林園、寢扉掩ひ、閒坐、道心生ず。
山藥翻寒色。塘漪含曉清。山藥、寒色を翻し、塘漪、曉清を含む。

張院長の雨中懷はるるに答ふ

乍違枉芳札。遠憶愧深情。乍ち違うて芳札を枉げられ、遠く憶うて、深情に愧づ。
此日知同寂。梧牕聽雨聲。この日、知る同じく寂、梧牕、雨聲を聽く。

【字解】【一】寢扉　寢室の扉。【二】山藥　山中に生えて居る藥草。【三】塘漪　池塘に湛へたる漣波。【四】乍違　久しく御目にかからぬ。【五】枉芳札　手紙を寄越す。【六】愧深情　情誼の深きを辱しと思ふ。【七】同寂　矢張、寂寥に居る。

【題義】院長は、官吏の尊稱などに用ふる場合もあるが、この院長は、道院の主と見える。この詩は、某道院の主たる張某が雨中に手紙を寄越したから、これに答へて作つたのである。張は、原注に志道とあつて、多分本名であらうが、その字等は、丸で分からない。

【詩意】われは、林園の中に在つて、寢室の扉を掩ひ、閒坐して居ると、道心が自然に生ずる。眺めやれば、山丘に在る野生の藥草は、冬がれの寒げなる色を爲して翻り、池塘に湛へたる漣波は、曉の清らかさを含んで居る。久しく御目にかからぬのに、態態お手紙を下され、遠く相思ふ折柄、君の深情を辱く思ふ。今日、君も矢張、寂寥の中に坐し、桐の葉の掩ひかぶさる窓の下に、しとしとと降り注ぐ雨の音を聞いて居るであらう。

【餘論】前四句は、おのが閒居の狀態を敍し、乍違枉三芳札一の二句は、張院長の書を寄せられしを謝し、此日知同寂は、一歩を拓開して、慰藉の意を表したのである。なほ、この詩は、純然たる五律と見ても善いので、ここに收めたのは、やや不倫では無からうか。

暮途書見

暮歸東市門。道路聞悲啼。
駐馬一借問。答云征人妻。
征人新戰歿。飲恨沈黃泥。
有兒在哺下。飢來食無糜。
誓將割慈愛。棄去從東西。
我看巢中燕。雛長隨母飛。
皇天仁萬物。兼照理弗違。
此獨何奇偶。不能與之齊。
躊躇去復顧。使我心肝摧。

【字解】【一】哺下　哺は乳を飲むこと。【二】糜　粥に同じ。【三】從東西　從は任かす、なり行きに任かす。【四】兼照　あらゆる物を合せ照らす、一視平等なること　【五】奇偶　奇數と偶數、運命、まはり合せ。

【題義】この詩は、日暮、わが家に歸る途すがら、目睹したところを寫したのである。見の字の上には、所の字が有るべき筈であるが、脱落したのか、それとも、作者が意あつて、はじめから、かくの如く書いたのか、一寸分からぬ。又金檀の注に據ると「大全集、誤つて春日言懷に作る、今、槎軒集に從つて改正す」とある。

【詩意】日暮に、城東の市門に向つて歸ると、その途中、悲しげに啼く聲を聞いたから、馬を停めて、試に問うて見た。すると答へて云ふには、自分は出征軍人の妻である。夫は、近ごろ戰死し、盡きぬ恨を飲んで、黄土に葬られた。あとには、一人の小兒が殘つて居るが、まだ乳ばなれもせず、飢ゑ來つて、粥だに啜ることが出來ず、この儘では、二人ともに死んで仕舞ふ。そこで、心に誓ひ、仕方がないから、この恩愛の情を割き、この兒を棄てて、自分は、東に行くとも、西に行くとも、成り行に任かせやうと思ふと、かう云つた。かの巢の中なる燕を見ても、雛は、何時までも、親鳥に隨つて飛んで行くので、母子の情は、もとより自然である。皇天は、仁を以て萬物を扶養し、一視平等、その理、決して違はぬのに、この親子のみは、どういふ運命の廻はり合せか、これと同じうすることが出來ず、まことに、氣の毒の至。かくて、しばらく其處に躊躇し、愈よ去つては復たふり向き、わが心肝の摧ける樣な想がした。

【餘論】前半十句は、寡婦の兒を棄てむとするを寫し、後八句は、これに對する作者の感慨である。但し、その深刻は聊か足らず、かくては、讀者の心魂を動盪することが出來まいと危まれる。

施澤阻風

客行阻風濤。捨舟步江側。
荒村經戰餘。草木盡愁色。
夜投土屋中。月出林半黑。
燃薪燎我衣。炊黍作我食。
更長關塞寒。歸夢何由得。
遙想倚閭親。中宵淚沾臆。

【字解】【一】客行　旅中の過程。【二】阻　妨げられる。【三】江側　江岸。【四】土屋　土で塗り堅めた家、歐陽修の詩に雨雪恭塞土屋深とある。【五】燃薪　薪を燃やす。【六】燎　あぶる、乾かす。【七】更長　更は二更三更の更で、夜の刻限。【八】關塞　關所と城塞、旅路の譬に用ふ。【九】何由得　どうして出來やう。【一〇】倚閭親　戰國策に「王孫賈の母曰く、汝、朝に出でて晚に來る、すなはち、吾、門に倚つて望み、暮に出でて還らざれば、吾、閭に倚つて望む」とある、親は親屬、必ずしも父母のみでなく、姉でも善い。青邱の父母は、早く死んで、故郷には姉だけが殘つて居た。閭は里門。【一一】沾臆　臆は胸。

【題義】施澤は湖名、姑蘇志に「崑山の西北に在り」と見えて居る。この詩は、施澤湖より歸る途中、風に妨げられて難儀したことを敍したのである。

【詩意】旅中の行程は、風濤の爲に妨げられ、止むなく、舟を棄てて上陸し、とぼとぼと江岸を歩いた。到る處、村里は、戰爭の爲に荒れはてて、草木は、猶ほ愁色を帶びて居る。夜、土屋に投宿したが、月は出でて、林影半ば黑く、まことに、慘澹たる景色。そこで、薪を燃やして、我が衣を乾かし、黍を炊いで、わが食を作つた。夜は長くして、旅路も寒く、どうして故郷に歸る夢が結ばれやう。はるかに、里門に倚つて、我が歸るを待つて居る家族の事を想ふと、夜中に淚が自然と流れて、胸を霑すばかりである。

【餘論】起四句は阻風の實況、次の四句は投宿、結四句は、夢も結ばずして故郷を憶ふといふので、まことに淒寥の極である。

送張隱君歸耕西山

張隱君の西山に歸耕するを送る

山中久無人。秋風桂枝衰。
朝逢還山客。言趁白雲期。
人出君乃遁。嗟哉此何時。
東岡有良田。負耒當自治。
四體雖云勞。歲晏可免飢。

而來未能返。驅車竟何之。　而も來つて未だ返る能はず、車を驅つて竟に何にか之く。

【字解】【一】白雲期　白雲と約して山中に歸る期限。【二】負來　負をかつぐ。

【題義】說明に及ばぬ、但し、張隱君の名字閱歷等は不詳。

【詩意】西山の中には、久しく人の住居するものなく、西風吹き到つて、桂花の枝も衰へ、秋は愈よ寂しくなつた。朝に君に過つたが、白雲に約束した期限を追うて、愈よ山に歸るとの御話。刻下、多くの人は、皆山から出て仕舞つたのに、君は、塵を避けて山に遁れる。おもへば、今は如何なる時であるか。太平の世も、隱者には、とんと關係の無いことと思はれる。われも、東岡に良田を所有して居るから、鋤を荷うて、自ら耕すのが至當で、働けば、無論、手足は疲れるが、歲の暮に成つても、飢を免れることだけは受合、それだのに、ここに來て、家に歸ることも出來ず、車を驅つて、この先、どこまで行くのであるか。

【餘論】前後各一六句、前段には、張隱君の歸耕を言ひ、後段には、おのが未だ鄕里に歸る能はざるを言ひ、彼を以て此を影寫し、隱君の高操を欽すると共に、翻つて風塵に奔走する自己の多事を傷んだのである。

過硤石

硤石を過ぐ

青山夾長溪。溪上有魚市。　青山、長溪を夾み、溪上に魚市あり。

土門閉落日。野氣白於水。　土門、落日に閉ぢ、野氣、水よりも白し。

虎行車跡外。鳥起鐘聲裏。　虎は行く車跡の外、鳥は起つ鐘聲の裏。

吳語問居人。到州還幾里。　吳語、居人に問ふ、州に到る、還た幾里ぞ。

【字解】【一】魚市　魚の市場。【二】土門　土で塗り固めた里門、杜甫の垂老別に土門壁甚固とある。【三】到州　硤石は杭州の治下であるから、この州は、多分杭州であらう。

【題義】硤石は、前に卷三、過三硤石一の題下に見えて居たので、杭州府志に「海寧縣の硤石山は、卽ち紫微山なり、兩山相峙ち、中に河流を通ず、因つて名づく」とある。

【詩意】青山は、長い谿谷を夾み、谿上には、魚市場が開かれて居る。土で塗り固めた里門は、夕日の頃に閉され、野もせを罩むる靄の氣は、水よりも白く見える。車跡の通ずる徑路以外には、虎が歩いて居ることがあり、暮鐘の緩く響く聲の中に、鳥は驚いて飛び起つ。そこで、吳語を以て、ここから州治までは、まだ何里あるかといつて、居人に問うて見た。

【餘論】起二句は總提。中間四句は、その地の風景を寫し、荒寂蕭寥、殊に甚しきを覺える。結二句は、補筆、兼ねて、その僻遠なることを想はしめる。なほ、この題は、前に卷三にも見えて、五言十

六句、稍や佳製を推し、これは固より相及ばない。青邱は、官を罷めし後、再び越地に往つたことも無いから、これは定めて當時旅中の率作なるべく、他日、改作したのが、卽ち前に掲げられた方で、これは、その儘、棄てて置いたのを、後人が拾ひ取つて、ここに收めたものと思はれる。

送劉使君

去年送使君。路遠已海湄。
今年送使君。路遠復過之。
路遠豈足言。人遠自可悲。
夕宴鮮共歡。晝出乏竝馳。
君懷孰可語。予過疇能規。
此行剖竹符。東方撫惸嫠。
王事正靡盬。奚暇及爾私。
但令中弗遷。庶以慰所思。

劉使君を送る

去年、使君を送る、路遠くして、すでに海湄。
今年、使君を送る、路遠くして復た之に過ぐ。
路の遠きは豈に言ふに足らむや、人の遠きは自ら悲むべし。
夕宴する共に歡ぶこと鮮く、晝出づる竝び馳するに乏し。
君の懷、孰れか語るべき、予の過、疇れか能く規せむ。
この行、竹符を剖き、東方に惸嫠を撫す。
王事正に盬きことなし、奚ぞ爾の私に及ぶに暇あらむ。
但だ中、遷らざらしむれば、庶はくは以て所思を慰めむ。

【字解】【一】使君　太守の尊稱。【二】海湄　東海の上。【三】疇能規　誰か能く規戒すべき。【四】剖竹符　史記孝文本紀に「はじめて、郡國の守相に與へて、銅虎符・竹使符を爲る」とあつて、その注に「竹符は、竹筒五枝、長さ五寸を以て、篆書を鐫刻し、第一より第五に至るまで、出入徵發す」とある。竹符は、竹で造り、その半を剖いて、宮中に留め、その半を守相に持たせて外に遣すことに成つて居る。【五】惸嫠　惸は父母なくして孤獨なるもの、嫠は夫を喪へるもの、王禹偁の詩に萬家呼二父母一、百里撫二惸嫠一とある。【六】王事正靡盬　王室に關係あることは、堅固ならざるべからず、故に、吾は、あくまで力を王事に盡すといふ意。盬は、もろしと訓す、靡盬は堅牢の義。詩經唐風に肅肅鴇羽、集二于苞栩一、王事無盬、不能蓺二稷黍一、父母何怙、悠悠蒼天、曷其有所とあり、小雅に、四牡騑騑、周道倭遲、豈不懷歸、王事靡盬、我心傷悲とある。【七】爾私　私は私事。【八】中弗遷　中心の變はらぬこと。

【語義】説明に及ばぬ。使君は、前に數ば云へる通り、官職ある者、殊に太守の尊稱。劉使君は、何の官に居たか分からぬが、此行剖二竹符一、東方撫二惸嫠一の句あるより見れば、いづれ、東邊の守相にでも任せられたものであらう。

【詩意】去年、使君の行を送つたが、その時は、路遠くして、海邊に行かれるとのことであつた。今年、再び使君を送るが、路の遠きことは、前年にも過ぎて居る。路の遠い位は、言ふに足らぬことであるが、人が遠く隔つるのは、自然悲むべきことである。君が居なくなると、これより後、夕に宴を催す時にも、共に歡を爲すこと少く、晝、游に出かけるにも、馬を竝べて馳する同伴者に乏しくなる。君の懷抱は、誰が取り次いで語るべき。予の過失は、誰が規戒して與れやうか。今次の行、君は竹符

を割いて、守相の重きに任じ、東方に往つて、孤兒寡婦などを撫育するとのこと、もとより、王事は堅固ならざるべからざるが故に、君は、力を盡して之に當るべく、一個の私事など、顧る暇も無からう。しかし、君の中心に變はりなく、吾が事を忘れぬならば、庶はくは以て、吾が思ふところを慰めることも出來るであらう。

【餘論】前十句は、題意の正面。後六句は、使君の職責の重きを言ひ、猶ほ且つ相忘れざることを囑付したのである。

送周將軍請老歸耕

周將軍の老を請うて歸耕するを送る

鞍馬罷戎役。筋力喜尚全。鞍馬、戎役を罷め、筋力、尚ほ全きを喜ぶ。
買牛西岡垂。聊復治廢田。牛を買ふ西岡の垂、聊か復た廢田を治す。
零雨何濛濛。決流亦涓涓。零雨、何ぞ濛濛たる、決流、亦た涓涓たり。
良苗及時新。人情一欣然。良苗、時に及びて新に、人情、一に欣然。
甘此耕耘勞。忘彼富貴妍。この耕耘の勞に甘んじ、彼の富貴の妍なるを忘る。
心同老農夫。閔閔望有年。心は老農夫に同じく、閔閔として年あるを望む。
家廩儻得高。尚願輸資邊。家廩、もし高きを得ば、尚ほ願はくは輸して邊に資せむ。

【字解】【一】戎役　軍役。【二】筋力　筋肉の力。【三】西岡垂　垂は陲、邊といふに同じ。【四】廢田　荒廢した田地。【五】零雨　降り來る雨。【六】決流　勢よき流れ。【七】良苗　陶淵明の平疇交二遠風一、良苗亦懷レ新に本づく。【八】閔閔　待ち切つて居る貌、左傳に「閔閔焉として、農夫の穀を望むが如し」とある。【九】有年　豐年。【一〇】家廩　家の米倉。【一一】得高　高く積み上げる。【一二】輸資邊　運び出して邊防の軍資とする。

【題義】説明に及ばぬ。但し、周將軍の名字、閥歴等は不詳。

【詩意】周將軍は、年が老いたからといつて、鞍馬の軍役を罷められたが、幸にも、筋力は尚ほ全くして、少しも衰へない。そこで、牛を買つて、西岡の邊に耕し、聊かながら、荒廢した田地を鋤き直さうといふ考である。春の雨は、濛濛として降り、勢よき細流は、涓涓として流れ、良苗は、時に及んで、さながら新なるが如く、生意太だ饒く、これを見れば、人情、自然喜ばしげである。將軍は、この耕耘の勞多きに甘んじて、かの富貴の立派らしく見えるを忘れ、その心は、丸で老いたる農夫と同じく、待ち切つた樣な顔をして、今茲の豐年で收穫の多からむことを望んで居られる。さて愈よ豐年で、家の米倉に高く積み上げたならば、その中の幾分を運び出し、邊防の軍資として官に寄贈せられむことこそ、まことに願はしい次第である。

【餘論】起四句は、將軍の請老歸耕。次の八句は、田園の樂を述べ、結二句は、一轉して、豐年には

軍資を寄贈せられたいといひ、相手が將軍だけに、まことに緊切である。

夜登南樓觀月

迢迢海上樓。月出常先見。
吐嶺乍分規。臨波已澄練。
蒼茫城闕閉。歷落星河轉。
毋違中夜歡。皓景應難戀。

【字解】【一】迢迢 はるかなる貌。【二】吐嶺 嶺上より吐き出される。【三】分規 規は圓を畫く器。規を分つといへば、半圓を畫くこと。【四】澄練 ねり絹の様に澄み波る、謝朓の詩に澄江淨如練とある。【五】蒼茫 ほの暗き貌。【六】歷落 からりと打開きたる貌。【七】星河 天の河。【八】皓景 月色。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】はるかに隔りたる海上の高樓では、月が出ると、第一に見え、嶺上から吐き出され時には、半圓を畫き、波に臨めば、水色澄み切つて、白絹の様である。夜は、ほの暗くして、城門すでに閉ぢ、天はからりと開いて、天の河が西に轉ずる。折角の良宵であるから、夜半まで興を縱にすべく、やがて、時が移れば、夜があけて、いくら戀しく思つても、もう月が見られなくなる。

【餘論】前四句は、月の初めて上りし時を畫き出し、次の二句は、夜の次第に更け行くことを述べ、結二句は、逸興を縱にすべしといふ意である。

題徐良夫耕漁軒

朝聞孺子歌。暮聽梁甫吟。
豈無滄洲懷。亦有畎畝心。
昔賢在泥蟠。終當起爲霖。
釣獲溪上璜。鉏揮瓦中金。
茲世方喪亂。伊人邈難尋。
既迷煙波潤。復阻雲谷深。
嗟我豈其偶。聊將學幽沈。
唯子是同袍。相期莘渭陰。

徐良夫の耕漁軒に題す

朝に孺子の歌を聞き、暮に梁甫の吟を聽く。
豈に滄洲の懷なからむや、亦た畎畝の心あり。
昔賢、泥に在つて蟠る、終に當に起つて霖となるべし。
釣つて溪上の璜を獲、鉏いて瓦中の金を揮ふ。
この世、方に喪亂、伊人、邈として尋ね難し。
すでに煙波の潤きに迷ひ、復た雲谷の深きに阻まる。
嗟す、我、豈に其偶ならむや、聊か將に幽沈を學ばむとす。
唯だ子是れ同袍、相期す莘渭の陰。

【字解】【一】孺子歌 卽ち滄浪の歌、孟子楚辭等に見ゆ。その全篇は、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾

足一といふのである。【二】梁甫吟　前に卷四、魏使君見レ示二吾贈詩一の詩中にも見えて居た。蜀志諸葛亮傳に「亮、躬づから隴畝に耕し、好んで梁父吟を爲し、毎に自ら管仲樂毅に比す」とある。【三】滄洲懷　滄洲は海上の仙境。【四】耿畝　隱畝に同じ。【五】在泥蟠　班固の答賓戯に「泥に蟠つて天に飛ぶは、應龍の種なり」とある。【六】起爲霖　書經の說命に「若し、歲、大に旱せば、汝を用ひて霖雨と作さむ」とあつて、高宗が傅說に囑せし語。【七】溪上璜　竹書紀年の注に「文王、磻溪の水に至る。呂尙、渭に釣る、王、下り趨り、拜して曰く、公を望むこと七年、乃ち、今、光景を斯に見る。尙答へて曰く、望、玉璜を釣り得たり。その文の要に曰く、姬受レ命昌、來提撕二爾洛一鈐報在レ齊」とある。【八】瓦中金　世說に「管寧・華歆、ともに園中に菜を鋤く。地に片金あるを見、管は鋤を擲ふこと、瓦石と異ならず。華は、提つて之を擲ち去る」とある。【九】伊人　上に擧げた昔賢の面面を云ふ。【一〇】其偶同類。【一一】幽沈　靜幽にして沈淪する、柳宗元の詩に幽沈諸二世事一とある。【一二】同袍　詩經の秦風に與レ子同レ袍とある、親友の義。【一三】莘渭　伊尹は有莘の野に耕し、太公望は渭水に釣して居た。伊呂二人を合稱す。

【題義】耕漁軒は、姑蘇志に「軒は光福に在り、良夫、文學あり、交るところ皆名士、題詠を爲すもの甚だ多し」とあつて、この首も、卽ち其一と見える。但し、良夫の本名、閱歷等は不詳。

【詩意】朝には、孺子の唱ふる滄浪の歌を聞き、暮には、諸葛亮が作つたといふ梁甫の吟を聽く。滄浪は、水に緣ある處から、滄洲に乘り出さうと思はぬでもないし、梁甫は、もとより田園生活に關したもので、自然、隲圃に隱居したいと思ふ心を起す。むかし、傅說の如き大賢は、泥中に蟠つて居たが、一朝高宗に用ひられると、大旱には汝を用ひて霖雨と作さむと云はれ、呂尙は、溪上に釣して玉璜を得、やがて、封侯となるといふ豫言を得、管寧は、畑を耕す時に、土の中から金を掘り出したが、見向きもせずして、瓦石同樣に考へて居た。今しも、天下は、喪亂の世であつて、かくの如き昔賢は、その跡、遠くして、尋ねることが出來ない。されば、滄洲の懷あるも、煙波の溯きに迷ひ、耿畝の心あるも、雲谷の深きに阻てられて、その志を達することが出來ないのに、君は、耕漁を以て其軒に名づくる位で、その思を遂げたのは、まことに羨ましい。予の如きは、到底、君の仲間ではないが、聊か靜幽沈淪を學んで、兎に角、この世を遯れる事だけは遣つて見たいと思ふ。そこで、君は、唯一の親友であるから、他日、有莘の野、渭水の濱の如き處に於て、相會する樣にしたいと、毎に心に念じて居る次第である。

【餘論】起四句は、耕漁の心を起す原因を云ひ、昔賢の四句は、傅說・呂尙等、耕漁に隱れた人人を追思し、茲世の四句は、刻下は、とても、其志を遂げ難いと云つて、暗に徐良夫の境遇を羨み、嗟我の四句は、自己の身の上を述べて、反襯的に良夫に映帶せしめたのである。

皐橋

閶門啼早鴉。拂面見飛花。
綠水通螭舫。紅橋過犢車。
誰尋伯通宅。只問泰娘家。

皐橋

閶門に早鴉を啼かしめ、面を拂うて飛花を見る。
綠水、螭舫を通じ、紅橋、犢車過ぐ。
誰か伯通の宅を尋ねむ、只だ問ふ泰娘の家。

【字解】【一】閶門　題義の項に見ゆ。【二】早鴉　夜明けの烏。【三】飛花　落花に同じ。【四】鵶鈔　東坡の詩に映山黄帽鵶頭鈔とある通り、詳しくは鵶頭鈔といふ。鵶は龍の屬、故に鵶頭は龍頭といふが如く、船首に之を刻してある。【五】紅橋　欄干を朱塗にした橋。【六】犢車　小牛に引かせる車、章莊の詩に美人金犢車とある。【七】伯通　卽ち皐伯通、前に卷三、詠懷逸十六首の中の梁鴻の條に注した通り、後漢書逸民傳に「乃ち姓名を易へて、齊魯の間に居り、又去つて吳に適き、大家皐伯通に依つて、廡下に居る」とある。なほ題義の項を併せ看よ。それから、陸龜蒙の皐橋の詩にも、今來未必非梁孟、却是無人識伯通」とある。【八】秦娘　唐代の歌者、劉禹錫の秦娘歌の引に「秦娘は、本と皐尙書の家の主謳者なり。尙書、東京に薨するや、廣州刺史張愁に得らる。愁、武陵郡に謫せられて卒す。秦娘歸するところなく、日に樂器を抱いて哭す。賓客、これを聞いて、爲に其事を歌ふ」とあつて、その詩に秦娘家本閶門西、門前絲水繞金隄」とある。

【題義】姑蘇志に「皐橋は、閶門の內、漢の議郎皐伯通の居、その側は梁鴻の寓するところなり」とある。

【詩意】閶門の上には、夜あけ鴉が啼き、落花は、人の顏を拂うて飛んで來る。門外の川には、鵶頭の遊山舟を浮べ、朱塗の欄干の橋には、小牛の引く車が通る。この邊は、皐伯通の宅址だといふが、格別尋ねる人もなく、只だ秦娘一流、美人の家を問ふものばかりである。

【餘論】皐橋の實況は上の四句に盡き、その下二句は補筆、伯通・秦娘を巧に融會して使用し、且つ聊か諷意を含ませてある。

賦得小吳軒。贈虎邱蟾書記　小吳軒を賦し得て、虎邱の蟾書記に贈る

丹霞結飛甍。迴出鷲嶺上。　丹霞、飛甍に結び、迴に鷲嶺の上に出づ。
手招西山雲。淺挹東海浪。　手に西山の雲を招き、淺く東海の浪を挹む。
五湖水如杯。歸棹安可放。　五湖、水、杯の如く、歸棹、安んぞ放つべけむや。
當年笑夫差。乃欲百里王。　當年、夫差を笑ふ、乃ち百里に王たらむと欲す。
吾觀大千界。等彼一塵相。　吾、大千界を觀るに、彼の一塵相に等し。
始悟軒中僧。非眞亦非妄。　はじめて悟る、軒中の僧、眞に非ず、亦た妄に非ざるを。

【字解】【一】丹霞　朝やけ夕やけ。【二】飛甍　高い屋上に在る大瓦。【三】鷲嶺　山海經に「西域に靈鷲山あり」と記し、謝靈運山居賦の注に「靈鷲山は、般若法華を說く處」とある。【四】大千界　維摩經に「維摩詰、左手に三千大千世界を斷取して、右手の掌中に著け、又復た還して本處に置き、人をして、往來の心想あらしめず」とある。【五】一塵相　一本の塵の樣な形相、東坡の詩に下視馮九州、蒼蒼栖一塵」とある。【六】非眞亦非妄　眞妄以外に超出して居る。

【題義】小吳軒は、吳を小にするといふことで、卽ち、東山に登つて魯國を小にし、泰山に登つて天下を小にするといふと同じ意味である。虎邱志に「軒は、東南隅に在り、飛架、巖外に出で、勢極めて峻聳、平林遠水、聯岡斷隴、煙火萬家、盡く檻外に在り、朱樂圃文、小吳會と稱し、張氏は天開

圖畫と名づく。好事者云ふ、吳を過ぎて虎邱に登らざるは俗なり、虎邱に登つて小吳軒に登らざる、亦た俗なり」とある。書記は、寺の役僧、蟾は略稱であつて、その本名は分からない。この詩は、小吳軒を賦して、虎邱寺の蟾書記に贈つたのである。

【詩意】朝夕の霞氣は、甍の上に凝結するが如く、軒は迥然として高く、音に聞く鷲嶺の上にも拔き出て居る位だから、同じ位の高さなる西山の雲は、容易に招くべく、極めて淺く見える東海の浪は、一寸掬ふことさへ造作もない位。まして、五湖の水などは、杯の如く、これでは歸舟をも浮べられまいと思はれ、むかし、夫差が、この一帶百里の地に王たらむと欲した其志の小なる、まことに憐笑すべき程である。ここに、大千世界を達觀すると、宇宙は、一塵の形相を爲せるに過ぎず、そして、この軒中に住む僧が、眞妄以外に超出して居るといふことを始めて悟つた。

【餘論】前八句は、小吳軒の形勝を敍し、後四句は、蟾書記の人物を評し、兼ねて、この軒の景致を占むることの至當なるを道破したので、一結、極めて雄放である。

寓興三首

有鳥來萬里。海寒遇天風。　鳥あり、萬里より來り、海寒くして天風に遇ふ。

羣飛忽四散。雲路不得從。　羣飛して忽ち四散、雲路、從ふを得ず。

珍羽已摧落。襤褸向深叢。　珍羽、すでに摧落、襤褸として深叢に向ふ。

雖無金丸懼。飲啄常弗充。　金丸の懼なしと雖も、飲啄、常に充たず。

悲鳴顧霜雪。欲託無高松。　悲鳴して霜雪を顧み、託せむと欲するも、高松なし。

黃鵠何時來。銜我出蒿蓬。　黃鵠、何の時か來り、我を銜んで蒿蓬を出でしめむ。

【字解】【一】襤褸　もぢやもぢやと羽毛の亂るる貌。【二】金丸　西京雜記に「韓嫣、彈を好む、常に金を以て丸と爲し、失ふところの者、日に十餘あり、長安、これが語を爲して曰く、苦二飢寒一逐二金丸一」とある。【三】銜我　銜はくはへる。【四】蒿蓬　よもぎ、草むら。

【題義】寓興は、感興を寓する、ことよせるといふので、首首、或物に就いて興を起したのである。

【詩意】ある鳥が萬里の遠きより來り、海上の寒い處で、淒じき天風に遭つた爲に、羣飛したのが忽ち四散し、雲井の路を一緒に飛び行くことが出來ない。珍らしい羽も、すでに摧けて仕舞ひ、はては羽毛亂縮した儘、深い草むらに落ちて來た。ここに居れば、金丸で彈射される心配は無いが、飲食は、常に不十分、折からの霜雪を顧みて悲鳴し、その身を託せむとして、頻りにあせつては居ても、然るべき高い松の木だに見付からない。黃鵠よ、汝は、何時、ここに來て、我を救ひ出し、そして、

口にくはへて、蓬蒿の底から引き出して臭れるか。今は、唯だ有力者の援助を待つばかりである。

有女乘煙霧。出游在江濱。
麗服飾珠翠。光輝比陽春。
借問誰氏子。乃是洛浦神。
自非瑤臺侶。誰能得相親。
空懷纏綿意。日暮無由伸。

【字解】【一】珠翠　珠玉と翡翠の羽。【二】洛浦神　洛水の神、曹植に洛神賦があり、杜牧の詩に誰家洛浦神とある。【三】瑤臺侶　仙宮の仲間。

【詩意】一人の女が煙霧に乘じ、大江の濱に出かけて游んで居る。その美美しき衣裳には、珠玉や翡翠の羽などを飾り、粲然たる光彩は、陽春にも比すべき位。これは、誰が家の娘かといへば、洛水の神で、仙宮の仲間でなければ、これと親むことが出來ない。われは、胸中に纏綿の思を抱くものから、日暮れむとしても、これを伸ぶることが出來ず、空しく、思ひ焦がれて、獨り惱むのみである。

有客愛遠游。驅車上高山。
東海不盈攬。搏桑低可攀。
欲與仙人期。翺翔彩雲間。
白日忽然暮。風霜慘容顏。
徘徊望鴻鵠。失路何當還。

【字解】【一】不盈攬　掬ふ手に一ぱいに成らぬ。【二】翺翔　飛び廻る。【三】搏桑　即ち扶桑、東海中の神木、日ほ第一、この木に上ると稱されて居る。

【詩意】遠游を愛する人があつて、馬車を驅つて、高山に登つた。すると、あらゆる物が小さく見えて、東海は、手に掬つても足らぬ位、扶桑てふ神木も、低くして攀づべき程である。そこで、仙人と約して、彩雲の間を飛び廻らうと思つて居た處が、忽然として、白日暮れかかり、風霜慘として、顏容も衰へて來た。そこで、徘徊して立ち去らず、仙人の先觸れとして、鴻鵠が來さうなものだと、翹望して待ち、われ獨り路に迷うて、どうして還ることが出來やうか。

【餘論】第一首は、失羣の鳥が他の援助を待つことを言うて、折角の才あるも、挽引する人なきを嗟するの意を述べ、第二首は、洛浦の神を戀ふるも、纏綿の意を伸ぶるに由なきを言うて、方今、明主

會ま出でしが、わが忠誠の志を達する能はざるに比し、第三首は、仙人と約しても、遂に來らず、われのみ獨り路を失つたことを言ひ、心知あれども、瞬離すでに久しく、因つて、互に援くること能はざるに暗喩したので、これ卽ち寓興を以て篇に名づけた所以である。

褚彥中存耕軒

褚翁江畔居。家無二頃田。
所保方寸地。欲爲子孫傳。
晝以仁義畦。灌以禮樂泉。
得書爲耒耜。躬耕可終焉。
去惡如去草。不使得蔓延。
沛若時雨化。良苗已芃然。
所獲亦既多。豈止三百廛。
奈何謀富人。兼并連陌阡。
已田不解芸。茅塞誠可憐。
嗟翁豈老農。遠勝樊子賢。
有德自足飽。何憂値荒年。

褚彥中の存耕軒

褚翁、江畔に居り、家に二頃の田なし。
保つところは方寸の地、子孫の爲に傳へむと欲す。
晝するに仁義の畦を以てし、灌ぐに禮樂の泉を以てす。
書を得れば耒耜となし、躬耕して終るべし。
惡を去るは、草を去るが如く、蔓延を得せしめず。
沛として時雨の化するが若く、良苗、すでに芃然。
獲るところ、亦た既に多く、豈に止だ三百廛のみならむや。
奈何か富を謀るの人、兼并して陌阡を連ぬ。
己の田、芸るを解せず、茅塞、誠に憐むべし。
嗟す、翁、豈に老農ならむや、遠く樊子の賢に勝る。
德あり、自ら飽くに足る、何ぞ荒年に値ふを憂へむ。

【字解】【一】二頃田　わづかばかりの田地。【二】方寸地　一寸四方の場處、この心を云ふ。【三】仁義畦　仁義のあぜ、禮記の禮運に「仁を本として以て之を殖む」とあり、又「義を陳して以て之を種う」とある。【四】禮樂泉　禮運に「禮を修して以て之を耕す」とあり、又「樂を播して以て之を安んず」とある。【五】去惡如去草　左傳に「國家を爲むるもの、惡を見ること、農夫の務めて草を去るが如し」とある。【六】不使得蔓延　左傳に「茲蔓ぜしむる無かれ、蔓すれば圖り難きなり」とある。【七】沛　沛然として。【八】時雨　時を得たる雨。【九】芃然　生長する貌。【一〇】三百廛　廛は米倉、詩經に胡取二禾三百廛一兮とある。【一一】連陌阡　陌阡は、卽ち阡陌、田間に通ずる縱橫の路。【一二】不解芸　芸は草ぎる。【一三】茅塞　雜草で塞がる。【一四】樊子　樊遲、論語に「樊遲、稼を學ばむことを請ふ」とある。

【題義】この詩は、褚彥中の存耕軒に寄題したので、彥中の字並に閲歷等は不詳。

【詩意】褚翁は、江邊に住し、家貧にして二頃の田だに無く、保つところは、心といふ方寸の地で、それを子孫の爲に傳へむとして居る。そこで、仁義を畦として之を區劃し、禮樂を泉として之に灌漑し、書物を得れば、之を鋤鍬として生涯躬から耕す覺悟。惡を去ることは、雜草を引き拔くが如く、決して、蔓延することの出來ぬ樣にし、沛然たることは、時雨の化するが如くで、良苗は、勢を得て

愈よ生長する。されば、收穫も、從つて多く、もとより三百の米倉に一ぱいといふ位ではない。然るに、富貴を謀る人は、無暗に兼併して、阡陌を連ね、そこら一帶を自分の物に致さうと思つて居るが、碌碌手が廻はらぬ處から、おのが田でさへ十分に草ぎることが出來ず、すべてが草で塞がつて、まことに氣の毒な有樣。して見れば、褚翁は、老熟した農夫であるばかりでなく、はるかに古しへの樊遲に勝つて居る。德さへあれば、自ら滿足すべく、たとひ、凶年に逢つた處で、少しも心配することは無い。

【餘論】通篇比體、これ卽ち褚翁が軒を存耕と名づけた所以であらう。起首より豈止三百廛に至るまでは、題意の正面。奈何謀富人の四句は、逆筆を用ひて、反面に翁の眞意を明かにし、嗟翁豈老農の四句は、論贊的に附記して、翁の人物を頌揚したのである。

九日

茲晨豈不佳。秋日麗川陸。　この晨、豈に佳ならざらむや、秋日、川陸麗かなり。
幽人自悽感。坐念頹運速。　幽人、自ら悽感、坐して、頹運の速なるを念ふ。
去年登高會。朋舊俱在目。　去年登高の會、朋舊、俱に目に在り。
霜前紫蟹肥。露下紅秔熟。　霜前、紫蟹肥え、露下、紅秔熟す。
空山有棲鳥。歸駕不忍促。　空山に棲鳥あり、歸駕、促すに忍びず。
今年客江皐。落日吟影獨。　今年、江皐に客たり、落日、吟影獨。
逢辰少歡意。愧此籬下菊。　辰に逢うて歡意少く、この籬下の菊に愧づ。
人生苦難知。世事差可卜。　人生、知り難きに苦む、世事差や卜すべし。
但須酹柴桑。有酒吾自漉。　但だ須らく柴桑に酹すべく、酒あらば、吾、自ら漉さむ。

【字解】【一】頹運　時秋にして今年も漸く衰きむとするを云ふ。【二】紅秔　秔はうるち。紅は、熟して稍や赤く見ゆるより云ふ。【三】登高會　重陽の日には、高い處に上り、茱萸を地に挿みて厄よけとする。【四】江皐　皐は澤地。【五】逢辰　この嘉節に逢ふ。【六】柴桑　陶淵明、潯陽柴桑の人なるが故に云ふ。【七】吾自漉　陶淵明が自ら頭巾を執つて酒を漉したといふことは、前にも注して置いた。

【題義】九日は九月九日、卽ち重陽である。

【詩意】九日といふ今日は、まことに天氣も宜しく、晴れた秋の日に、水陸の景色も、麗はしく見える。幽人は、感慨自ら悽然として、年の暮れかかる頹敗の運命の速なることを心に念じて居る。去年の登高の會には、朋友どもが眼前に居り、霜の降る前、蟹は肥えて味よく、露下つて秔稻正に熟し、

愉快に游ぶことが出來たので、空山に巣くふ鳥が、日暮に車を促して歸らしむることを、つれなく思つた位。今年は、江上に客となり、伴もなく、夕日の中に吟じ、佳節に逢つても、面白いと思ふこともなく、折角咲き出でた籬の菊に對しても、氣の毒な位。人生は、如何に成り行くか分からぬが、喪亂も、すでに斂まつて、世間の事は、どうやらトすることが出來る樣になつた。されば、陶淵明その人を思ひ出でては、酒を灑いで之を祭るべく、その酒は、吾、自ら淵明の眞似をして頭巾で漉して遣らう。

【餘論】起四句は總提。去年登高會の六句は、前年を追憶し、今年客二江皐一の四句は、今日の實況。前年は朋儕と偕にし、今年は孤單、その感愴盡きざるは、當然の事。人生苦レ難レ知の四句は、これを收束し、且つ古賢を欽慕するの意を述べたのである。

過羊腸嶺

羊腸嶺を過ぐ

我昔江湖游。命寄一葦輕。
我、むかし江湖に游び、命は寄す一葦の輕きに。

今朝籃輿穩。愛此山中行。
今朝、籃輿穩に、この山中に行くを愛す。

松風與澗水。故作波濤聲。
松風と澗水と、故らに波濤の聲を作す。

初登羊腸嶺。畏聞羊腸名。
はじめて登る羊腸嶺、羊腸の名を聞くを畏る。

入林穿蒙密。出谷擇曠平。
林に入つて蒙密を穿ち、谷を出でて曠平を擇ぶ。

雖非太行路。車馬恐敗傾。
太行の路に非ずと雖も、車馬、敗傾を恐る。

我何數乘此。要識艱險情。
われ何ぞ數ば此に乘せむ、艱險の情を識るを要す。

【字解】【一】一葦　詩經に誰謂二河廣一、一葦航レ之とあるは、一束の葦を腋下にかかへ、身を浮かせる用心として、河を渡るといふことであらうが、後世では、蘆葉に乘つて海を航したことなどから、蘆の葉の如き小さな舟といふ譬に用ひて居る。【二】籃輿　竹かご。【三】蒙密　草むらの茂み。【四】太行　山名、河南・河北・直隸の數省に亙つて居る一大山脈。魏の武帝の詩に北上二太行山一、隴坂何巍巍とあり、白居易の太行之路能摧レ車とある。

【題義】羊腸嶺は、題下の原注に「天平山に在り」と記してある。天平山に游んだ詩は、前に卷四に見えて居たので、この首は、多分、同時の作であらうと思はれる。

【詩意】むかし、吾、江湖の間を游び廻はつた時には、その生命を蘆の一葉にまかふ樣な輕い小舟に託したが、今朝は、竹輿に乘つて、しづしづと山中に分け入る心地よさ。松風と澗水とは、相和して、わざと波濤の聲を作す樣である。はじめて、この羊腸嶺に登つたので、第一、羊腸といふ名に聞きおちし、林に入つては、藪の茂みを穿ち、谷を出ると、成るべく廣く平かな處を擇んで行つた。名だたる太行の路ではないが、車馬では、とても行かれない。こんな處で輿に乘ることは、滅多に無いから、

難險阻の氣分を十分に味ふが善いと思つた。

【餘論】起四句は、緩緩と題に入り、松風與二澗水一の六句は、山中の實況、雖レ非二太行路一の四句は、卽ち感慨である。

登竹竿嶺

曲徑隨(一)蟒蟠。高枝作猿攀。
力盡到頭頂。始見湖中山。
煙雨過(二)空鏡。曉沐西子鬟。
好景如二好詩一。追尋詎(四)能閒。
朝飲白(五)雲泉。夕渡明(六)月灣。
自笑俗緣在。未窮遽言還。
應知(七)他夜夢。猶在山水間。

【字解】【一】蟒蟠　巨蟒の如く蟠るといふ意。【二】空鏡　鏡なす青空。【三】西子　西施に同じ。【四】詎能閒　閒なる能はず、落ち付いて居られぬ。【五】白雲泉　蘇州府志に「天平山に在り」と見ゆ。【六】明月灣　蘇州府志に「洞庭の西山に在り」と見ゆ。【七】他夜　他日の夜

【題義】竹竿嶺は、題下の原注に「花鹿山に在り」と見えて居るが、その花鹿山が何處だか分からぬ。但し、朝飲二白雲泉一、夕渡二明月灣一の二句あるより見れば、天平山と洞庭西山の間に在ることは確實で、これも、矢張、天平山に游んだ其前後の作であらう。

【詩意】曲れる小徑は、蟒蛇の樣にのたくり、高い樹の枝には、猿の如くして攀ぢ登り、わが筋力の盡きかかつた頃、やつと、絶頂にたどり著いて、はじめて、太湖の中の山山が眺められた。時しも、煙の如き細雨は、鏡なす青空を過ぎ、山は朝早く西施の鬟を洗ひ上げた樣に見えた。元來、好景は好詩の如く、十分に味はねばならぬ處から、どこまでも追尋して、少しも、落ち著いて居る譯に行かない。朝には白雲の泉を飲み、夕には明月の灣を渡るべく、その中間に、この絶勝があるのだが、笑ふべきは、わが俗緣、なほ存し、折角の景勝を窮めずして、遽に歸り去ることである。されば、他夜の夢は、この山水の間を彷徨して、決して、これを忘れ得ぬことと思はれる。

【餘論】起四句は、題意の正面。煙雨過二空鏡一の四句は、絶頂に於ける眺觀を敍したので、措辭明覩、まさしく、篇中の精彩である。朝飲二白雲泉一以下六句は、この境、久しく留まる能はざるを慨して、餘情、長しへに盡きざる妙趣がある。

賦長洲苑。送徐孟岳

長洲苑を賦して、徐孟岳を送る

江邊採芳游。花過鶯聲寂。
風牀柳觀琴。月舫蓮塘笛。
豪華已非舊。恨與煙蕪積。
方嗟既往人。復送將歸客。
回首望蒼蒼。遙山雨中夕。

江邊、芳を採つて游ぶ、花過ぎて鶯聲寂たり。
風牀、柳觀の琴、月舫、蓮塘の笛。
豪華、すでに舊に非ず、恨は煙蕪と積む。
方に既往の人を嗟し、復た將に歸らむとするの客を送る。
首を回らして蒼蒼を望む、遙山、雨中に夕なり。

【字解】【一】採芳 花草を摘む。【二】風牀 風の當る處に吟牀を設く。【三】柳觀 柳の中なる道觀。【四】月舫 月中に浮べたる游山船。【五】煙蕪 煙にまがふ平蕪。

【題義】長洲苑は、前に數ば見え、蘇州の近郊に在つて、もと吳宮の苑であつた。この詩は、長洲苑に事よせて、徐孟岳の歸鄉を送つたのである。孟岳の字並に閲歷等は不詳。

【詩意】江邊に花草を摘んで游べば、頃しも春の末、花は散り過ぎて、鶯の聲も最早聞こえぬ位。これから、夏になると、風前に吟牀を置けば、柳立ちこむる道觀に起る琴を耳にし、月中に游舫を放てば、蓮の花咲き匂ふ池に笛を吹くことも出來る。さはれ、吳王當日の豪華は、すでに昔となり、破國の恨は、煙なす平蕪と共に積むばかり。今しも、既往の昔人を弔ひつつ、翻つて、ここに歸國する人を送れば、愈よ以て感慨に堪へられない。首を回らして、君行く方の蒼蒼たる天際を望めば、遠山一帶、雨を帶びて、夕景色の中にほの暗く、愈よ我が心を傷ましめる。

【餘論】前六句は、長洲苑を賦し、一轉して送別に入り、四句を以て之を片づけたのは、聊か手際であるが、その構想には、格別新しい處もない。

送金海虞

金海虞を送る

青青隄邊柳。鬱鬱當春榮。
漫漫悲路長。戚戚念子行。
子在車同馳。子去觴獨傾。
乃知失羣鴻。不若求友鶯。
山川問音問。何以慰我情。
唯其布嘉惠。海隅聞頌聲。

青青たる隄邊の柳、鬱鬱として春に當つて榮ゆ。
漫漫として、路の長きを悲み、戚戚として、子の行を念ふ。
子在り、車、同じく馳す、子去る、觴、ひとり傾く。
乃ち知る、羣を失ふの鴻は、友を求むるの鶯に若かず。
山川、音問を間て、何を以てか我が情を慰めむ。
唯だ其れ嘉惠を布け、海隅に頌聲を聞かむ。

【字解】【一】漫漫 悠遠の貌。【二】戚戚 憂愁の貌。【三】問 隔つ。【四】嘉惠 民に對する惠愛。【五】頌聲 功德を讃

美する評判。

【題義】海虞は、前に卷四、送李使君遷海虞の詩の處に注して置いたが、一統志に「蘇州常熟縣は晉の海虞」とある。金海虞は、卽ち海虞の地方長官と成つた金某であるが、その名字閲歴、又前に見えた李使君との先後如何等は、すべて分からぬ。

【詩意】青青たる江隄の上なる柳は、鬱鬱として、春に當つて榮えて居るが、今その柳を折つて、君を送るので、漫漫として、行く手の路は長く、そして、君が行くことを思へば、戚戚として、心を傷ましめる。君が此處に居れば、車を同じうして馳することが出來るが、君が此處を去れば、酒を飲むにも相手がない。されば、その羣を失つて、置いてきぼりにされた雁は、友を求めて嚶嚶と鳴く鶯に及ばない。これより、山川が音信を隔つれば、何を以て、我が心情を慰めやう。唯だ願はくは、下民に嘉惠を布いて、東海の一隅に於て、善き評判を聞く樣に致したいものである。

【餘論】起四句は、題意の正面、その疊字を連用したのは、古詩十九首の或者を學んだのであらう。次の六句は、胸中の感想を抒べ、結二句は、その人に囑望したので、かなり周匝に、餘蘊なき樣に出來て居る。但し、乃知失羣鴻の二句は、卷三、擬古第一首の中なるを殆んど其儘用ひて居る。

秋夜。懷張參軍思廉

亭亭雲間樓。皎皎樓上人。
相望如明月。此夕東海濱。
秋風忽驚客。梧葉鳴聲頻。
不寐繞飛檻。高步詠道眞。
誰憐荒園中。幽臥愁難親。
露寒砌蛩急。相思空達晨。

【字解】【一】亭亭　聳高の貌。【二】皎皎　光り輝く貌。【三】高步　高く自ら標置する。【四】砌蛩　階下にすだく蟲の聲。

【題義】說明に及ばぬ、但し、思廉の字竝に閲歴等は不詳。

【詩意】亭亭として、高く雲間に聳ゆる樓の上に、君は顏色皎皎として、光りかがやいて見える。君は、この夕、東海の濱に居られるから、此方から言へば、さながら明月の如く、望むべくして卽くべからず、おもへば、秋風、忽ち到つて、客を驚かし、桐の葉は、さわさわと頻りに鳴り、君の寐ねざる時、一片ひらりと飄つて、欄干を飛び廻るであらう。すると、君は、例の如く、高く自ら標置して、

宇宙の道の眞を詠出されるに相違ない。此方は、荒園の中に幽臥して、相親むべき心友もなく、露寒くして、階下の蛩聲愈よ急なる時、君を思うて、夜あけまで寐ずに居た。

【餘論】起四句は、題意の正面。次の四句は、彼方の有樣を想像し、結四句は、自己の岑寂を敍出し、彼我相形する處に於て、一段の妙味がある。

送陳秀州

我行秀州野。馬首迷荆榛。
路逢病老翁。涕泣說苦辛。
前年亂兵來。殺戮存幾人。
崎嶇墾舊田。欲活未死身。
官府事徵索。書版日下頻。
點丁不遣孤。輸穀不待新。
屋中兒啼嗥。門外吏怒嗔。

陳秀州を送る

われ、秀州の野を行き、馬首、荆榛に迷ふ。
路に病老の翁に逢ひ、涕泣して苦辛を說く。
前年、亂兵來り、殺戮、幾人を存する。
崎嶇として、舊田を墾し、未死の身を活かさむと欲す。
官府、徵索を事とし、書版、日に下ること頻なり。
丁を點して孤を遣さず、穀を輸して新を待たず。
屋中、兒啼嗥、門外、吏怒嗔。

豈無凍餒憂。天遠不可陳。
我初聽此語。廻思一顰呻。
國家昔平治。九土貢賦均。
中間致茲變。主吏失撫循。
須知奮梃徒。原是負耒民。
虐之乃爲敵。愛之則相親。
此邦固易治。風俗自古淳。
奈何不加憐。使作涸轍鱗。
因留告老翁。無爲重沾巾。
歸當率子弟。努力耕作勤。
除書已報下。太守今甚仁。

豈に凍餒の憂なからむや、天、遠くして、陳ずべからず。
われ初めて此語を聽き、廻思して、一たび顰呻。
國家、むかし平治、九土、貢賦均し。
中間、この變を致し、主吏、撫循を失ふ。
須らく知るべし、梃を奮ふの徒は、原と是れ耒を負ふの民なるを。
これを虐ぐれば乃ち敵となり、これを愛すれば則ち相親む。
この邦、もとより治め易し、風俗、古しへより淳。
奈何ぞ、憐みを加へずして、涸轍の鱗と作らしむる。
因つて留まつて老翁に告ぐ、重ねて巾を沾すを爲す無かれ。
歸つて、當に子弟を率ゐ、努力して、耕作を勤むべし。
除書、すでに報下、太守、今甚だ仁なりと。

【字解】【一】崎嶇　骨の折れる謂。【二】徵索　租稅を徵し又補充兵をさがす。【三】書版　揭示、布令を出す。【四】點丁　點は徵發する、丁は壯丁。白居易の詩に戶有二三丁一點二一丁一とあり。王庭珪の詩に喧呼傳三點丁一、田廬怨運糧とある。【五】輸穀　穀物

を官庫に搬び入れしむ。【八】不待新　新米の取れるのを待たない。【九】嗈嗈　嗈は吼える。【一〇】天遠　天は皇居を云ふ。【一一】九土　九州に同じ。【一二】主吏　當事者たる官吏。【一三】撫循　人民を撫育して、その願望を納れる。【一四】奮挺徒　挺は棒、百姓一揆の暴徒。【一五】負耒民　鋤を擔いで居た農民。【一六】涸轍鮒　轍はわだち、車の跡。車の跡の少しばかりの水の中に居る鮒の類で、やがて、水が乾けば、死んで仕舞ふ。事は、莊子に出で、監河侯に粟を乞ひし時の言中に見えて居る。なほ李商隱の文に活二枯鱗于涸轍一とある。【一七】除書　辭令。【一八】報下　發令となる。

【題義】一統志に「嘉興府、五代には秀州といふ」とある。この詩は、陳某が嘉興の太守に任せられしを聞き、その行を送る爲に作つたのであるが、陳の名字閲歴等は、例の如く不詳。

【詩意】われ曩に秀州の地を旅行したが、到る處、荒蕪して、馬首が荆榛に迷ふ位。その途中、病氣で死にかかつて居る一老翁に逢ふと、涙を流して、色色苦辛の事どもを語り聞かせた。前年、亂兵が侵入して、殺戮を恣にし、村里で殘つて居るものは、幾人といつて數へる位。この老翁も、幸に命だけは拾つたから、骨を折つて、昔の田を鋤き起し、そして、まだ死ななかつた此身を、どうやら活かさうとして、せつせと働いた。しかるに、官府に於ては、徵發詮索を事とし、お布令は、毎日、打續いて下り、壯丁を徵集して、父母も無い孤兒だといつて容赦はせず、又穀物を取り上げて、新米の出來るのをも待たない。そこで、家の中では、子供が啼き叫び、門の外には、役人どもが腹を立てて怒鳴るといふ始末。凍えたり飢ゑたりする心配は、目前に逼つて居るが、何分、ここは邊鄙で、都が遠いから、これを訴へ出ることが出來ないといふ話。われ、初めて此語を聞いて、つくづく思ひ廻らすと、一たび、眉を顰めて呻くことを禁ぜられなかつた。むかし、國家は太平の治を爲し、九州到る處、貢賦は均一であつたが、中間に於て、その變を致したのは、當事者たる官吏が人民を撫循する方法を誤つたからである。かの棒を奮つて騷いで居る百姓一揆とても、もとを正せば、鋤を荷つて自ら耕して居た良民であつて、これを虐げればこそ、敵となるが、これを愛すれば、相親むことが出來る。この秀州は、もとより治め易く、風俗は、むかしから淳樸である。それだのに、如何なれば、これに憐みを加へず、轍の跡で干ぼしに成りかかつて居る小鮒の如くならしめたのであるか。かく思ひつつ、留まつて老翁に向ひ、最早、涙を流して巾を濡らさずとも善い。歸つたら、子弟を引き具し、せつせと努力して、耕作を勵むが第一。今度、發令が濟んで、太守が代つたが、新任の陳君は、甚だ仁慈の御方であるから、決して心配はないと、かういつて遣つた。

【餘論】老翁との問答を敍した丈であるが、予は、老翁に向つて、かくの如く語つた位であるから、君も其意を體し、赴任の後は、精精、寛厚の治を布いて、仁慈を旨とし、わが囑望に孤負せぬ樣にして貰ひたいといふのが、言外の餘意である。起四句は、老翁に逢ひしこと、前年亂兵來より天遠不レ可レ陳に至る十二句は、老翁の語、我初聽二此語一より使レ作二涸轍鮒一に至る十四句は、作者が腹の中で考へたことを細述し、因留告二老翁一の六句は、これを慰藉し、翻へつて、新任太守の撫育を囑望したのである。通篇、平易にして、白樂天の筆意に似た樣に覺える。

暮行園中

我懶不自耕。廢地茅屋東。
雨露日夜滋。鬱然長榛叢。
翳翳荒蹊長。瀧瀧暗溜通。
時因讀書餘。曳杖行其中。
爭晩集亂雀。吟秋聒微蟲。
幽興苟自愜。芬華詎無同。
容身有此所。孰謂吾道窮。

暮に園中を行く

われ懶にして自ら耕さず、廢地、茅屋の東。
雨露、日夜滋ひ、鬱然として、榛叢を長ず。
翳翳として荒蹊長く、瀧瀧として暗溜通ず。
時に讀書の餘に因つて、杖を曳いて其中を行く。
晩を爭うて亂雀集まり、秋に吟じて微蟲聒し。
幽興、苟くも自ら愜ふ、芬華、詎ぞ同じきことなからむ。
身を容るる此所あり、孰れか謂ふ、吾が道窮すと。

【字解】【一】懶　疎懶、大儘なること、無性なること。【二】翳翳　ほの暗き貌。【三】荒蹊　荒れた細路。【四】暗溜　草木の下に隠れて居る細流。【五】自愜　自然心に協ふ。【六】芬華　香ばしく花やかなること。

【題義】　説明に及ばぬ。

【詩意】　われ平生疏懶にして、自ら耕さず、茅屋の東に廢地があつても、その儘に放棄してある。そこで、日夕雨露の滋す爲に、鬱然として、荆榛が叢を爲して居る。荒れた細徑は、ほの暗いながらも長くつづき、埋もれた水は、瀧瀧たる聲を爲して、その間を流れて居る。時たま、讀書の暇ごとに、杖を曳いて、その中を歩いて見ると、日暮には、村雀が栖を爭つて集まり來り、秋には、小さな蟲がかしましきまですだいて居る。苟くも、幽興にして、我が心に協はば、たとひ、荒廢の地なりとも、彼の芬華の趣と同じで無い筈はない。この一身を容れるのに、かういふ適當な場處のある上は、まだ吾が道窮せりといふ譯でもない。

【餘論】　起六句は、廢園の實況、次の四句は、園中の逍遙、結四句は、幽興心に協うて、一身を容るるに足ることを云つたのである。大體の筆致は、王孟韋柳の一派と聊か冥契するところがあるので、疑もなく、罷官歸郷後の作であらう。

冬至夜感舊二首

今夕亦常夕。悲感何用并。
寒月初死魄。沈沈閉層城。
憶我爲兒時。早起不待明。
踉蹌試新衣。上堂拜父兄。

冬至の夜、舊を感ず　二首

今夕、亦た常夕、悲感、何を用つて并す。
寒月、初死の魄、沈沈として、層城を閉づ。
憶ふ、我が兒たりし時、早起して明を待たず、
踉蹌として新衣を試み、堂に上つて父兄を拜せしを。

於今幾何年。節序嗟屢更。
今に幾何の年ぞ、節序、屢ば更るを嗟す。

中庭風木號。哀多尚餘聲。
中庭、風木號び、哀多くして尚ほ餘聲。

空復有兩孩。燈前語縱横。
空しく復た兩孩あり、燈前、語、縱横。

挽須向我笑。寧解識此情。
須を挽いて我に向つて笑ふ、寧ろ此情を識ることを解せむや。

【字解】【一】初死魂　書經に「惟れ一月壬辰旁死魄」とあつて、滿月が虧け始めること。【二】層城　高い城門。【三】風木號　卷二、風樹操の條を見よ。韓詩外傳に載せた皐魚の言に「樹、靜ならむと欲して風息まず、子、養はむと欲して親逝ぬ、往いて見るを得べからざるものは親なり、吾請ふ、これより辭せむ」とある。【四】兩孩　二人の子供、例の嬰兒であらう。【六】挽須　須は鬚、鬚を引ッ張る、杜甫の北征に同じ事を挽須、誰能即嗔喝とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、冬至は、一陽來復の節であるから、いささか、祝を爲すのが彼土の風俗である。

【詩意】冬至とはいふものから、今夕は、矢張、常の夜と異ならないのに、如何なれば、悲感が胸中に生ずるのであるか。折しも、寒月は缺け初め、高き城門は、沈沈として閉ぢてある。おもへば、自分がまだ子供の時分、この冬至の時など、朝は早く起きて、夜の明けるを待たず、よろめきながら、新しい衣裳を著け、堂に上つて、父や兄に御挨拶を申し上げたことがある。それから、今まで何年に

成るか、節序は屢ば移り變つた。庭中では、風に搖られて木が叫び、さながら、皐魚の恨を帶ぶるが如く、悲哀極めて多く、吹き罷んでも、まだ聲を殘して居る。自分には、二人の子供があつて、燈前で色色話を爲し、わが鬚を引ッ張つて、我に向つて笑つて居るが、まだ頑是なき稚子には、わが此時の情思の分からう筈がない。

昔年偶失路。羈役戎馬間。
昔年、偶ま失路、羈役す戎馬の間。

南行越重江。歲晏不得還。
南行、重江を越え、歲晏くして還るを得ず。

風雪此夜中。投人宿荒山。
風雪、この夜中、人に投じて、荒山に宿す。

豈無壯士懷。聞笳亦低顏。
豈に壯士の懷なからむや、笳を聞いて、亦た低顏。

竭來東城隅。寂寞守故關。
竭來、東城の隅、寂寞として、故關を守る。

雖已忘家貧。尚復憂世艱。
すでに、家の貧を忘ると雖も、尚ほ復た世艱を憂ふ。

安居諒難保。風雨暗荆蠻。
安居、諒に保ち難し、風雨、荆蠻暗し。

長歌深谷翁。邈矣焉可攀。
長歌、深谷の翁、邈矣たり、焉んぞ攀づべけむや。

【字解】【一】失路　路に迷ふ。【二】櫚役　客となつて行役する。【三】重江　錢塘江等を云ふ。【四】投人　人家に投ずる。【五】佇顙　浮かぬ顔をする、心配な顔をする。【六】竭來　さまざまの解釋もあるが、ここのは極めて輕く、ここにといふ意味に見れば善い。【七】故闕　闕は門、舊宅の門。【八】荆蠻　史記に太伯仲雍が逃れて荆蠻に之き、文身斷髮、以て用ふべからざるを示すとあつて、古くは、吳の地を指す。【九】長歌深谷霜　杜甫を指す、その同谷七歌に天寒日暮空谷中とある。【一〇】焉可攀　眞似ることが出來ない。

【詩意】むかし、旅中路に迷ひ、兵馬の間に難儀したことがあつて、東南、吳越地方に赴かむとして、いくつもの江水を越え、年が暮れても、還ることが出來ず、丁度、冬至の夜には、風雪に逢ひ、からくも、荒山の中なる人家に投宿した。血氣さかんな時分、壯士の懷なきに非ざるも、笳聲の悲しきを聞けば、自然、心配な顔をすることを免れなかつた。ここに、城の東隅に居て、寂寞として、舊宅を守り、家の貧なることだけは忘れて居ても、騷亂まだ靜まらぬ世の艱苦を憂へぬ譯には行かぬ。刻下、安居といふことは、まことに保證し難く、荆蠻の天は、風雨立ちこめた樣な安排。むかし、杜甫は、同谷に居て、長歌わづかに其悶を排したが、高風邈として、とても、眞似も出來ないことである。

【餘論】前首は、重兒たりし時の事を追想して、眼前の兩兒女に緊接し、後首は、吳越客游中の苦を回憶して、刻下騷亂の世に纏到したので、その事、ともに冬至の日に係るが故に、極めて切實にして且つ眞摯である。

春日言懷二首

昔將理歸駕。棲彼商山岑。
達機苦不早。終焉成滯淫。
廻飈激游氛。白日滋玄陰。
憂居未經時。素髮忽已侵。
翩翩歸飛鴻。過我庭前吟。
無翼與同翔。日暮關梁深。
引領望西北。徘徊內傷心。

【字解】【一】商山　前に數ば見ゆ、四皓隱棲の地。【二】滯淫　停滯淫の義。【三】游氛　浮游する埃氣。【四】玄陰　黑色を爲す暴り。【五】素髮　白髮に同じ。【六】歸飛　歸の字には意味がない。【七】關梁　梁は橋、關河に同じ。【八】引領　首を引き延ばす。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】さきに、歸りの車を支度して、かの商山の岑に隱れ住まうと思つたが、機會に達すること、早からざりし爲め、その內に、愚圖愚圖に成つて仕舞つた。旋風は、空中の埃氣を吹き捲くり、白日

春日、懷を言ふ　二首

むかし將に歸駕を理めて、彼の商山の岑に棲まむとす。
機に達する、早からざるに苦む、終焉、滯淫を成す。
廻飈、游氛を激し、白日、玄陰滋し。
憂居、未だ時を經ず、素髮、忽ち已に侵す。
翩翩たる歸飛の鴻、わが庭前を過ぎて吟ず。
翼の與に同じく翔るなく、日暮、關梁深し。
領を引いて西北を望み、徘徊、內に傷心。

にも拘はらず、黒色なせる曇天は、遠慮なく延び廣がるといふ有樣。心配しつつ居れば、まだ時を移さぬ内に、忽然として、白髪に成つて仕舞つた。頃しも秋、翩翩として飛ぶ雁は、わが庭前を過ぎて鳴いて居るが、われには、翼なければ、雁と同じく、日暮に關河の深遠なる處を翔つて、おもふ方へ行くことも出來ない。そこで、首を引き延ばして、西北の方を望み、徘徊して、去りもあへず、自ら傷心を禁せざる次第である。

季春戴勝鳴。薄言農功始。
荒疇何莽莽。迨時不復理。
蒙蘢荆棘間。雊雉時決起。
思我常所經。追隨俠游子。
偶逢採桑婦。夭夭出墟里。
舊蹊誰能尋。逝者竟如水。
唐虞罷揖讓。爭奪殊未已。

季春には戴勝鳴き、薄か言に農功始む。
荒疇何ぞ莽莽たる、時に迨んで復た理めず。
蒙蘢たり荆棘の間、雊雉、時に決起す。
わが常に經るところを思へば、追隨す俠游の子。
偶ま採桑の婦に逢ふ、夭夭として墟里を出づ。
舊蹊、誰か能く尋ねむ、逝く者、竟に水の如し。
唐虞、揖讓を罷め、爭奪、殊に未だ已まず。

吁嗟乎蒼生。何由免瘡痏。

吁嗟乎、蒼生、何に由つてか瘡痏を免れむ。

【字解】【一】戴勝 礼記月令に「戴勝桑に降る」とあつて、その疏に「按ずるに、鵲鳥に云ふ、戴は鳶鳶、頭上勝れたるなり、亦た戴勝と呼ぶ」とある、頰白だといふこと。【二】農功始 農事の始。【三】荒疇 荒れた田畑。【四】蒙蘢 ごちやごちやに茂れる貌。【五】雊雉 鳴く雉。【六】決起 決然として飛び起つ。【七】夭夭 あでやかなる貌。【八】唐虞 即ち堯舜。【九】揖讓 讓を以て國を讓る。【一〇】瘡痏 痏は打創。

【詩意】春も三月になると、戴勝の鳥が鳴き、これから愈よ百姓仕事を始めねばならぬ。莽莽として田畑が荒廢したのは何事ぞ、それは、時に及んでも、手入れを致さぬからである。ごちやごちやに茂つた荆棘の間から、鳴く雉が決然として飛び起つ。かういふことでは仕方がないから、何とかせねばならぬ。わが平生經過せし跡を思へば、游俠の少年輩に追隨し、夭夭として村里から出て來た桑摘の女に途中で逢ふと、それにからかつたりして、のらくら游び過ごし、その爲に、折角所有して居る田畑も、この樣になつたのである。さはれ、むかしの田舍路は、尋ねることが出來ず、逝く者は流水の如く、すべての模樣も、居人も、變りはてて仕舞つた。顧みれば、堯舜一たび去つて、揖讓の事を罷めてより、天下爭奪絶えず、從つて、騒亂ばかり續いて居て、人民は、到底、瘡痏を免れることも出來ず、末世に生まれ合はせたものは、まことに、氣の毒千萬である。

【餘論】前首は、高隱せむと欲し、しかも、其時を失へるを嘆嗟し、後首は、平生、游劇に日を過ご

し、田園を荒蕪に委したことを後悔したのである。

雨中游寧眞道院

雨中、寧眞道院に游ぶ

盥手理瑤笈。清齋坐玄閣。
手を盥して瑤笈を理し、清齋、玄閣に坐す。

夏衣生晝涼。急雨和泉落。
夏衣、晝涼を生じ、急雨、泉に和して落つ。

池消澹澹花。庭解翻翻籜。
池には消ゆ澹澹の花、庭には解く翻翻の籜。

欲去更長謠。風林晚鳴鶴。
去らむと欲して、更に長謠すれば、風林、晚に鶴を鳴く。

【字解】【一】盥手　手を洗ひ淨める。【二】瑤笈　立派な笈、その中には書物などが入れてある。【三】清齋　齋は齋食、不淨の物を食はぬこと。【四】玄閣　道院の小閣。【五】籜　竹の皮。

【題義】寧眞道院は、前に卷四、鶴瓢山房の詩中に見え、李睿の住宅である。

【詩意】道院に參詣し、さまざまの物を見せて貰ふことになつたから、手を洗ひ清めて、瑤笈を整理し、前以て、物忌を爲し、小閣の中に坐して、この一日を送つた。折から、晝涼しくして、單衣も薄いやうに覺え、急雨は泉の如く降り注いだ。池には、散り浮く落花の跡を留めず、庭上には、竹の皮がほごれて、翻翻として落ちて來る。やがて、立ち去らうとして、更に長謠一番すれば、晚風林を度つて、鶴の鳴く聲が聞こえた。

【餘論】清幽一味、まことに境地にふさはしいが、洗鍊、いささか足らぬ樣な感を免れない。

次韻包同知客懷

包同知の客懷に次韻す

我少未嘗事。處世百不憂。
われ少にして未だ事を嘗みず、世に處つて百も憂へず。

譬如生馬駒。奔放安可收。
譬へば、生馬駒の如く、奔放、安んぞ收むべけむや。

豪華欲縱觀。西秦更東周。
豪華、縱觀せむと欲す、西秦、更に東周。

結交原巨先。共作緩急投。
交を結ぶ原巨先、ともに緩急の投を作す。

焉知化紕繆。終然此淹留。
焉んぞ知らむ、紕繆に化し、終然、ここに淹留せむとは。

出門逐途人。空策果下騮。
門を出でて途人を逐ひ、空しく策つ果下の騮。

積雪被岡原。大風揚河流。
積雪、岡原に被り、大風、河流を揚ぐ。

撫茲歲暮懷。局促誰與謀。
この歲暮の懷を撫して、局促、誰と謀らむ。

君從東方來。亦是慷慨儔。
君は、東方より來る、亦た是れ慷慨の儔。

偶居冷官廬。設席誦九邱。
帷火無膏油。起歎夜正幽。
自憐非匏瓜。寧不有所求。
恥隨軟媚子。取笑同伶優。
大言衆皆驚。千獻不一酬。
空時尋我飲。醉捋頹颼颼。
君今勿多談。已具兩釣舟。
鷗波起春江。歸路漸有由。
無爲坐自苦。素髮實易稠。

偶ま冷官の廬に居り、席を設けて九邱を誦す。
帷火に膏油なく、起つて歎ず、夜正に幽なるを。
自ら憐む、匏瓜に非ざるを、寧ろ求むる所あらざらむや。
軟媚の子に隨ふを恥ぢ、笑を取ること、伶優に同じ。
大言、衆、皆驚く、千獻、一も酬いず。
空しく時に我を尋ねて飲み、醉うて捋す頹の颼颼たるを。
君、今、多く談ずる勿れ、すでに兩釣舟を具ふ。
鷗波、春江に起り、歸路漸く由るあり。
坐ろに自ら苦むことを爲す無かれ、素髮、實に稠くなり易し。

【字解】【一】未嘗事　まだ嘗て經驗を積まない。【二】百不憂　百が百まで心配しない。【三】生馬駒　すこしも馴らさぬ野生の駒。【四】原巨先　漢書游俠傳に「原涉、字は巨先、性、略ぼ郭解に似たり、南陽太守となる」とある。【五】緩急投　一旦緩急もある時には、その人の處に身を託す。【六】化紕繆　今までの目論見が間違つて仕舞つた、あてが外れた。【七】簸　簸つ。【八】果下驢　魏志滅國傳に「果下馬を出す、漢の桓帝の時、これを獻ず」とあつて、その注に「馬の高さ三尺、これに乘れば、果樹の下に行くべし、故に名づく」とある、又元稹の詩に果下驢驢紫騮好とある。【九】局促　進退谷まること。【一〇】冷官　權力なき閑官、杜甫の詩に嚴公哀哀登三蓬省一、廣文先生官獨冷とある。【一一】九邱　古しへの書名、孔安國の尚書序に「九州の志、これを九邱といふ」とある。【一二】帷火　帳中の燈火。【一三】非匏瓜　論語に「我豈に匏瓜ならむや」とあつて、自分はふくべでは無いから、何にも食はないで、ぶらりとして居る譯には行かぬといふ意。【一四】軟媚子　體がしなやかで、媚諂を含むもの。梁の邵陵王綸の詩に、嬌情出三眉頸一、軟媚著三腰肢一とある。【一五】伶優　伶人と俳優。【一六】頹　舞に同じ。【一七】素髮　白髮。【一八】易稠　稠は繁し。

【題義】この詩は、同知包氏の客懷の作に次韻したのである。原注に師聖とあるのは、包氏の字で、列朝詩集に「包聖、字は師聖、江陰の人、鶴洲野人と號す、岳州府同知に任じ、高青邱・楊眉菴と詩友たり」とある。

【詩意】わが少年の頃は、世間の事に就いて、全く經驗を積まず、この世を渡ることは、何の造作もなく、百が百まで、心配するに及ばぬと思ひ、たとへば、野生の荒駒が、奔放して繫ぎ留めることが出來ない樣であつた。そこで、古しへの西秦東周に比すべき帝都の豪華を縱觀せむとして出かけ、原涉の樣な游俠の客と交を結び、一旦緩急あらば、互に其身を託さむことを約した。しかし、あてが外れて、この地に淹留し、門を出でては、尋常行路の人を逐うて、その仲間となり、むなしく、果下の馬の樣な小さい駒に鞭つて奔走して居る。眺むれば、積雪は山岡原野に被り、大風は河流を卷き上げる、この淒まじき歲暮の感懷を撫して、進退谷まつた揚句に、誰と相談しやうか。折しも、君は、東方から來たが、矢張、慷慨家の仲間であつて、偶ま閒散の官に居りし儘、その宅中に席を設けて、古しへの九邱の書を讀んで居た。しかし、帳中の燈火、油なければ、消ゆること早く、起つて、夜の

更け行くを歎じ、匏瓜ならぬ身は、求むるところ無き譯にも行かぬのに、刻下の境涯では閉口至極。しかし、軟弱諂媚の子輩の眞似をして、伶人俳優と同樣に世間から笑はれるのも本意でないといつて居た。この大言には、衆人大に驚き、千たび獻しても、一つも酬ゆることなく、丸で相手にしない。仕方がないから、時たま、わが居を尋ねて來て、酒を飲み、醉うては、長髯の飄飄たるを搔き上げて、高談する。しかし、君よ、最早、多く語るに及ばぬ、われは、既に二つの釣舟を用意した。今しも、江水春到り、鷗邊波穩かに、歸路は、自然、由るべきところがあるから、下らぬ眞似をして、自ら苦む樣なことは致さぬが善いので、さつさと一處に東に歸ることに致さう。愚圖愚圖して居ると、白髮は繁くなり易く、その時、いくら後悔しても、到底、追ッ付かぬであらう。

【餘論】起首より局促誰與謀に至るまでは、自分の事で、豪華欲二縱觀一、西秦更東周は、史官となつて南京に赴いたことを、それとなく云つたものであらう。君從二東方一來より千獻不二一酬一に至るまでは、包同知の閲歷操守を述べ、空時尋我飲より以下は、彼此の交誼に及び、到底、志を得ざるが故に、一緒に東歸しやうといつて、慰藉の意を寓したのである。

浦江鄭氏の義門

好鳥勿鎩翼。鎩翼難爲翔。
好鳥は、翼を鎩ぐこと勿れ、翼を鎩がば、翔を爲し難し。

佳樹勿翦柯。翦柯難爲芳。
佳樹は、柯を翦る勿れ、柯を翦らば、芳を爲し難し。

人生有同氣。胡忍自戕傷。
人生、同氣あり、胡んぞ、自ら戕傷するに忍びむや。

肯復多支生。誰趨急難場。
肯て復た支生多きも、誰か急難の場に趨らむ。

請看鄭家兄。爲弟死維揚。
請ふ看よ、鄭家の兄、弟の爲に維揚に死するを。

子孫復聚居。流芳久彌長。
子孫、復た聚居、流芳久しくして彌よ長し。

十世一門戶。百身一肝腸。
十世一門戶、百身一肝腸。

囊無私藏錢。釜有同炊糧。
囊に私藏の錢なく、釜に同炊の糧あり。

問男何所爲。讀書講虞唐。
男に問ふ、何の爲すところ、書を讀んで虞唐を講ず。

問女何所爲。鳴雞織流黃。
女に問ふ、何の爲すところ、鳴雞、流黃を織る。

晨興各冠珮。于于上高堂。
晨に興きて各〻冠珮、于于として高堂に上る。

聽翁敎戒言。祗受不敢忘。
翁の敎戒の言を聽き、祗み受けて敢へて忘れず。

雖生甌越區。如在鄒魯邦。
甌越の區に生まるとも雖、鄒魯の邦に在るが如し。

兩朝太史筆。特書爲褒揚。
兩朝太史の筆、特書して爲に褒揚。

行人問其廬。喬木鬱蒼蒼。　行人、その廬を問へば、喬木鬱として蒼蒼たり。
何須雞哺狗。家昌乃眞祥。　何ぞ雞の狗に哺するを須ひむ、家昌なるは乃ち眞祥。
眞祥由德生。天心果何常。　眞祥は、德に由つて生ず、天心、果して何の常ぞ。
我欲游麟溪。壽翁奉一觴。　われ麟溪に游び、翁を壽して一觴を奉せむと欲す。
莫聽豆萁詩。聽歌棣華章。　豆萁の詩を聽くこと莫かれ、棣華の章を歌ふを聽け。

【字解】【一】鎩翼　左思蜀都賦に鳥鎩翮とあつて、その注に「鎩は殘ふなり」とある、羽翼を害ふ。【二】翦柯　柯は枝條、枝を切る。【三】爲芳　花が咲く。【四】同氣　兄弟を云ふ。【五】戕傷　二字ともに、そこなふ。【六】多支生　分派の血族が多い。【七】爲弟死緋揭　姓譜に「浦江の鄭綺、四世の孫德珪、弟德璋と孝友天至、豈は几を聯れ、夜は衾を同じうす。德璋、物と忤ふ多し。仇家、陷るるに死刑を以てし、當に揚州に會逮せらるべし。德珪、弟の誣ひられしを哀み、乃ち陽つて謂つて曰く、彼、吾を害せむと欲す、何ぞ爾の事に預からむ、われ往かば蠢狀白せむと。即ち行を治す。德璋、追うて睦堅道中に至り、兄弟相持して頓足し、爭うて、死に就かむと欲す。德珪、紿くに、往くなきを以てし、夜半、間道より逸して去る。德璋、復た追うて廣陵に至れば、德珪、すでに獄に斃る。德璋、慟絕數四、骨を負うて歸葬す。墓に廬して、一たび悲號する毎に、烏鳥皆翔集して食はず」とある、維揚は即ち揚州、前に數ば見ゆ。【八】講庶唐　堯舜の道を研究する。【九】流黃　布帛の名、黃色な絲を織り込む故に名づく。【一〇】冠珮　頭に冠を戴き、腰に佩玉をつける、身じまひをする。【一一】子子　たのしげに。【一二】祗受　謹んで教を受ける。【一三】昨朝　元明二代を云ふ。【一四】雞哺狗　雞と犬と仲が善くて、犬の不在に、雞が犬の子に哺ました。韓愈の嗟哉董生行に家有狗乳出求食雞來哺之共兒とある。【一五】眞祥　ほんの祥瑞。【一六】麟溪　金華府志に「白麟溪は、浦江縣東に在り、源、金容山より出で、東流して浦陽江に入る」とある。【一七】豆萁詩　魏の文帝は其弟曹植と仲が惡く、七歩の中に詩を作れ、作り得なければ誅するといつた時、植の作つたのが、即ち豆萁詩で、その全體は、煮豆燃豆萁、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急といふのである。文帝は、之に感じて、爾後仲を善くした。【一八】棣華章　詩經に見えた棠棣之華の詩で、兄弟の和樂を歌つたものである。

【題義】姓譜に「金華浦江縣の鄭文嗣、十世同居、凡そ二百四十餘年、一錢尺帛も私せず、至大の間、その門に表す。文嗣の弟大和、家に主とし、益す嚴にして恩あり。部使者余闕、爲に東浙第一家と書す。大和の孫濂、弟湜・沂と、洪武の初、召されて見え、慰諭甚だ至り、治國長久の道を問ひ、その孝友の義、天下に聞こゆるを以て、湜を福建參議に除し、沂に禮部尚書を授く」とある。つまり、浦江の鄭氏は、義門を以て世に著聞したので、この詩は、直に其事を敍述したのである。

【詩意】綺麗な鳥は、その翼を害つてはならぬので、もし翼を害へば、飛べなくなつて仕舞ふ。よき木は、その枝を翦つてはならぬので、もし枝を翦れば、花が咲かなくなる。人に兄弟あるは、鳥の翼あり樹の柯あるが如きもので、どうして之を傷ふに忍ぶべき、しかし、世間には、隨分これを忍ぶものがある。まして、分派の血族が澤山居ると、急難の場合など、互に讓り合つて、誰も進んで驅けつけるものもない。これとは打つて變つて、ここに、鄭家の兄德珪は、弟德璋の爲に、揚州に死んだといふ名高い事實がある。そして、その子孫は、又聚まつて一つ處に居り、その評判は、久しく世に傳はつて居た。十世の間、一軒の家に居り、百人の家族は、同一の心で、囊には、臍くりの匿した錢

などなく、釜には、一緒に炊き込む米がある。男に何事を爲すかと問へば、書を讀んで、堯舜の道を研究して居るといひ、女に何事を爲すかと問へば、朝早く雞の鳴く時分から、機に坐して流黄を織つて居るとのことである。早朝に起き出づれば、いづれも、頭に冠を戴き、腰に佩玉をつけ、ちやんと身じまひを爲し、たのしげに打揃つて、高堂に上り、主人たる老翁の教戒の言葉を聞き、謹んで承はつて、決して忘れない。されば、甌越の如き田舍に生まれたとて、鄒魯の如き聖人の邦に居ると少しも異ならず、元明兩朝の史官は、特筆大書して之を褒めた。旅ゆく人が其家を尋ねると、喬木が鬱然として茂り合ひ、いかにも舊家らしく、雞が狗の子に哺ますといふ樣な事は、どうしても善いとして、家の繁昌するのは、眞正の祥瑞である。この祥瑞は、德に由つて生ずるので、天道樣の御心は、終始一つ處にへばり付いて居る譯でもなく、德あるものには、必ず福祉を下される。これは、洵に結構な話であるから、予も、白麟溪に遊んで、その家に至り、そして、主人たる老翁を祝福して、一杯を捧げたいと思ふ。それにつけても、豆萁の詩などは、聞きたくもなく、唯だ棠棣の花を歌へる彼の數章を聞いて、これに類りたいと思ふ次第である。

【餘論】起八句は總提、專ら抽象的言辭を連ね、請看鄭家兄より如レ在二鄒魯邦一に至る十八句は、鄭氏家居の狀況、兩朝太史筆より天心果何常に至る八句は、論贊的の補筆、我欲レ游二麟溪一の四句は、作者の感慨を述べ、兼ねて、欽仰の誠意を表したのである。

送王檢校之廣東

國士抱玄璞。瞽師薦朱絃。
質音豈不良。衆俗廼是捐。
勿恤衆俗捐。始昧當終宣。
志士遘時屯。歷説未見賢。
朝游秦關中。夕宿漢水壖。
遑遑詎無勞。亮節要自全。
青鞚撫東師。重光麗中天。
恢業萃羣材。虚若海受川。
眷言屬茲寄。遠抗丹徼旃。
高翰欻飛翻。孰得羈係焉。
揚芬貴有烈。崇德願無愆。
顧己尚留滯。殞涕沾前筵。

王檢校の廣東に之くを送る

國士、玄璞を抱き、瞽師、朱絃を薦む。
質音、豈に良からざらむや、衆俗、廼ち是れ捐つ。
衆俗の捐つるを恤ふる勿れ、始め昧きも當に終に宣ぶべし。
志士、時の屯に遘ひ、歷説、未だ賢とせられず。
朝に秦關の中に游び、夕に漢水の壖に宿す。
遑遑として詎ぞ勞なからむや、亮節自ら全うするを要す。
青鞚、東師を撫し、重光、中天に麗る。
恢業、羣材を萃め、虚なることは海の川を受くるが若し。
眷して言に、茲寄を屬せられ、遠く丹徼の旃を抗ぐ。
高翰、欻ち飛翻、孰れか、羈係するを得む。
芬を揚ぐる、烈あるを貴び、德を崇ぶ、愆なからむこと―を願ふ。
顧みるに、己は尚ほ留滯、涕を殞して、前筵を沾す。

【字解】【一】玄璞　まだ善く琢かぬ荒玉。【二】朱紱　太廟の瑟。【三】始昧　はじめ幽昧に沒して顧みられずに居ること。【四】時屯　時運の屯塞、廻り合せの惡いこと。【五】亮節　明白なる操守。【六】青鞋　青は東方で、緣喜のよきに取つたのであらう。鞋はくつわ。【七】恢業　宏大なる帝業。【八】眷言　眷して此にと副すべし。眷顧を垂れ給ひて此にといふ義。【九】玆寄　この重寄、卽ち檢校の職。【一〇】抗　あげる。【一一】丹徼　隋書南蠻傳に「漢、百越を平らげ、地、丹徼を窮む」とあり、古今注に「南方の徼は赤色、故に丹徼と稱するは南方の極なり」とある。【一二】旃　先頭に立てる旗。【一三】高翰　翰は羽、高鳥に同じ。【一四】繩係　つなぎ止める。【一五】揚芬　芳名を揚げる。【一六】有烈　烈は功烈。

【題義】續文獻通考に「金の尙書省、都事二員、正七品、省內宿直檢校架閣等の事に知たり」とあるから、檢校は、尙書省の僚屬で、地方政治を督するものと見える。この詩は、檢校王某の公事を以て廣東に出張するを送つたのである。但し、王某の名字は不詳。

【詩意】一國の名士にして、磨かぬ荒玉を懷にし、瞽師にして、太廟に見るが如き朱紱を張つた瑟を薦める、璞の質と紱の音と、良くない譯ではないが、衆俗は之を捐てて、丸で相手にしない。しかし、衆俗に捐てられたからといつて、格別憂ふるにも及ばず、いづれ、初の不遇も、終には宣べる時がある。君は、當代の志士でありながら、廻り合はせが惡く、處處游說して歩いたが、未だ賢とせられず、朝には秦關の中に游び、暮には漢水の邊に宿し、遑遑として、その勞に堪へぬ位であるが、本來の高節は、依然として、これを全うして居た。今しも、天子は、鑾を枉げて、東方の軍隊を統撫し、重なる光は、半天に懸り、中興の宏業、方に成つて、多くの人材を萃められ、その謙虛、士を容るることは、さながら、海が百川を受け收める樣である。そこで、君も眷顧を蒙つて、重任を辱うし、遠く旗を押し立てて、南方の涯に向はれるとのこと。たとへば、高天を度る鳥が、忽ち飛翻するが如く、誰か之を繫ぎ止めやう。さはれ、芳名を揚ぐるには、功烈あるを要し、德を崇くするには、過失の無い樣にするのが肝腎である。これに反して、予は尙ほ愚圖愚圖と、此地に滯留する腑甲斐なき、これを思へば、涙、自ら流れて、筵前を霑すばかりである。

【餘論】起六句は、譬喩を以て筆を行り、志士遭二時屯一の六句は、王檢校昔日の不遇、靑鞋撫三東師一の六句は今日の得意を敍し、高翰欲飛翻の四句は、規戒を寓して、之に忠告し、顧己尙留滯の二句は、翻へつて、おのが身に緣到して、まさしく痛切である。

姚牧林軒

林居孰云陋。幽意欣自適。
鄰無醉歌吏。室有玄言客。
風疏櫛當晨。月皎琴御夕。
塵駕衆何淹。窮年抱空寂。

姚牧の林軒

林居、孰れか陋と云ふ、幽意、自適を欣ぶ。
鄰に醉歌の吏なく、室に玄言の客あり。
風は疏なり櫛の當る晨、月は皎なり琴を御する夕。
塵駕、衆、何ぞ淹まる、窮年、空寂を抱く。

【字解】【一】陋　いぶせく汚い。【二】玄言　老荘の玄理を論ずる。【三】塵駕　俗塵中の車。【四】何淹　淹は一つ處に留まつて居ること。

【題義】この詩は、姚牧といふ人の林軒に寄題したので、牧の字並に閲歴は不詳。

【詩意】誰か、林間の居宅をいぶせく汚いといふか、その中、静幽の意あつて、主人が優游自適すれば、それで澤山。鄰には、酔つた揚句、無遠慮にも下手に歌ふ小役人も居らず、室中には、老荘の深遠なる玄理を縱談する客人がある。朝早く、頭髪に櫛を當てる時には、微風徐に度り、夕静に、琴を彈ずる時には、明月皎皎として來り照らし、ともに風情がある。衆人は、風塵の中に車を乘り入れて、如何なれば、久しく留まつて居るか。これに反して、ここの主人は、年中、ひとり寂寞に甘んじて、行ひ澄まして居る。

【餘論】前四句は、抽象的に林軒の幽意を述べ、次の二句は、現實的の敍景。結二句は、衆人と對比して、反視的に愈よ其趣を闡明したのである。

書東圃老翁壁

東圃老翁の壁に書す

燕雀各已乳。飛飛風日暄。

燕雀、各〻すでに乳す、飛飛として風日暄なり。

一徑入桑苧。幾家同灌園。

一徑、桑苧に入り、幾家か同じく園に灌す。

莫將當世事。問與老翁言。

當世の事を將て、問に老翁と言ふ莫れ。

【字解】【一】已乳　その雛を育て上げた。【二】桑苧　苧は麻。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】春の末、燕や雀は、すべて其雛を育て上げて、のどけく暖き風日の中に飛んで居る。一すぢの細徑は、桑麻茂れる間に繞り入り、ここに老翁の居宅があつて、あたりの家では、何處でも、畑の作物に水を灌いで居る。東圃の老翁は、全く世間と隔離して居るから、當世の事に就いて、話をした處で無益である。

【餘論】瑣瑣たる短章、人が人だけに、詩も亦た格別の者であらう筈がない。

題王濛聽雨樓卷

王濛の聽雨樓の卷に題す

春雲靄江郭。鳩鳴朝夢餘。
樓中風颯至。煩抱澹雲除。
歴歴亂橋樹。蕭蕭窓影虚。

春雲は江郭に靄たり、鳩は鳴く朝夢の餘。
樓中、風、颯として至り、煩抱、澹雲除く。
歴歴たり亂橋の樹、蕭蕭として窓影虚し。

如何門外水。泥潦沒行車。

【字解】【一】煩抱　煩悶せる懷抱。【二】風橋　縱横に幾つも掛け渡したる橋。【三】泥潦　前に見ゆ、潦は雨後の出水。

【題義】王濛は、黃鶴山樵と號し、元代知名の畫家。この首は、その筆に係る聽雨樓の畫卷に題したのである。但し、聽雨樓の所在・來歷等は、分からない。

【詩意】春雲は、靄靄として、江邊の城郭を籠め、朝に夢が覺めると、鳩が鳴いて、今日は、どうやら雨模樣である。やがて、風颯然として樓中に吹き入れば、煩悶せる胸の薄雲は忽ち拂はれたが、果然、雨になつて、今まで判然して居た亂橋の木木も、ぼんやりと見えなくなり、蕭蕭聲中、窓には、何物の影だに映さない。この雨が晴れると、江山の景色は、一しほであらうが、門外には、泥水深くして、車を沒する位、とても、すぐには、外出することが出來ぬであらう。

【餘論】仔細に玩味すると、毎句、いづれも畫でかけない處を詩で補つて居るので、措辭は、未だ巧妙ならざるも、流石に、題畫の趣を解し得たものである。

天王寺

深寺隱桃花。幽幽在山阻。

天王寺

深寺、桃花に隱れ、幽幽として山阻に在り。

諸天藤蘿外。昏黑路防虎。

諸天、藤蘿の外、昏黑、路に虎を防ぐ。

聞說春時游。辛夷花可數。

聞くならく、春時に游べば、辛夷、花數ふべしと。

【字解】【一】深寺　奥深い寺。【二】幽幽　物靜なる貌。【三】山阻　山の難所。【四】諸天　佛說に三十三天となせるより云ふ。【五】辛夷　花の名、和名こぶし。

【題義】原注に「洞庭山馬稅城桃花塢に在り」と記してある。

【詩意】天王寺は、奥深く桃の花の中に隱れて、靜に山の難所に位置して居る。諸天は、藤蘿の外に高く、滿目森邃、夕暮には、虎が路に出るから、用心せねばならぬ。聞けば、春の頃、來り游べば、こぶしの花は、粲として數ふべく、なかなか善き眺だといふ話である。

【餘論】前四句で意は盡きて居る。後二句は、補筆で、辛夷と桃花と對映する處に、多少の趣はあるが、あまり振つては居らぬ。

周元公祠

邈哉宋周子。襟懷迥無塵。
精微闡太極。默契心自純。

周元公の祠

邈たるかな、宋の周子、襟懷、迥として塵なし。
精微、太極を闡き、默契して、心、自ら純なり。

遠摹羲皇畫。示我羲皇人。
道既倡東南。闇然韜吾眞。
祠燬罹兵燹。祀廢遘時屯。
臨風一俯仰。恍惚如陽春。

【字解】【一】迥哉　遙遠の貌。【二】迥無塵　はるかに隔つて俗塵がない。【三】精微　その思索のこまかきを云ふ。【四】闇明する。【五】太極　宇宙の本體、周濂溪の太極圖說を指す。【六】羲畫　羲皇は卽ち伏羲、はじめて八卦を畫した。そして、太極圖は、伏羲の八卦を眞似たといふこと。【七】羲皇人　周濂溪の人物は、伏羲時代の人といふべく、決して、末世の生まれとは思はれないといふ義。【八】韜吾眞　おのが眞精神を包み匿す。【九】時屯　前に送三檢校之廣東一の詩中にも見えて居た、廻り合せの惡いこと。

【題義】周元公は、卽ち周敦頤、濂溪と號し、邵康節・張橫渠、及び二程子と竝稱された宋代道學の元祖である。題下の原注に「吳縣の胥臺鄉に在り、宋の嘉定間、元公四世の孫、和州觀察使興裔、奏して立つ。後、兵火に遭ひ、わづかに遺址を存す」とあつて、この詩は、卽ち其祠の址を目睹して作つたのである。

【詩意】宋の濂溪先生は、歿して、すでに遠いが、その人物たるや、襟懷瀟洒、はるかに隔つて、少しも塵俗に染まなかつた。その思索は、精微を極め、仍つて、太極圖を發明し、心は宇宙と冥契して、自然清純であつた。濂溪は、遠く伏羲が八卦を畫したのを眞似たのであるが、彼自身、亦た伏羲時代の人たることを示して居る。彼の道は東南に行はれたが、闇然として、その眞精神を包み藏して、すこしも、世に見せつける樣なことは爲なかつた。ここには、祠があつたが、惜しいかな、兵燹に罹つて、燒け亡びて仕舞ひ、時の廻り合せが惡くて、祀も久しく廢して居る。ここに、風に臨んで俯仰し、その人と爲りを冥想すると、恍惚として陽春の如く、藹然として特に親むべきを覺える。

【餘論】前八句は濂溪の人物學問を盡し、後四句は、祠址に就いて言ひ、結二句は前に顧應し、隨つて、章法も自然緊密である。

309
65

終